

山梨県北巨摩郡高根町

川又坂上遺跡

——八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書——

1993. 3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

山梨県北巨摩郡高根町

川又坂上遺跡

—八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書—

1993. 3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

序

本書は、八ヶ岳広域農道建設にともない1992年度に発掘調査の行われた、山梨県北巨摩郡高根町箕輪に所在する川又坂上遺跡の調査報告であります。

本遺跡が存在する八ヶ岳南麓は、縄文時代や平安時代を始めとして各時代の遺跡が数多く残されている地域であります。この広大な地に八ヶ岳広域農道建設事業が進められておりますが、この事業に先立ち当埋蔵文化財センターではこれまでに、須玉町西川遺跡をかわきりに高根町から小淵沢町にいたるまで6箇所程の遺跡の調査を行い、多くの成果を上げてきたところであります。川又坂上遺跡の今回の調査地点については、1991年度の試掘調査により遺跡であることが確認されたものであります。すでに1984年に高根町教育委員会により隣接地の発掘が行われており、縄文後期を中心とした遺跡であることが知られておりました。

今回の調査は2ヶ所の地区が対象となっており、第1地区は平均幅10m長さ120m余りの範囲であり、主に尾根の斜面から谷部にかけての地域が該当しました。ここから400mほど離れた尾根の平坦部に第2地区がありますが、ここは拡幅部分のため調査面積は100㎡に満たない程の狭い面積です。調査の結果、第1地区からは縄文後期初頭の敷石住居2軒、建物跡とみられる柱穴列、それに黒曜石製の石鏃を作ったとみられる製作址が発見されました。全体的にみてもこの時期の資料は少なく、特に石器製作の場が明らかになったことも加えると、この時代の研究にとって大きな成果が得られたこととなります。他に縄文晩期の土器も多く出土し、また古墳時代から平安時代の住居も発見されております。第2地区では縄文中期後半を中心とした土坑群が調査されました。これら二つの地区の調査からみると、本遺跡は縄文時代を中心とした大集落であり、さらに古墳時代から平安時代の集落も形成されていた、非常に規模の大きい遺跡であることが分かります。今回の調査は、この大きな集落の東端と中央部の一部が調査されたこととなります。今後の調査研究により、この遺跡の全貌が徐々にではあれ解明されることに期待したいと思っておりますが、今回の調査が研究の一助となれば幸甚です。

未筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

- 1 本書は、広域営農団地農道整備事業（八ヶ岳広域農道整備事業）に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが実施した北巨摩郡高根町大字箕輪及び大字箕輪新町に所在する川又坂上遺跡の発掘調査報告である。
- 2 本調査は山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金を受け、実施したものである。
- 3 本書の執筆・編集は新津健、三田村美彦が行った。分担は第1章・第3章出土土器・第4章1節を新津が、第2章・第3章遺構、出土石器、5号址出土土器の一部・第4章2節を三田村が行った。
- 4 遺物実測・拓本・トレース・図面整理は名取洋子、伊東順子、望月和佳子、内藤由紀子、西名博恵、金井京子の協力を得た。
- 5 本報告書に関わる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 6 遺跡の地質・地形ならびに石製品の石質については帝京大学山梨文化財研究所、河西 学氏のご教示を得た。

凡 例

- 1 遺構・遺物挿図の縮尺は次のとおりである。
（遺構） 全体図 1/400 住居等 1/60 土坑 1/40
（遺物） 土器実測 1/4 拓本 1/3
石器（石鏃 2/3、石斧・磨石 1/3、大型品 1/6）
- 2 遺構断面図中のレベルポイント部分にあたる数字は標高を表す。
- 3 遺構図中のマークの意味は次のとおりである。
●・・・・・・土器 ★・・・・・・石器 □・・・・・・剥片

目次

序文

例言・凡例

第I章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織	5
第II章 地理的環境と周辺の遺跡	6
第III章 発見された遺構と遺物	8
第1節 第1地区の遺構と遺物	8
第2節 第2地区の遺構と遺物	33
第IV章 検討	51
第1節 土器について	51
第2節 遺構について	53

挿図目次

第1図 発掘地区の位置	第22図 1区5号址出土石器	第43図 2区出土石器
第2図 第1地区発掘区設定図	第23図 1区6号址実測図	第44図 2区土坑出土石器
第3図 第2地区発掘区設定図	第24図 1区6号址出土石器	第45図 2区土坑出土石器
第4図 第1地区全体図	第25図 1区7号址実測図	第46図 2区出土石器
第5図 第2地区全体図	第26図 1区7号址出土石器	第47図 縄文時代遺構配置図
第6図 周辺の遺跡	第27図 1区8号址実測図	
第7図 1区1号址実測図	第28図 1区出土石器	
第8図 1区1号址出土石器	第29図 1区6・7・8号址出土石器	
第9図 1区2号址実測図	第30図 1区土坑実測図	
第10図 1区2号址出土石器	第31図 1区土坑実測図	
第11図 1区2号址出土石器	第32図 1区土坑出土石器	
第12図 1区2号址出土石器	第33図 1区溝実測図	
第13図 1区3号址実測図	第34図 1区段状遺構実測図	
第14図 1区3号址出土石器	第35図 1区包含層出土石器	
第15図 1区4号址実測図	第36図 1区包含層出土石器	
第16図 1区4号址出土石器	第37図 1区包含層出土石器	
第17図 1区4号址出土石器	第38図 1区包含層出土石器	
第18図 1区5号址実測図	第39図 1区包含層出土石器	
第19図 1区5号址遺物出土状況	第40図 2区1号址実測図	
第20図 1区5号址出土石器	第41図 2区土坑実測図	
第21図 1区5号址出土石器	第42図 2区土坑群実測図	

表目次

第1表	石器観察表
第2表	石器観察表

図版目次

図版1	遺跡近影
図版2	1区遺構
図版3	1区遺構
図版4	1区遺構
図版5	1区遺構
図版6	2区遺構
図版7	出土遺物
図版8	出土遺物

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過

川又坂上遺跡は北巨摩郡高根町大字箕輪から大字箕輪新町にかけて位置している。この地区は八ヶ岳広域農道の建設が予定されていた地域であり、1990年11月に山梨県農務部峡北土地改良事務所から県教育委員会文化課に、具体的な工事計画が提出された。高根町教育委員会の行った分布調査報告書によると、この一帯には下原遺跡および川又坂上遺跡として登録されている周知の遺跡が所在しており、文化課から依頼を受けた山梨県埋蔵文化財センターでは現地踏査を行うとともに、翌1991年5月に試掘調査を実施した。その結果、縄文中期から後期にかけての土器が出土するとともに、いくつかの落ち込みも確認された。

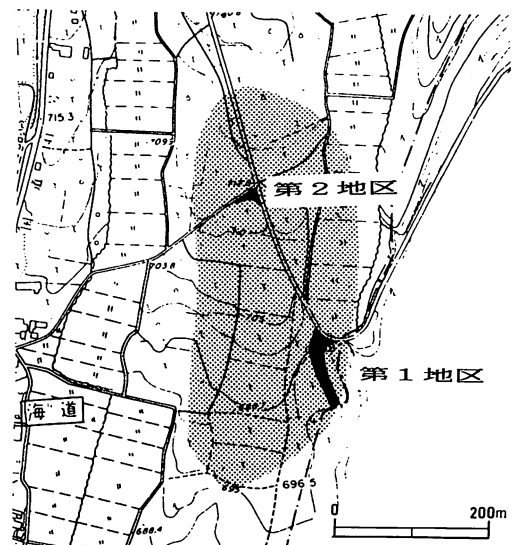
その成果に基づき、文化課・埋蔵文化財センター・耕地課・峡北土地改良事務所で協議を行い、調査は山梨県埋蔵文化財センターにより同年5月11日から9月30日まで行われた。また、発掘調査終了後引き続き整理作業が行われ、報告書作成に至った。

[文化財保護法に基づく手続き]

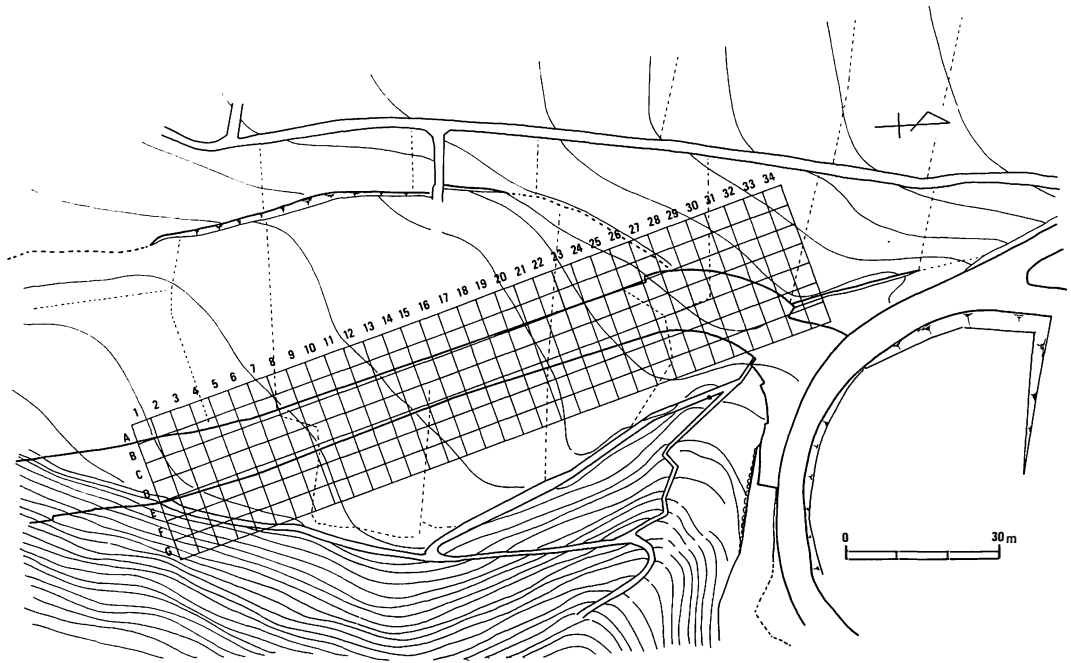
- 1992年（平成4）4月21日 山梨県教育委員会教育長 発掘通知を文化庁長官に提出
- 10月20日 文化庁より発掘通知の受理通知
- 10月12日 山梨県教育委員会教育長 遺物発見通知を長坂警察所長に提出

第2節 発掘調査の概要

発掘調査は、工事計画箇所に基づき2箇所の地区を対象とした。第1地区は尾根の東斜面から谷部分に該当するが、高根町分布調査報告書によるとこの地区の西に接して下原遺跡が、北に接して川又坂上遺跡が所在している。特にこの川又坂上遺跡については昭和59年度に町教育委員会により発掘調査が行われており、縄文住居3軒（中期後半1、後期初頭2）や平安住居1軒が発見されている。今回の第1地区はこの昭和59年度調査地区の南に続くものである。第2地区は第1地区の北約400mに位置するが、これは町分布調査の下原遺跡の範囲に含まれるものである。地形からみると、東側に浅い谷を伴った南北に長い尾根が走っ



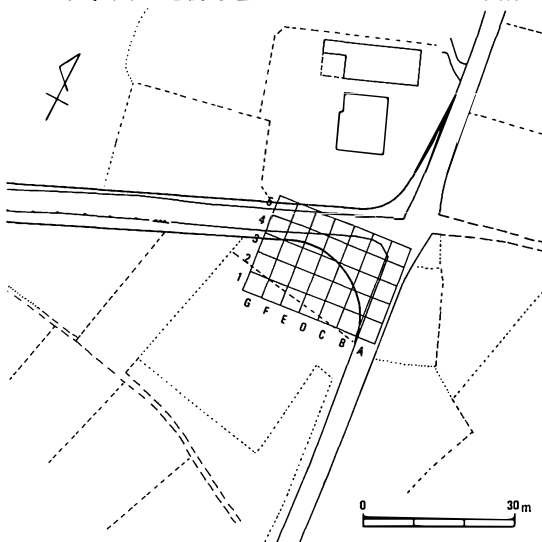
第1図 発掘地区の位置（1/10,000）



第2図 川又坂上遺跡第1地区発掘区設定図(1/1,500)

ており、この尾根の平坦部が下原遺跡、尾根の東斜面から谷にかけてが川又坂上遺跡となっていて、本来は一連の遺跡としてとらえられるものと思われる。従って今回の調査では一括して川又坂上遺跡とした(第1図)。

第1地区は平均幅10m、長さ120m余りの調査範囲であり、発掘区内に一辺4mの方眼を南北方向に1~34区、東西方向にA~G区設定し全面的に調査を行った。この地区は尾根の東斜面から谷部分に該当しているが、谷の中央部にあたる南半分(1~18区)からは遺構は発見されず、出土遺物も僅かでありここまでは集落が延びていないことが分かった。これに対して斜

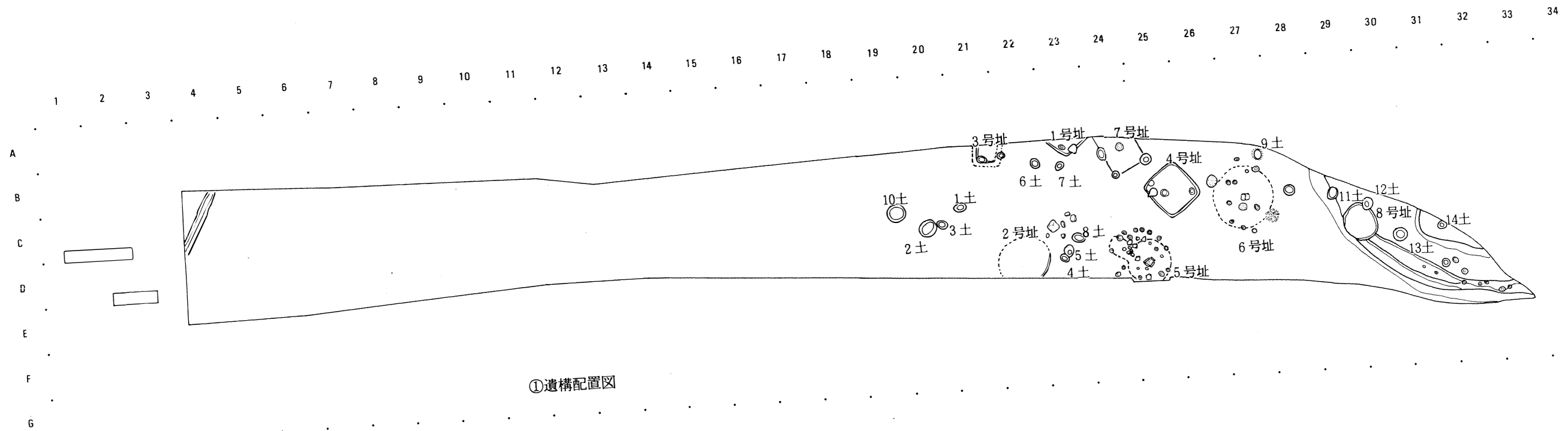


面部に近い北半分(19~33区)には縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が多く発見された。縄文時代については、中期後半の竪穴遺構1、後期初頭の敷石住居2、石鏃製作址1、中期終末から後期初頭の建物址とみられる柱穴列1、土坑14があり、包含層からは晩期水I式土器破片が多く出土した。他に古墳時代中頃の竪穴遺構1、平安時代の住居2、それに近世まで逆上れる道路状遺構や溝も発見された。以上から特に本地区については縄文・古墳・平安各時代の集落の東端にあたる箇所が調査されたものと思われる。第2

第3図 川又坂上遺跡第2地区発掘区設定図(1/1,500) 地区は尾根の最高所(標高714m)に近い平



②遺物出土地点图



①遺構配置图



第4图 第1地区全体图 (1/400)

坦部に位置する。一辺4mの方眼を南北に1～5区、東西にA～G区まで設定したが、既設道路の拡幅部分であり調査面積は100㎡程度である。中期中葉から後期前半の土器が多く出土し、中期後半の竪穴状遺構1、土坑11基が発見された。

ほかに、早期押型文・条痕文・前期初頭繊維土器も少量ながら出土しており、本遺跡は縄文時代の大規模な集落址であり、さらには古墳時代から平安時代にまでも集落が形成されていたことが分かる。今回はこの広範囲な遺跡の東端と中央部の一部が調査されたことになる。

第3節 調査組織

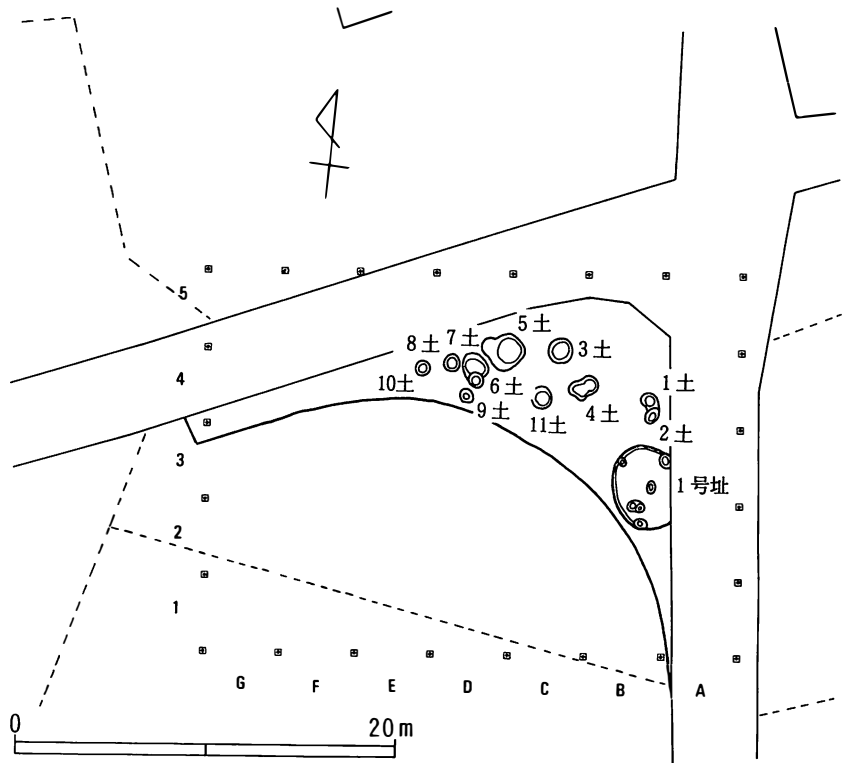
調査主体 山梨県教育委員会
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査担当者 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事）
 三田村美彦（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員・整理員

小林文治、大橋 博、輿水良教、小林昭子、清水まさ子、輿水幸子、八巻久子、小宮山きよ、井富保仁、中島當子、小川せき子、名取洋子、伊藤順子、望月和佳子、内藤由紀子、金井京子、西名博恵

協力者・機関

山梨県耕地課、同峡北土地改良事務所、高根町教育委員会、高根町役場、田丸又一



第5図 川又坂上遺跡第2地区全体図(1/400)

第Ⅱ章 地理的環境と周辺の遺跡

川又坂上遺跡は高根町の東南、須玉町との境界に位置する。八ヶ岳南麓の広大な裾野はその東側を須玉川による大きな開析により、比高差約50mを測る崖線が形成され、その縁辺に第1地区は位置する。この台地縁辺部には須玉川に併走するように小さな谷が入り、調査区の大部分がこの谷に帰属する。調査区南端の斜面部を除き、谷部は暗褐色の縄文包含層下にローム層が検出されず、径約10～100cmまでに及ぶ安山岩系の礫を多量に包含する暗黄褐色粘土層が堆積しており、この谷が大規模な土石流によって形成されたことが推測される。標高は700m前後を測る。第2区は上記した谷の西側尾根上に位置する。本地区では全面にローム層の堆積がみられ、1地区とは対照的なあり方を示す。標高は714mを測る。

川又坂上遺跡の立地する八ヶ岳南麓、及び須玉川東岸にはその豊かな水源の恩恵により先史から多くの遺跡が存在する。本遺跡の主要な時期である縄文時代中期末から後期にかけての遺跡を概観してみると（第6図）、須玉川東岸では河岸段丘を中心として該期の遺跡が立地している。川又遺跡（11）では後・晩期の遺物と該期の敷石住居1件が検出されている。川又南遺跡（2）では中期末～後期初頭にかけての埋甕群、住居址のほか、黒褐色包含層中から後期初頭称名寺～堀之内1式の土器片が多量に出土した。桑原遺跡（3）では後期の住居址2軒が検出されたほか、耳飾りや多量の石鏃等が出土している。飯米遺跡（11）では中期後半の住居址と共に中期後半から後期初頭の遺物が多く出土している。須玉川西岸、八ヶ岳南麓の裾野に目を移すと、配石遺構を伴う後・晩期の集落として国の史跡となった金生遺跡（9）、金生遺跡とはほぼ同時期で同様の規模、内容を有すると考えられる石堂遺跡（5）、配石遺構を伴う後期の集落として青木遺跡（4）、姥神遺跡（6）等があげられる。この他堀之内～加曾利B式期の敷石住居址を検出した豆生田第3遺跡（7）、堀之内式期の住居址を検出した別当遺跡（8）がある。これら八ヶ岳南麓における後・晩期の遺跡、特に加曾利B式期以降は低位の尾根上から谷への斜面部に立地する傾向が指摘され（註1）、より高位の尾根上に形成される中期集落遺跡とは異なるあり方を示し、注目されている。甲ッ原遺跡（10）でも加曾利B式に比定される土器片が採集されているが、昨年報告された尾根上の調査（註2）では当該期の遺物、遺構は検出されていない。本遺跡でも第1地区からは中期末から後期初頭にかけての遺構・遺物が谷部を中心に検出されているのに対し、高位の尾根上に立地する第2地区では中期中葉から後葉の遺構・遺物がその主体を占め、両地区間における遺跡の立地と時期差にみられる傾向は注意を要する。

註

註1 新津 健 1992 縄文晩期集落の構成と動態 八ヶ岳南麓・金生遺跡を中心に
『縄文時代 第3号』

註2 山梨県教育委員会 1992 『甲ッ原遺跡概報Ⅰ』



第6図 川又坂上遺跡と周辺の遺跡（中期末～後期）

第3章 発見された遺構と遺物

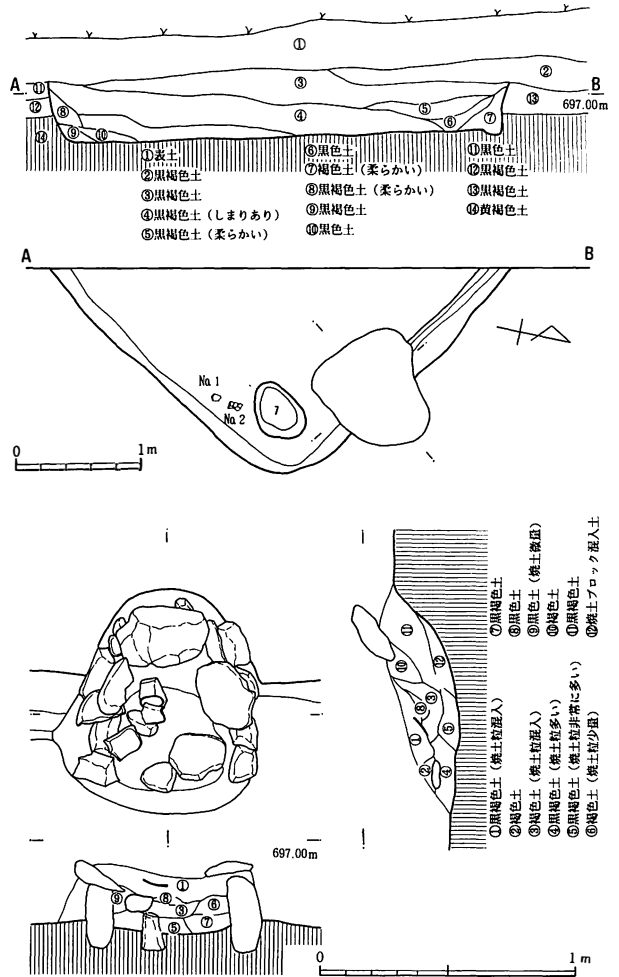
第1節 第1地区の遺構と遺物

1号址 (第7図)

B-21グリットで検出された。大部分は調査区外となり北東のコーナー部分のみ確認されたため規模は不明だが、方形プランとなろう。カマドは北壁の東側に片寄って検出された。長軸90cm短軸80cmの掘り方を持ち、両袖は平石を立てて構築されていた。天井も現状では崩落しているが平石を用いて構築されていたと考えられる。火床面の中央よりやや西側では柱状の石を用いた支脚が検出された。壁高は残存良好な箇所では20cmを測るが、調査区断面で縄文時代の包含層を切り込んで構築されている事が確認され、本来はより高いものと想定される。北壁のカマド西側では周溝が検出され、東側では深度6cmを測る皿状の落ち込みを検出し、この周辺から台付甕の破片がまとまって出土した。床面はほぼ平坦で、強く締まっている。

出土土器 (第8図)

1はカマド内から出土した土師器杯の底部破片。底径8cm余りを測り、見込み部には僅かながら放射状の暗文が認められ、さらに一部ながら山形の線刻がみられる。淡い赤化色を呈し、表面はややザラついている。底面中央には糸切り痕が僅かに残るが全体に調整されており、やや丸みがある。胎土、色調、焼成に問題はあがるが、全体の感じや暗文などから甲斐型杯に類似しており、これに当てはめるとⅦ期とされる一群に位置付けられようか。2は住居東壁下の床面から出土した台付甕の破片である。胴部中位を欠く口縁部と底部の破片であるがおそらく同一個体とみられるもので、図のように推定復元してみた。底部も高台状に残存しており、その部分は摩滅しているが本来は図のような台であったと思われる。器壁は2~3mmと薄く、器面には削り痕がよく認められる。色調は赤褐色で口径

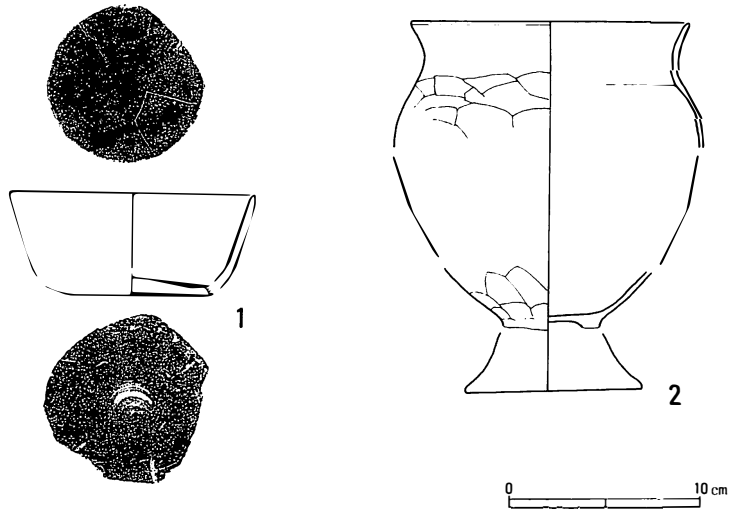


第7図 第1地区1号址実測図 (1/60 カマド 1/30)

14.3cm、器高19.3cmと推定できる。いわゆる武蔵型の甕であろうか。

2号址（第9図）

E・F-22グリットで検出された。直径約3mの円形の範囲で多量の黒曜石製剥片・碎片が出土したため精査したところ、北側の一部で落ち込みが確認された。一部調査区外となるが大部分は調査できたと思われる。



第8図 第1区1号址出土土器（1/4）

本址に伴う施設等は確認できなかった。遺構底面は地山の暗黄褐色粘土層に含まれる多量の安山岩系礫が露出し凹凸がある。本址の特徴は、上記したとおり多量の黒曜石製剥片・碎片が出土したほか、石鏃・錐器・楔形石器・二次加工ある剥片・石核・打製石斧・磨石・凹石・石錘等、多種に渡る石器と黒曜石の原石、及び後期初頭称名寺式を主体とする土器片が直径約3mの円形の範囲で集中的に出土した事である。このうち石器と土器の垂直分布をみると床から約20cm浮いたレベルで遺物がまとまって出土している傾向が窺われる。この様な特徴を持つ本址がどのような性格の遺構であるかは第4章で改めて検討を加えたいが、出土した土器から、後期初頭に帰属する遺構として捉えたい。

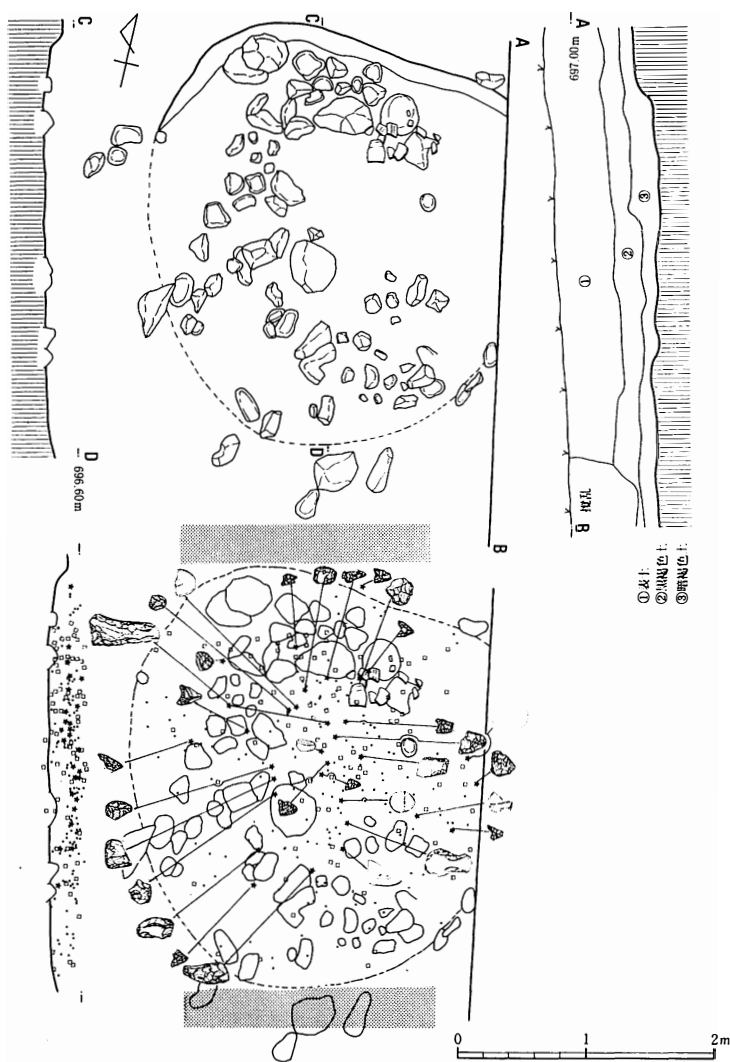
出土土器（第10図）

第4群土器を主体とする。なお土器の分類については包含層出土土器の項目を参照。1・2は微隆起間に縄文が施される土器。3・4・7は口縁下に沈線で区画された縄文帯がみられる深鉢形土器。5は内湾する口縁で全体に縄文が付けられている。6は口縁と平行に磨消縄文帯が走る。8～12は曲線化した磨消縄文帯で飾られる一群。特に12は中央に円形刺突文がみられる。14・15は沈線区画と列点文からなる土器。16も同様の可能性がある。17から22は沈線のみ土器である。特に縦方向区画されるような特徴のあるもの。但しこれらは繋がってはならず明確に区画文をなすかは不明。23は間隔の狭い沈線。24～26は集合沈線の土器で櫛歯状工具によるものであろう。28～31は円形刺突文ないし、刻み目のみられる土器。特に28・29は磨消縄文帯の中に、30は沈線文間にそれぞれ円形刺突文が連続する。27・32は無文土器であるが、27は壺形土器と思われ頸部に隆帯が巡る。以上について1・2が1類a種、27が1類b種、3・4が2類、6～13が3類、5が4類、14～16が5類、17～23が6類（特にb種）、24～26が7類、28～31が8類、32が9類に分類できる。

出土石器（第11・12図）

本址から出土した石器は石鏃21点・錐器4点・石錘2点・磨石3点・凹石1点・打製石斧4

点・楔形石器5点・二次加工ある剥片13点・石核1点・剥片491点・碎片1305点を数える。このうち剥片・碎片に関しては調査時点で取り上げられないものが相当数含まれており、その数値が更に増える事は確実である。1～15・27～31は石鏃として捉えた。この中には未製品と考えられるもの(11～13)も含まれている。15も石鏃の範疇で捉えたが先端部の念入りの調整と基部にみられる長軸方向への剥離、形態等を考えると錐器の可能性もある。25・26は有溝石錘である。26は溝が全周しておらず未製品の可能性がある。素材となる輝石安山岩は八ヶ岳南麓で容易に入手でき、磨石・石皿等にもよく用いられる。40の打製石斧は基部と刃部が90cm離れて出土し接合し

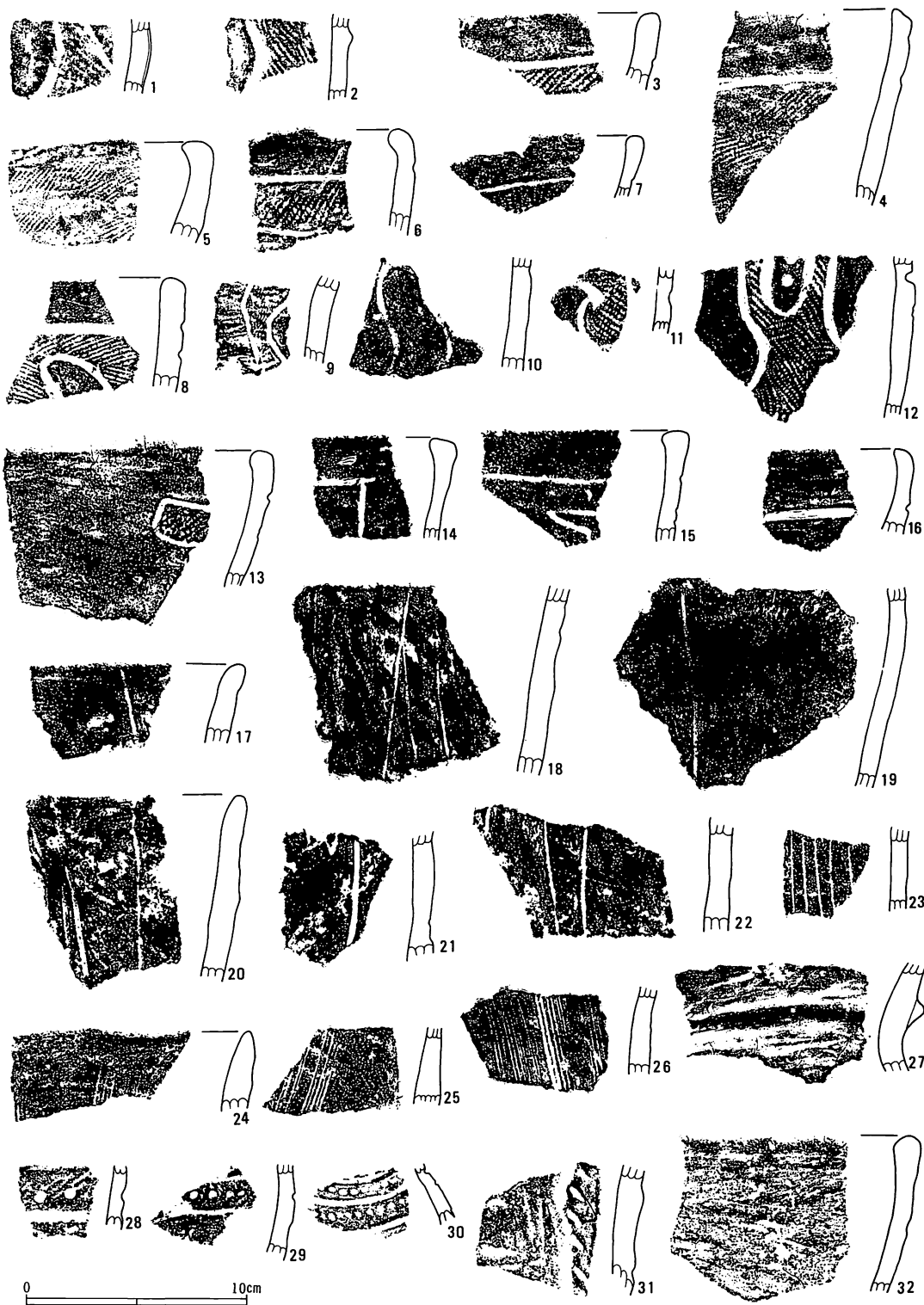


第9図 第1区2号址実測図・遺物出土状況図(1/60)

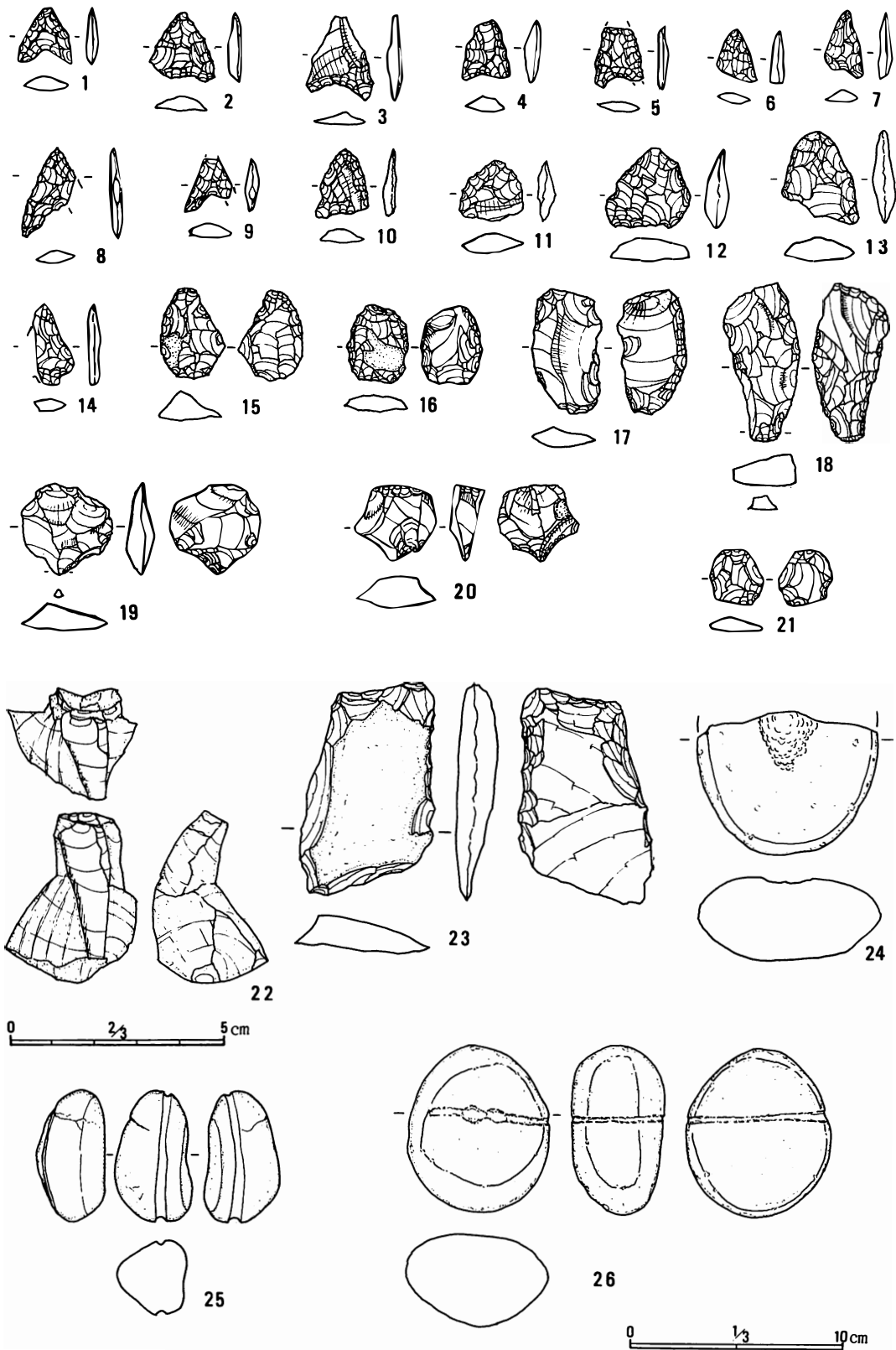
たもので、長軸約24cmを測り大型の部類である。42も基部を欠損するが刃部の大きさを考えると40とほぼ同規格の打製石斧になろう。

3号址(第13図)

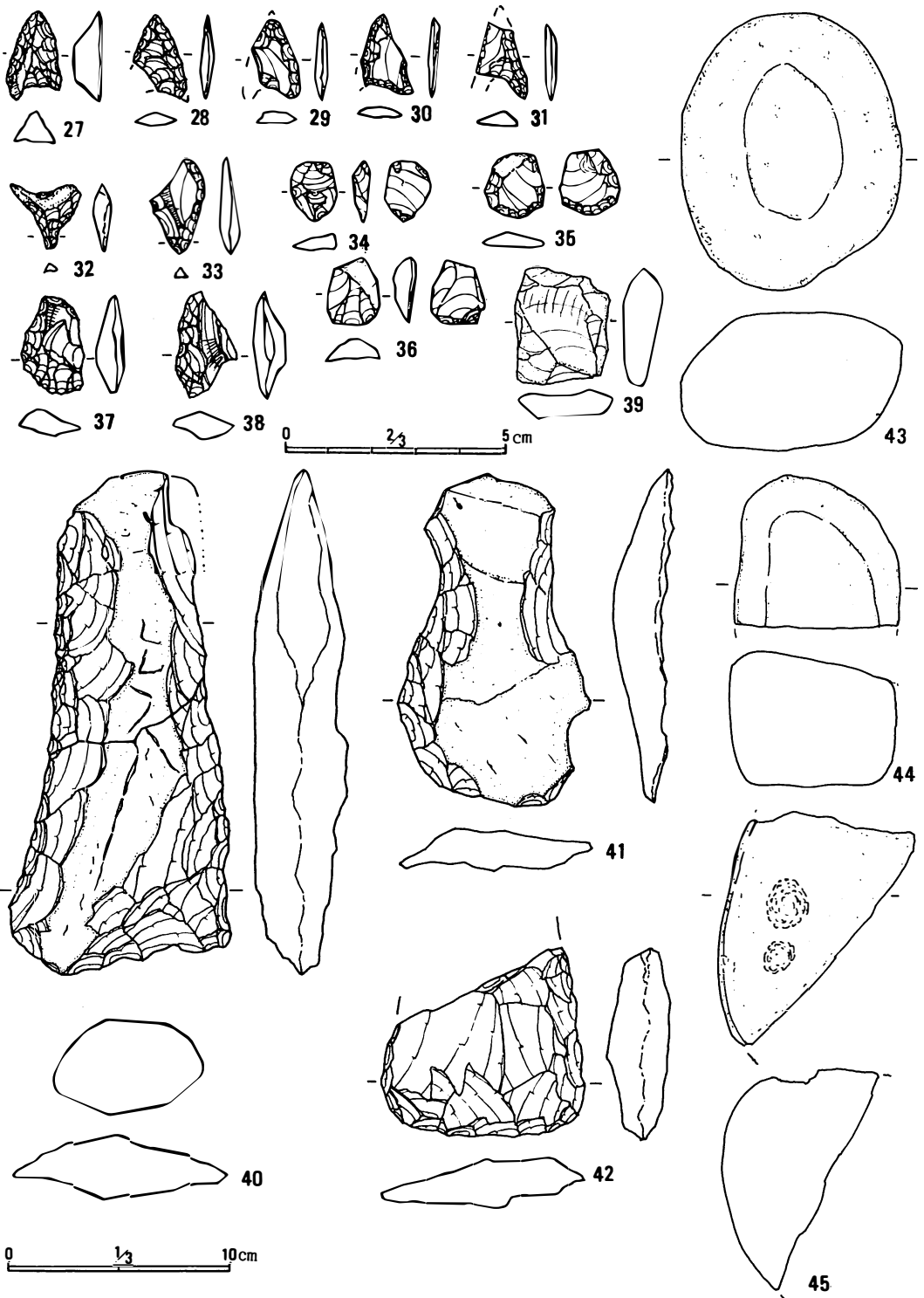
B-21・22グリットで検出された。黒色の包含層中に約2×3mの方形を呈する黒褐色土の広がり土師器甕(第14図)が検出されたため、精査したところ約1.8×1.6mの方形を呈する掘り込みを確認した。北壁は途中で不明瞭となるが遺構自体は調査区外へ延びるものと思われる。北東隅、南東隅及び中央には皿状を呈する落ち込みが検出された。遺構底面に硬化した箇所は認められない。上記した特徴を持つ本址の性格としては住居址の掘り方が考えられよう。黒色の包含層中で検出した暗褐色土の広がり床の可能性があり、図示した土師器甕は断面図から判断すると、ほぼ床面直上で出土したと考えられる。



第10图 第1地区2号址出土土器拓图(1/3)



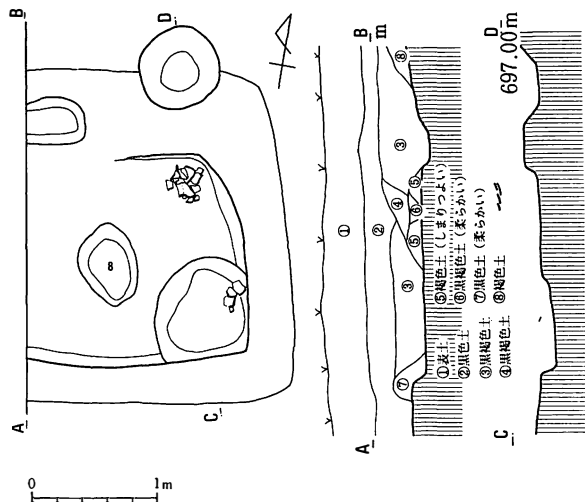
第11图 第1地区2号址出土石器 1~23=2/3 · 24~26=1/3



第12图 第1地区2号址出土石器27~39=2/3·40~45=1/3

出土土器 (第14図)

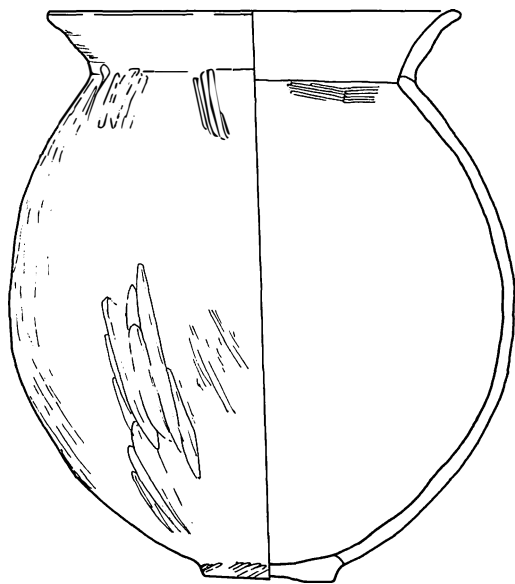
北壁寄りの箇所から遺構底面より30cmほど浮いて出土した土師器甕。横倒しに潰れた状態であった。二分の一強の破片であるが、口径21.5cm、器高29.5cmを測る。突き出した底部、やや球形に近い胴部、外反気味の口縁部等を特徴とする。外面一部黒色ながら全体に明るい褐色を呈し、内外面ともよく磨かれている。口縁部にヨコナデ、頸から肩にかけてタテヘラ磨き、胴部中位から下部にかけてヘラケズリ痕がみられる。また頸部内面の一部に刷毛目状の調整痕が残されている。古墳時代中頃の甕であろう。



第13図 第1地区3号址実測図 (1/60)

4号址 (第15図)

C-25・26、D-25・26グリットで検出された。南北約3.5m、東西約4mの方形プランを呈す。カマドは南壁の西側寄りに設けられ、平石で構築されたと思われるが、現状では袖の一部を除いて崩落している。床は壁際を除いてよく締まっている。壁は残存良好な箇所で20cmを測り、北・西壁では周溝も確認された。カマド内及び周辺、カマド西側で検出された土坑からは、坏・甕等がまとめて出土し、北西コーナーでは18.5×16cmの方形を呈す大型の砥石 (第17図) が出土した。



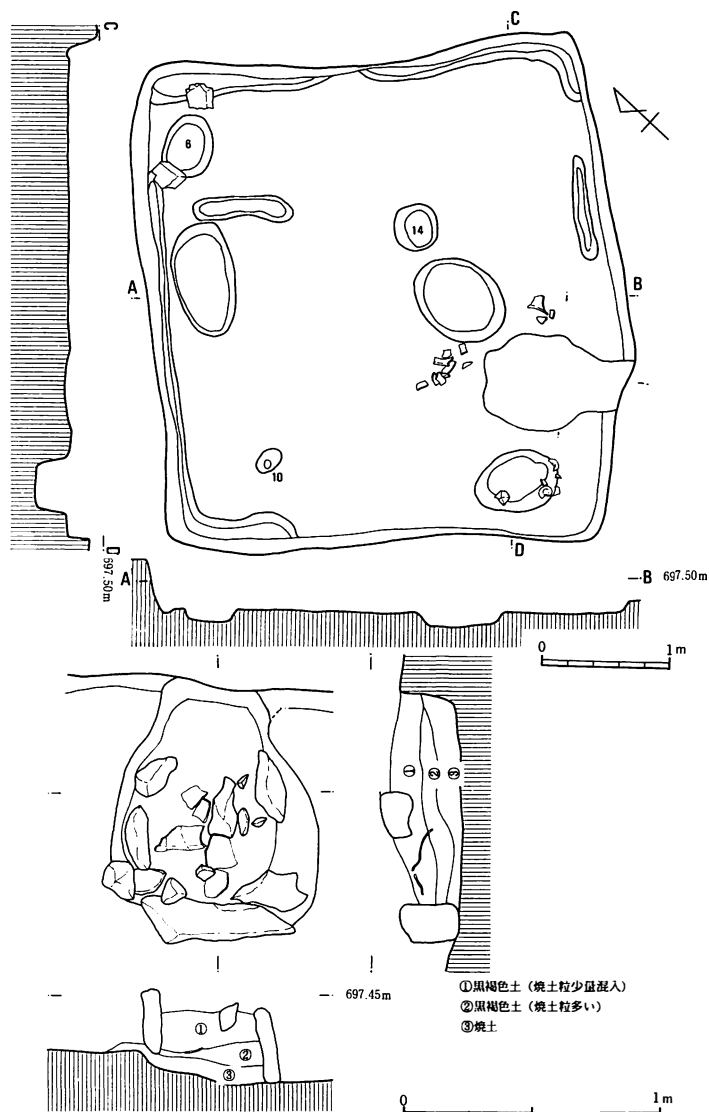
第14図 第1地区3号址出土土器 (1/4)

出土土器 (第16図)

1～3は土師器坏。1がカマド正面の床から出土。口縁の一部を欠き、口径1

1.2、底径4.9、器高4.7cmを測る。内面には放射状暗文があり、見込み部にも渦巻状暗文がみられる。外面下部にはケズリ痕が明瞭、底部糸切り。2はカマド南側の床面から10cmほど浮いた状態で出土したほぼ完形品。内外面・底面とも器壁が剥落しており、成形痕や暗文は不明。内面の口縁から1cmほど下がった部位に炭化物付着痕が巡っており、煮沸具として用いられた可

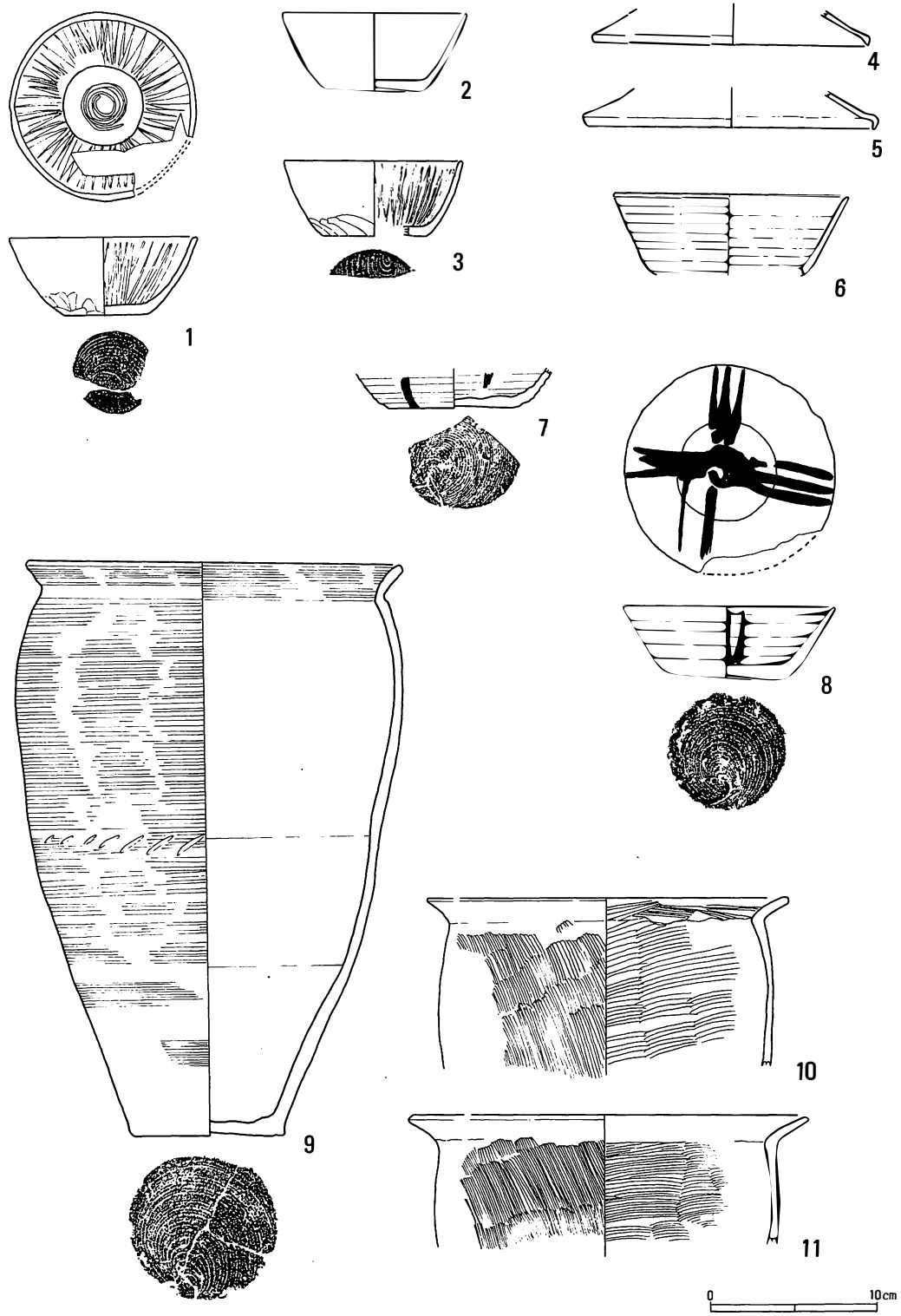
能性がある。口径11.3、底径6.0、器高4.7cmを測る。胎土緻密。3は2とともに出土したもので、底から口縁にかけての一部を欠いている。1・2と比較して底径がやや大きめ。内面放射状暗文、外面下半ヘラケズリ。胎土緻密。口径10.8、底径6.3cm。器高4.6cm。4～8は須恵器。4・5ともに覆土中から出土した蓋の破片。6は8とともにカマド正面から出土した坏の破片。底部の状況から高台付きとみられる。焼成・胎土良好。口径14.2cm。7はカマドから出土した坏底部破片。重ね焼きとみられる火襷が認められる。8は口縁の一部を欠く坏。内面には7同様の重ね焼きを表す十字文状の火襷が残る。胎土中には小石を混入し焼成も良くない。口径12.8、底径7.0、器高4.4cm。9から11は土師器の甕。9は口径22.4、底径9.1、器高34.3cmを測る。胴の一部を欠く、ロクロ成形の甕で全体に成形痕がよく残り、底部は糸切り。胴中位には叩き目状の痕が認められる。色調は淡い黄褐色を呈す。10・11は甲斐型の甕。いずれも4～5分の1の破片。10はカマドからの出土、11はカマド正面から出土したもの。土師器坏は甲斐型坏編年のⅧ期に該当するものと思われる、本址は平安時代初期に位置づけられよう。



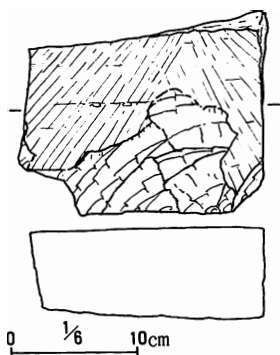
第15図 第1地区4号址実測図 (1/60. カマド 1/30)

5号址 (第18図)

E-24・25グリットを中心に検出された。黒褐色包含層を掘り下げていく途中で石囲い炉の一部を検出し、住居址と判断し精査を行った。本址は敷石を伴う柄鏡形住居と思われるが、柄鏡の基部に相当する箇所には敷石は残っておらず、他は抜き取られたと思われる。敷石には平石が使われているが、一部縦位に設置されているものがあり、張出部との間仕切として用い



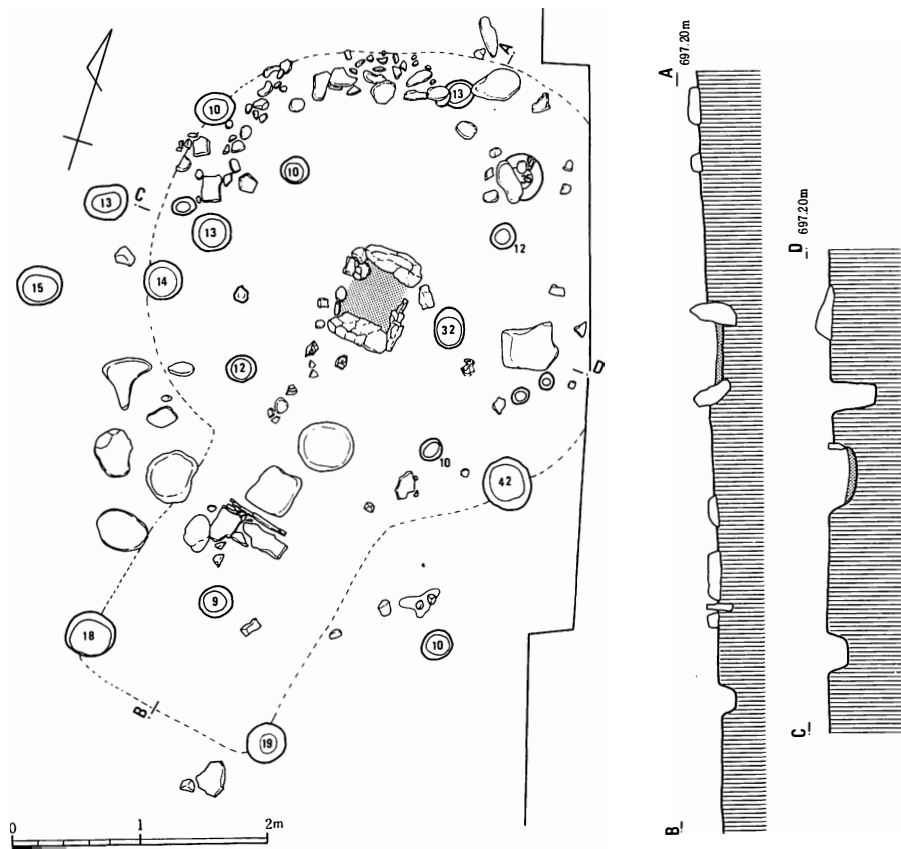
第16图 第1地区4号址出土土器(1/4)



第17図 4号址出土砥石 出土土器(第20図・第28図1・2)

られたと考える。炉は先述したとおり石囲いとなり方形を呈するが、西に配された石は殆ど残存しておらず住居廃絶時に抜き取られた可能性がある。焼土は火床面から10cm程までしか堆積しておらず、上部には焼土粒まじりの黒色土が充満していた。北側の壁際には一部小礫が巡る。柱穴は壁際を巡るものが多いが規則性は認められない。柄鏡の基部、張り出し部を中心に精査を行ったが埋甕は検出されなかった。本址は炉の周辺で出土した土器(第20図4・10)・(第28図1)等が時期決定遺物となろう。

第28図1は炉の東約1mの床面からやや浮いて横倒し状態で出土した瓢形の注口土器。口径4.4、底径5.3、器高12.8cmの小型品である。注口部及び橋状把手の一部を欠損する。橋状把手はすべて横位であり口縁直下に3単位、胴の最大径部に2単位が付けられている。注口は口縁直下にある3対の橋状把手と対をなす位置に付けられている。微隆起による区画文が、注口部を正面にして表裏2単位で構成されている。なお口縁部にも微隆起が一周するが孔はない。内外面とも調整は雑で一部に指頭痕も残る。胎土中には小石も混入し、色調は明るい黄褐色。第28図2は底部破片。第20図1～6はいずれも沈線区画内に縄文を充填施文するものである。1



第18図 第1地区5号址実測図(1/60)

は炉址の周辺で、床から若干浮いた状態で出土した。復元口径約30cmを測り、口唇部には4単位の突起が付される深鉢形土器である。口縁部には幅の狭い無文帯と縄文帯が巡る。縄文帯下は沈線区画内RL単節縄文充填施文のモチーフが縦位に展開する。モチーフは、接合破片が少なく判然としないが、J字文が上下で連結し、S字状を呈するものと、楕円区画状のものが交互に展開するように見受けられる。2～5は1と同一個体と思われるもの。6はJ字のモチーフと下段を巡る縄文帯という文様構成をとる深鉢形土器の胴部破片であろう。7は口縁無文帯・横位沈線・縄文と続く。8は縄文のみ。9は1類土器（特にa）に伴う鉢形土器にみられる橋状把手の一部と思われる。10・11は注口土器の一部であろう。10の注口部は短く、刺突文がみられる。11は注口部であるが裏側（下方）に8字状の隆帯が付けられており、先端部には円形の刺突文が巡っている。以上については第28図1が1類b種、第20図1から6が3類、7が2類、8が1類a種に分類できる。10・11は刺突文がある事から8類としておく。12は土器片鋳である。隅丸長方形を呈し、短軸方向に紐掛けの溝が認められる。

出土石器（第21・22図）

本址で出土した石器は、石鏃9点・錐器2点・楔形石器2点・二次加工ある剥片3点・打製石斧2点・磨製石斧1点・磨石1点・礫器1点である。この他黒曜石の原石3点・水晶の剥片1点が出土している。18は幅広な剥片の端部に缺入を有するもので、ノッチドスクレイパーの範疇で捉えられようか。22は住居址北側の柱穴から出土したもので、長さ24cmを測る大型の打製石斧である。右側縁の調整が不十分で、未製品の可能性がある。23は偏平な礫を素材とし、荒い調整を加え刃部を作出している。礫器として捉えたが、打製石斧等他の石器の未製品の可能性も指摘できよう。

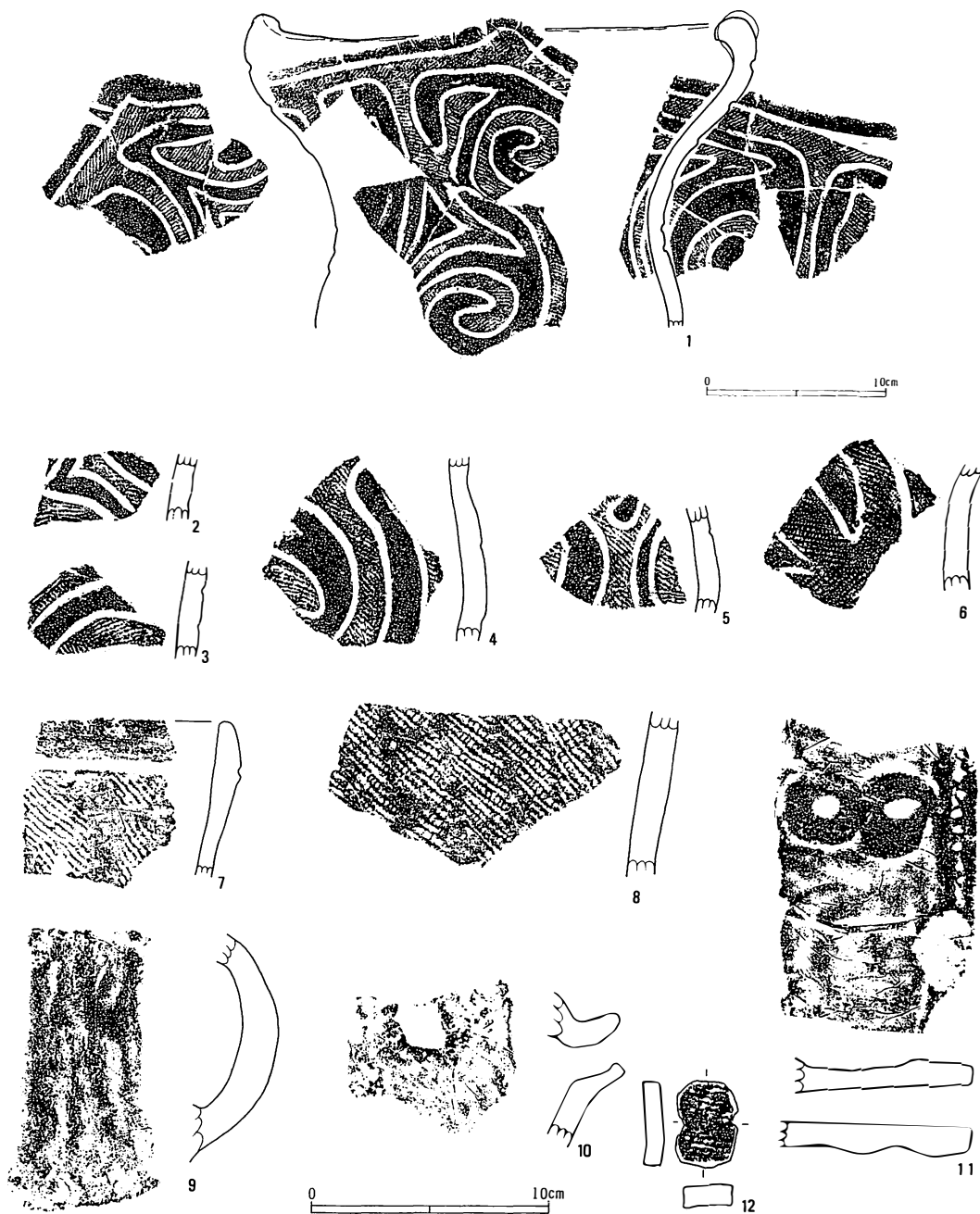


第19図 第1地区5号址遺物出土状況図（1/60）

6号址（第23図）

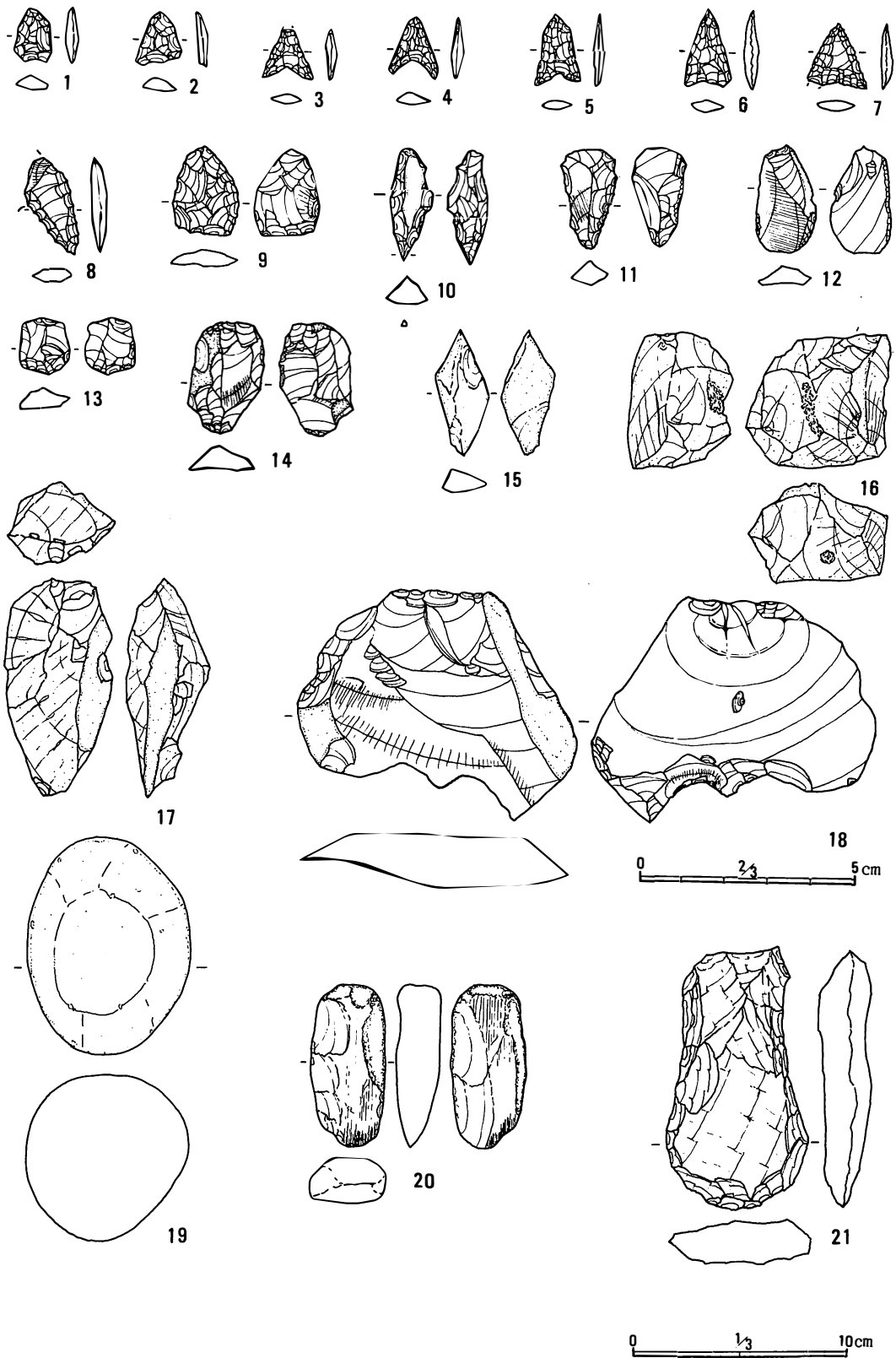
6号址（第23図）

C・D-27グリッドで検出した。焼土と近接して平石が検出されたため、精査を行った。焼土は約7cmほどの浅い掘り込みを持って堆積しており、地床炉の形態をとる。平石は焼土の西側で1点検出されただけである。検出された柱穴の配置に規則性は認めら



第20図 第5号址出土土器 1 = 1 / 4 4 ~ 12 = 1 / 3

れない。床と思われる硬化した箇所も確認できなかった。調査時では本址を住居址としてプランの推定ラインを図示したが、当該期の住居址は張り出し部を有する柄鏡形を呈するのが一般的で、炉址の形態、敷石の有無等も含め検討すべき課題を残している。本址の時期は出土した土器から、後期初頭に位置付けたい。なお本址の北側で集石遺構が検出されたが、出土遺物が少なく時期は不明であり本址に伴うものか判然としない。



第21图 第1地区5号址出土石器 1~18= 2 / 3 • 19~20= 1 / 3

出土土器（第24図）

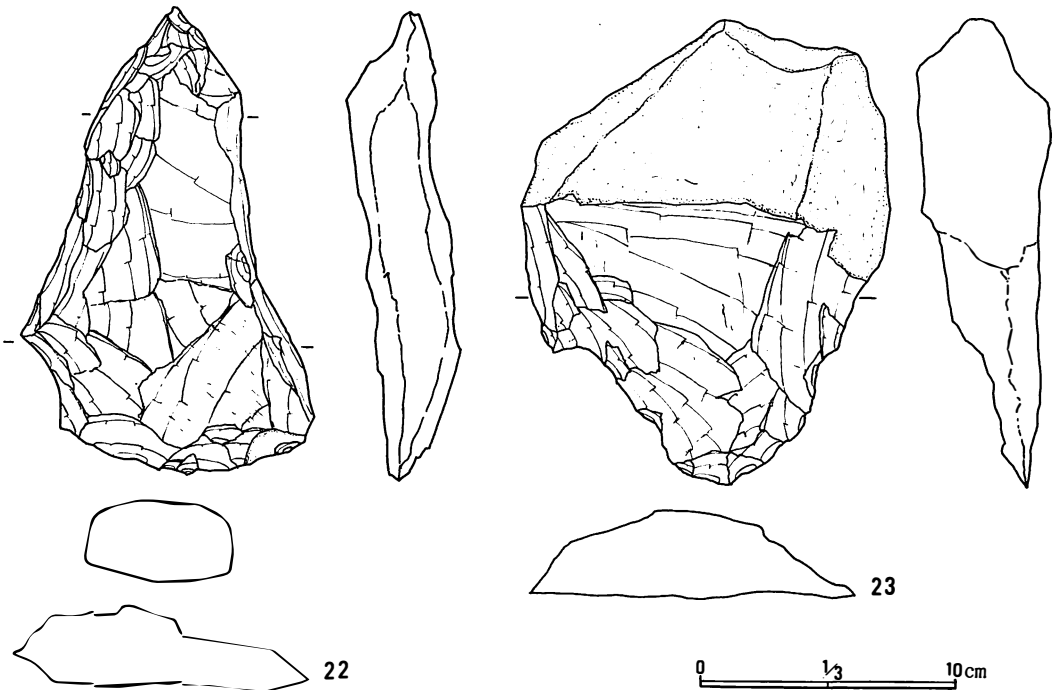
1・2は微隆起のある土器。3から6は磨消縄文がみられるもの。6以外は曲線的な区画縄文帯。7・8は沈線主体であるが、粗い縄文がみられる。11から17は沈線区画と列点文の土器。18も同様か。19から24は沈線による区画文の土器。25は口唇に浅い沈線が走るが他は無文。26は壺とみられる頸部破片で、微隆起が巡る。27・28は櫛歯状沈線の土器。以上についてはすべて4群で、1類a種が第26図1・2、b種が26、3類が3から6、4類が9・10、5類が11から18、6類が19から24、7類が27・28、9類が25となる。

出土石器（第29図1～7）

本址で出土した石器は、石鏃1点・石鏃未製品1点・錐器1点・楔形石器1点・石槍1点・磨製石斧1点・磨石1点となる。5の石槍はチャート素材としており、先端から側縁の一部を欠損している。本址に伴うものか検討を要する。

7号址（第25図）

B-24・25、C-24・25グリットで検出された。遺構中央の焼土と壺型を呈す小型土器（第28図3）が近接して出土した事から精査を行った。焼土は5cm程の浅い掘り込みを持ち地床炉の形態をとる。周辺には地山に包含される安山岩系の礫が露出し、床と思われるような硬化面



第22図 第1地区5号址出土石器 S=1/3

は認められない。焼土を中心として1 m以上の掘り方を持つ柱穴が方形に巡り、調査区外へ延びるようである。柱穴には柱痕跡を想起させる落ち込みが認められるものがある。調査区断面で本址の掘り込みは確認できなかった。上記した特徴を持つ本址の性格としては方形柱列が考えられよう。出土した土器（第26図）には若干の時期差があり混在している様相を呈すが、本址は中期末から後期初頭の範疇で捉えたい。

出土土器（第26図・第28図3）

第28図3は焼土の辺りから出土した小型の壺形土器。二分の一ほどの破片であるが口縁から底部まで残存し、口径7.0、底径3.3cmと推測できる。器高は8 cm。口縁から肩部にかけて縦位の橋状把手が1ヶ所みられるが、本来は相対して更に1ヶ所あったものと推測される。この把手上には円形刺突文が連続している。把手間の肩部から胴部には幅広の隆帯が貼り付けられており、その上には楕円形文が2列連続する。この隆帯も相対して2単位が認められる。胎土中には長石・石英等の粒子が混入しややザラつく。色調は黒褐色であるが、把手の部分はやや赤化しており加熱を受けたのかもしれない。1～7は微隆起の走る深鉢形土器の一群。1・2は平口縁、7は波状口縁の土器。6には円形刺突文もみられる。8から11は沈線や幅広の縄文帯で飾られる土器。12から16は区画縄文の一群。17は沈線と縄文がみられ、18から20は縄文のみ。21～27は沈線主体の土器。特に21から25は区画文となろうか。26は口唇部に幅広の沈線、27は小突起内面に弧状沈線がみられる。28は口縁部に沈線と連続円形刺突文がある。29・30は櫛歯状沈線。31～34は微隆起ないし隆帯の付けられたもの。31は隆帯が横走り、32では縦位にみられる。33は壺であろうか、頸部に微隆起が巡り、以下に弧状沈線が付けられる。以上については大半が4群土器であるが、26から28は5群土器の可能性もある。4群については1類a種（1～7）、b種（31～34）、2類（8）、3類（12～16）、4類（18～20）、6類a種（21～25）、7類（29～30）、に分類できよう。なお9～11は1類a種に伴うものであろう。

出土石器（第29図8～16）

本址から出土した石器は石鏃3点・錐器1点・楔形石器1点・横刃石器1点・打製石斧1点・磨石1点・凹石1点である。このうち10の有茎鏃は晩期後半の第7群土器に伴うものであろう。12は縦長の剥片を素材とし、両端から打撃を加えられていることから楔形石器として捉えたが、側縁の調整を考慮すると搔器の可能性もあろう。

8号址（第27図）

D-29・30グリットで検出された。3.3×2.8mの楕円を呈す竪穴状遺構で、北西隅は1.2×1 mの楕円を呈す第12号土坑に切られている。壁は西側で約50cmを測るが東側では殆ど検出できない。これは尾根の斜面部に本址が構築されている事、中世以降に構築された段状遺構（第33図）の削平を受けている事も原因の一端であろう。遺構底面はほぼ平坦で堅く締まっており、黒色の炭化物粒子が多量に検出された。南側では柱穴が検出され、周辺では磨石・石皿（第29図17～19）が出土した。北東では遺構底面より若干浮いて中期後葉、曾利I式に比定される胴下半を欠いた深鉢形土器（第28図7）が出土しており、本址の時期決定遺物となろう。

出土土器（第28図7）

床面より5cmほど浮いた状態で出土した深鉢形土器。胸部下半を欠く破片。色調は黒褐色を呈す。第3群3類土器で、曾利I式であろう。

出土石器（第29図17～20）

本址から出土した石器は磨石2点・石皿1点・楔形石器1点である。

1号土坑（第30図）

C-21グリットで検出された。直径約80cmを測る円形の土坑で、確認面からの深さは約30cmを測る。出土した土器から後期初頭に位置づけられようか。

出土土器（第32図1～3）

1は平行沈線のみられる深鉢形土器の口縁破片で4群6類であろう。2は櫛歯状沈線で4群7類に分類できる。

2号土坑（第30図）

D-20グリットで検出された。1.7×1.4mの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。出土した土器から後期初頭に位置づけられようか。

出土土器（第32図4～6）

いずれも第4群土器で4は区画縄文帯（3類）、5・6は櫛歯状沈線（7類）の土器である。

3号土坑（第30図）

D-20グリットで検出された。直径約75cmを測る円形の土坑で、深さ約20cmを測る。出土遺物はなく時期不明である。

4・5号土坑（第30図）

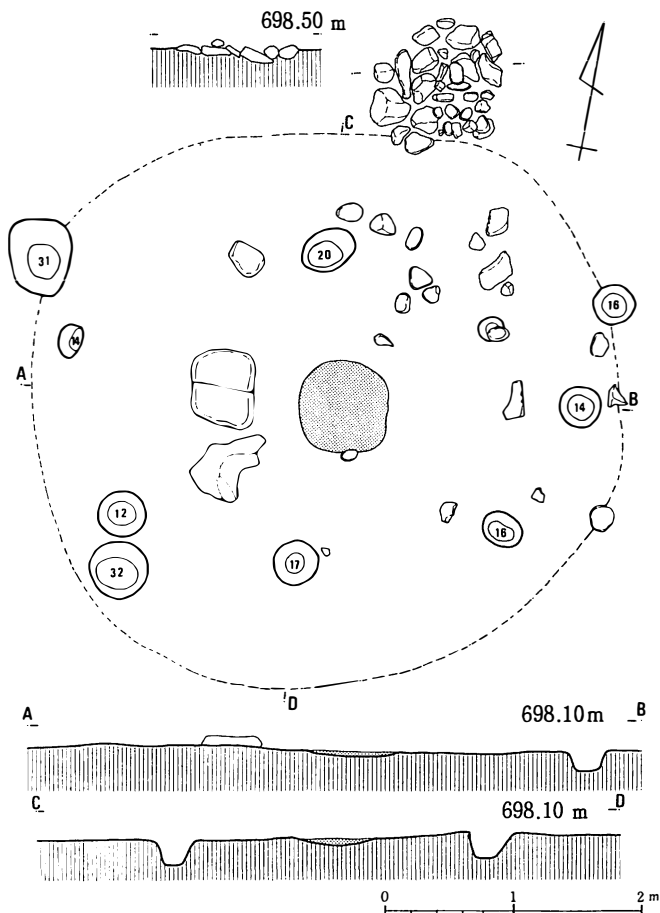
E-23グリットで検出された。4号は直径80cm、5号は直径1.2mを測る円形を呈し、両者は切り合って検出された。5号からは平石が出土し、4号からは後期初頭の土器が出土している。

出土土器（第32図7～9）

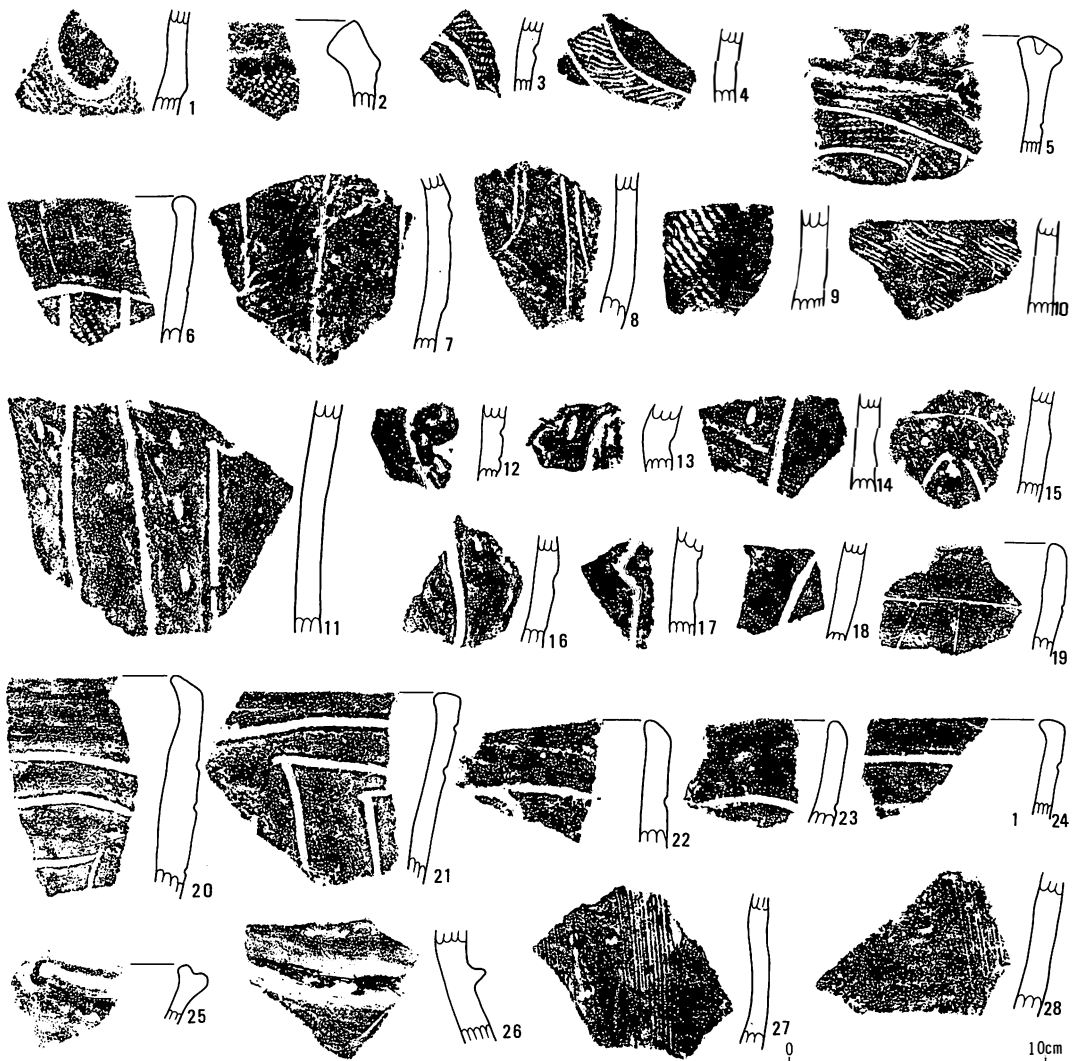
いずれも第4群土器。7・8は沈線文で6類であるが7はa種、8はb種であろう。9は区画縄文帯の土器で3類。

6号土坑（第30図）

C-22グリットで検出された。直径90cmを測る円形の土坑で、深さ約20cmを測る。出土した



第23図 第1地区6号址実測図（1/60）



第24図 第1地区6号址出土土器拓図(1/3)

土器から中期後葉に位置づけられよう。

出土土器(第32図10)

ハの字文の描かれた胴部破片。中期後半のもの。

7号土坑(第30図)

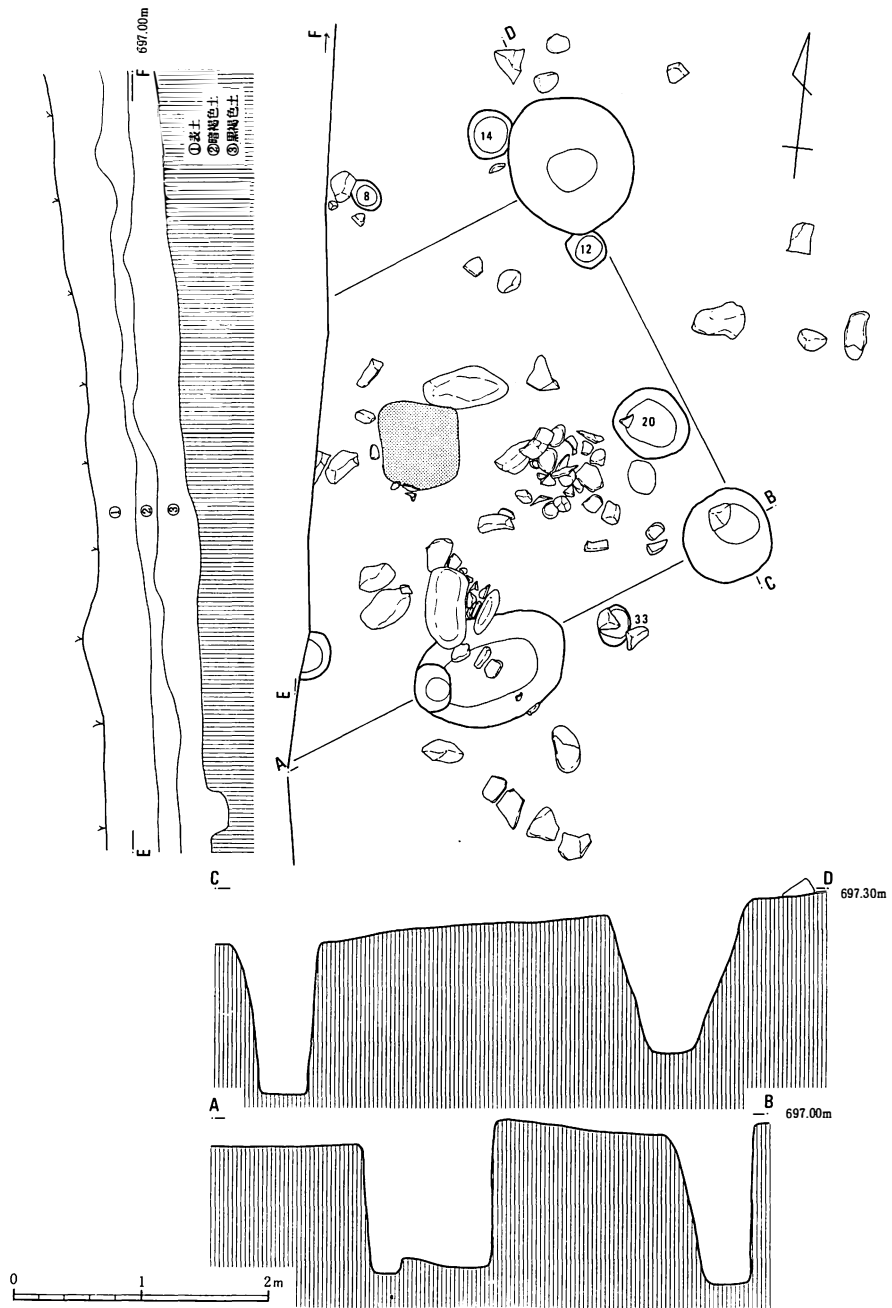
C-23グリットで検出された。90×60cmの楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。出土した土器から中期後半に位置づけられよう。

出土土器(第32図11)

刺突文が連続する深鉢形土器で中期後半のもの。

8号土坑(第30図)

D-23グリットで検出された。1.2×0.9mの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。出土遺物はなく時期不明である。周辺には土石流で持ち運ばれたと思われる1m大の大形礫が検出され、表面を凹石として利用している。



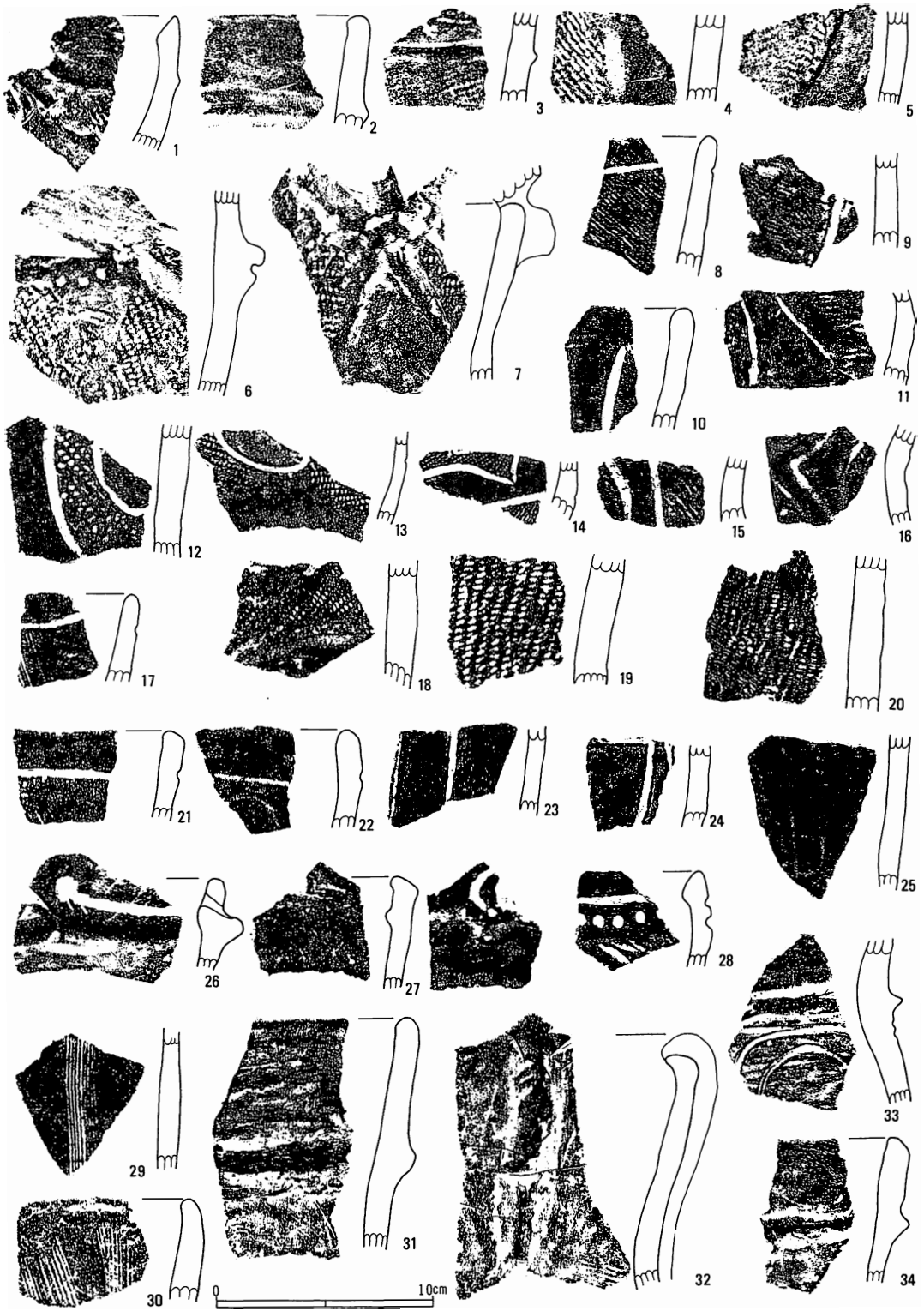
第25図 第1地区7号址実測図(1/60)

9号土坑(第31図)

C-27グリットで検出された。断面は袋状を呈し、深さ44cmを測る。坑底からは礫が出土している。出土土器から中期末葉に位置づけられよう。

出土土器(第32図12)

縄文と微隆起のある土器で4群1類a種に分類できる。



第26图 第1地区7号址出土土器拓图(1/3)

10号土坑（第31図）

C・D-19グリットで検出された。1.8×1.5mの楕円形を呈し、北側には楕円形の礫を配す。出土遺物はなく時期不明である。

11号土坑（第31図）

直径1mを測る円筒状を呈す土坑で、坑底で平石が検出された。深さ70cmを測る。

出土土器（第32図13・14）

いずれも第4群土器で磨消縄文の施されたもの。

13号土坑（第31図）

E-30グリットで検出された。たらい状を呈す土坑で、深さ約35cmを測り、10~50cm大の礫が覆土土層から中層にかけて出土した。出土遺物はなく時期不明である。

14号土坑（第31図）

D-31グリットで検出された。たらい状を呈す土坑で深さ約30cmを測り、南壁際から礫が出土した。出土遺物はなく時期は不明である。

溝状遺構（第33図）

C・D-4グリットで検出された。東西方向に延びる溝で、断面はU字状を呈する。北側には1段のテラスをもつが途中で終息してしまう。出土遺物はなく時期は判然としない。

段状遺構（第34図）

C-29、D・E-29・30・31・32・33、F-30・31・32・33グリットで検出された。本址は調査区西側の尾根から延びる斜面部ローム層を4段に渡り削平したもので、遺構は調査区外へ延びている。2・3段めのテラスには柱穴や集石が検出されたが本址にともなう遺構かどうか判然としない。近世以降の道路跡であろう。出土遺物は4段目のテラスに密着するように染め付けの陶器小破片が出土した。1段目のテラス縁辺では曾利I式深鉢形土器（第28図8）が正位に出土した。口縁部の欠損は本址を構築する際に削平されたものと思われ、本来は埋甕として正位に埋設されたものだろう。

包含層出土の土器（第35・36図）

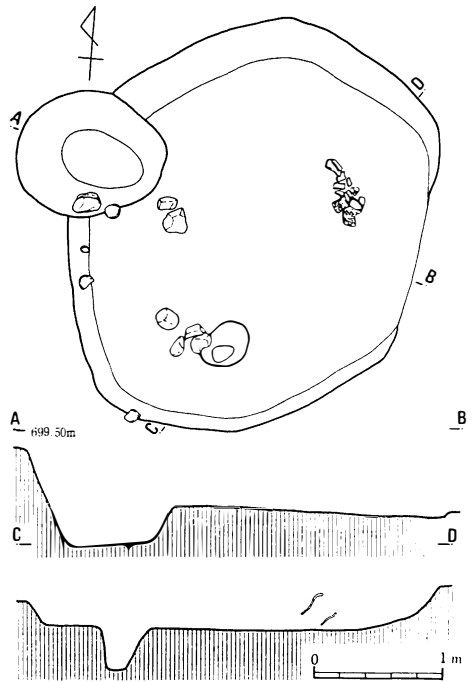
各グリットから遺構に伴わずに多くの土器が出土した。包含層出土の土器としてここで報告する。なお土器については次のとおり分類したが、これまでも各遺構の項でこれを用いた。

1群土器 早期の土器

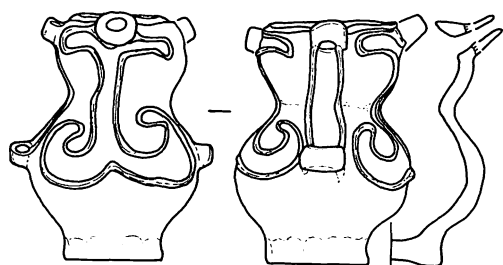
1類 押型文土器 2類 条痕文土器

2群土器 前期の土器

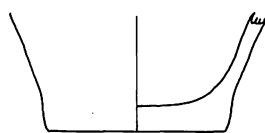
1類 条線文土器 2類 縄文土器



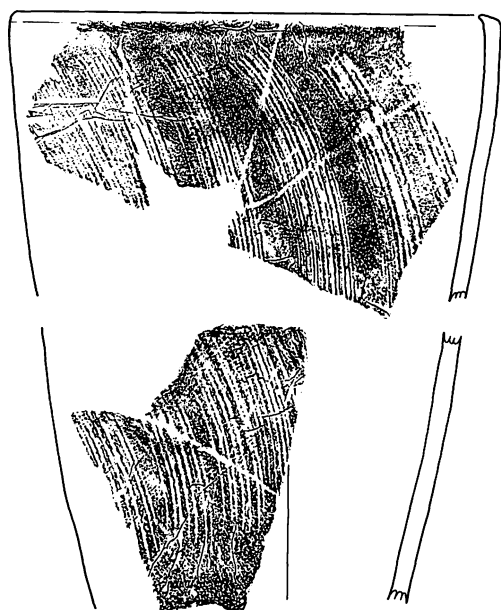
第27図 第1地区8号址実測図（1/60）



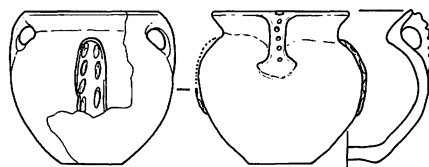
1. (5号址)



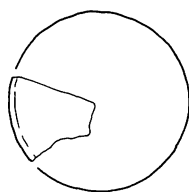
2. (5号址)



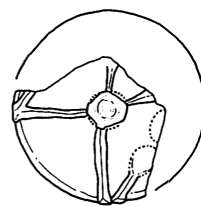
4. (D-21)



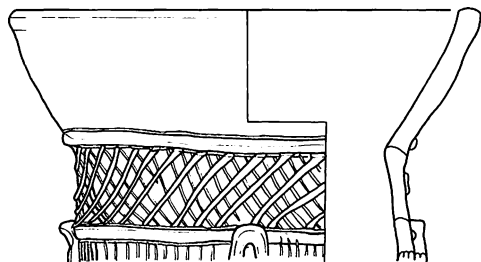
3. (7号址)



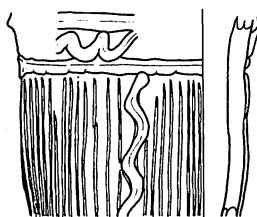
5. (D-26)



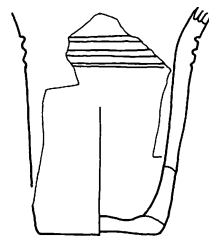
6. (C-21)



7. (8号址)

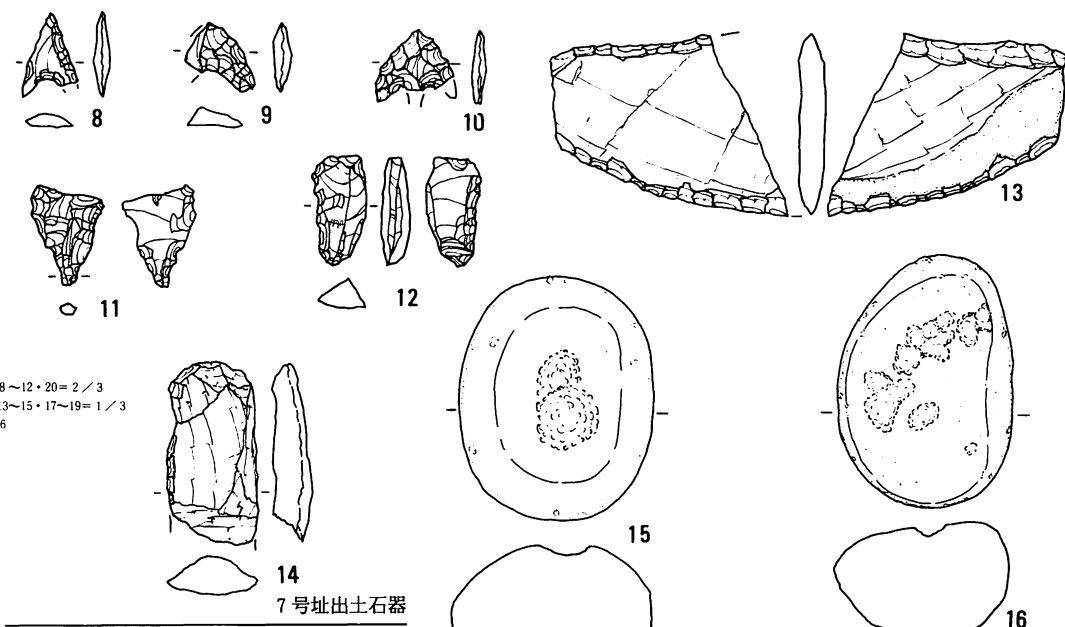
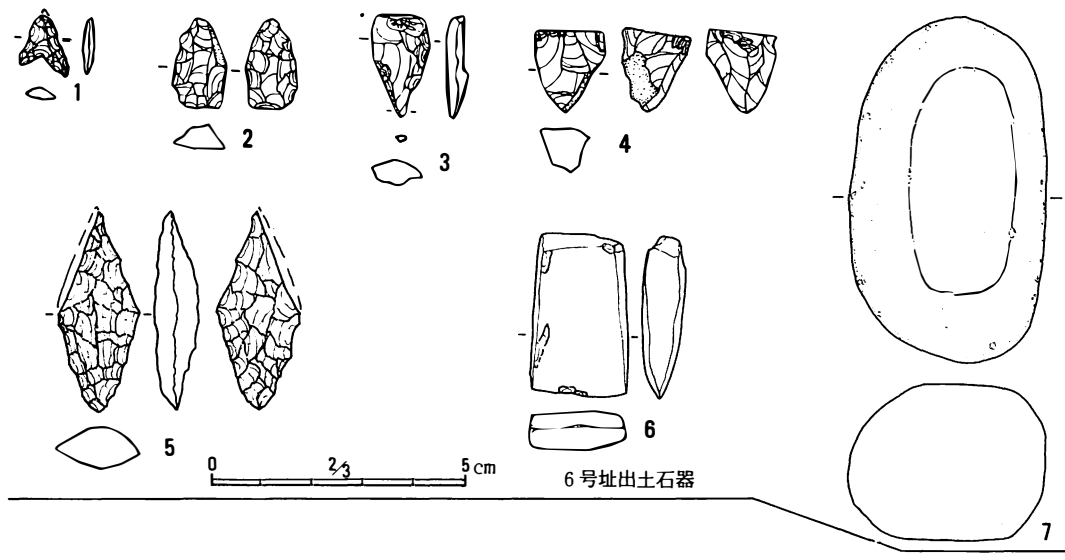


8. (E-32)

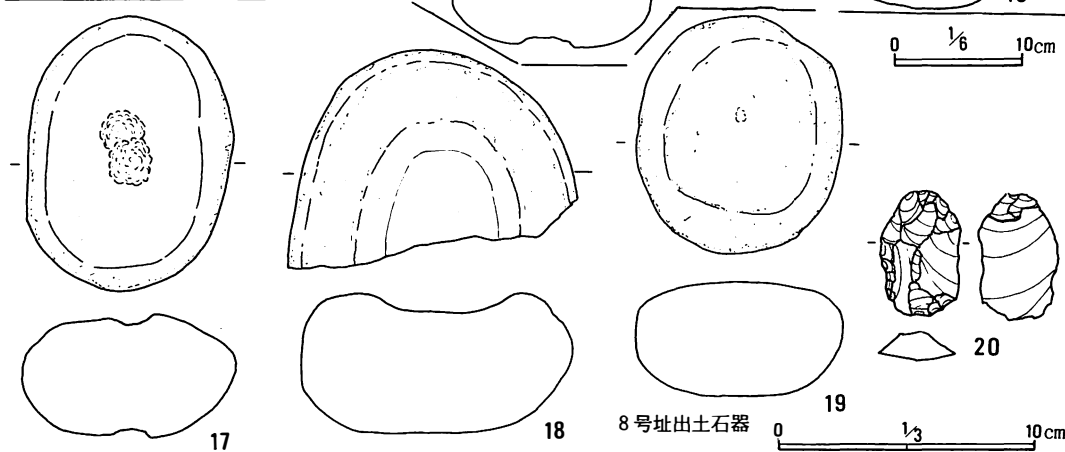


9

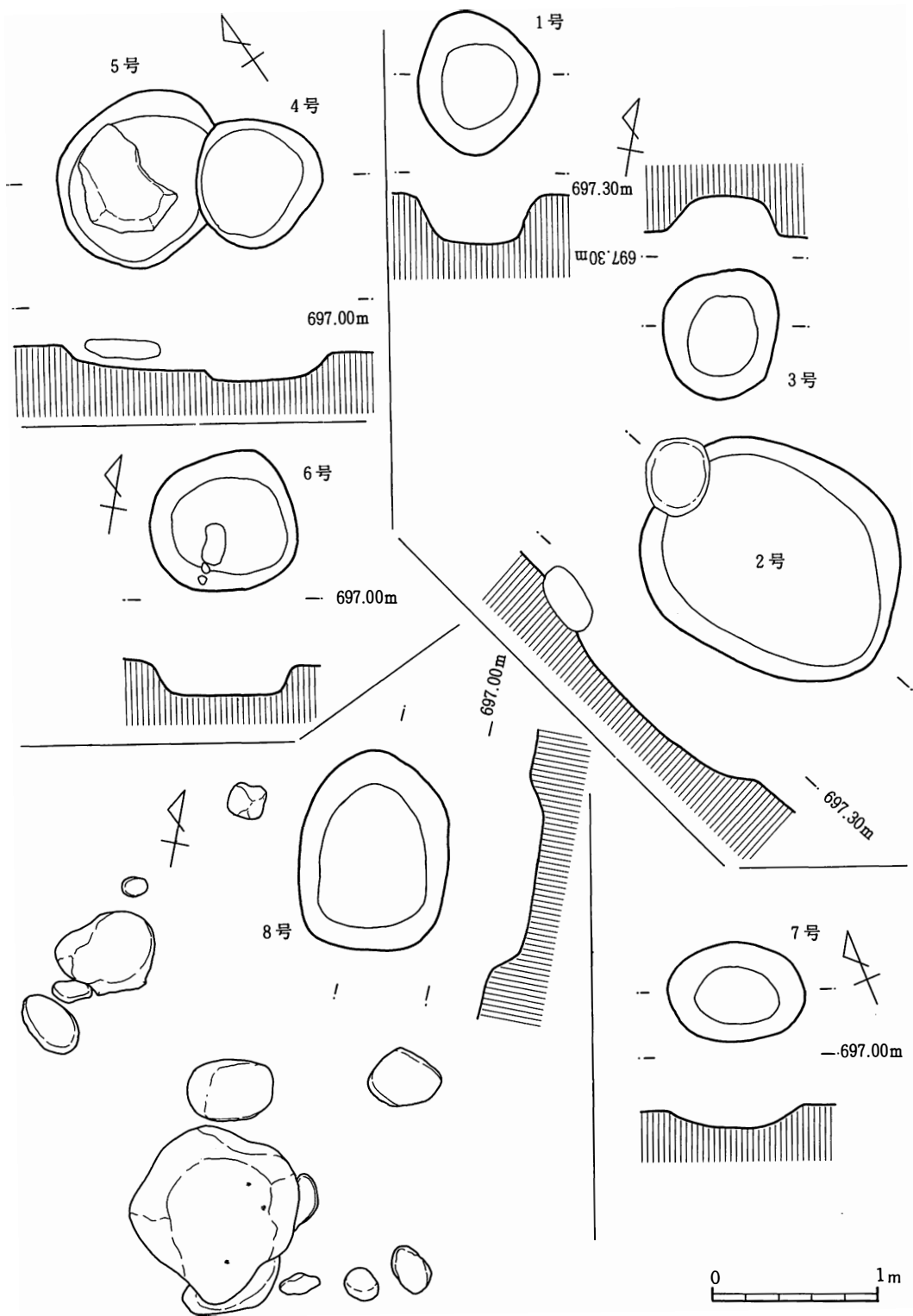
第28图 第1地区出土土器 (1/4)



1~5·8~12·20=2/3
 6·7·13~15·17~19=1/3
 16=1/6



第29图 第1地区6.7.8号址出土石器



第30图 第1地区土坑实测图 (1/40)

3群土器 中期の土器

- 1類 前葉の土器 2類 中葉の土器 3類 後葉の土器

4群土器 中期終末から後期初頭の土器

- 1類 微隆起文の土器（a種 縄文の施されるもの b種 無文のもの）

- 2類 口縁部無文帯で以下に沈線で画された縄文帯のあるもの

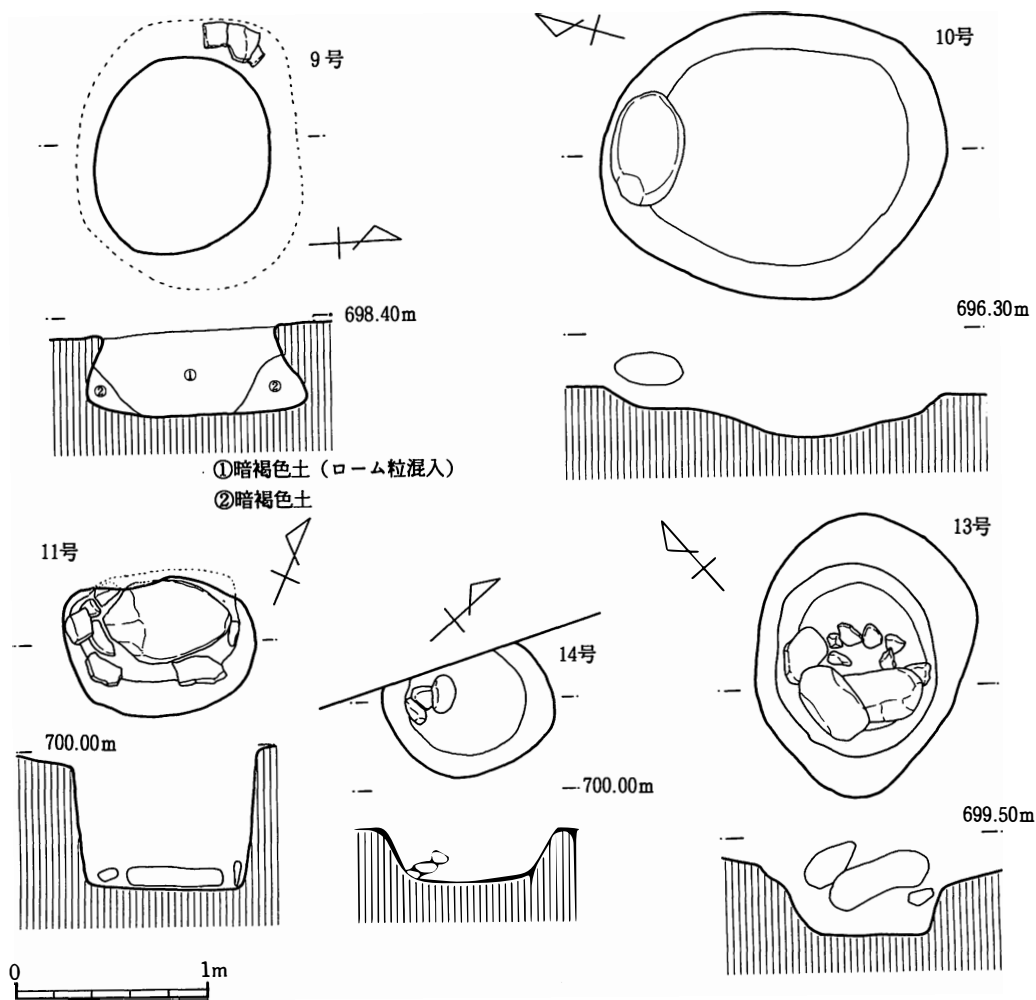
- 3類 区画縄文帯の土器 4類 縄文の土器 5類 沈線と列点文の土器 6類 沈線の土器（a種 区画文をなすもの b種 区画をなさず縦方向の沈線を主とする） 7類 櫛歯状沈線の土器 8類 連続する円形刺突文の土器 9類 無文土器

5群土器 後期前葉の土器

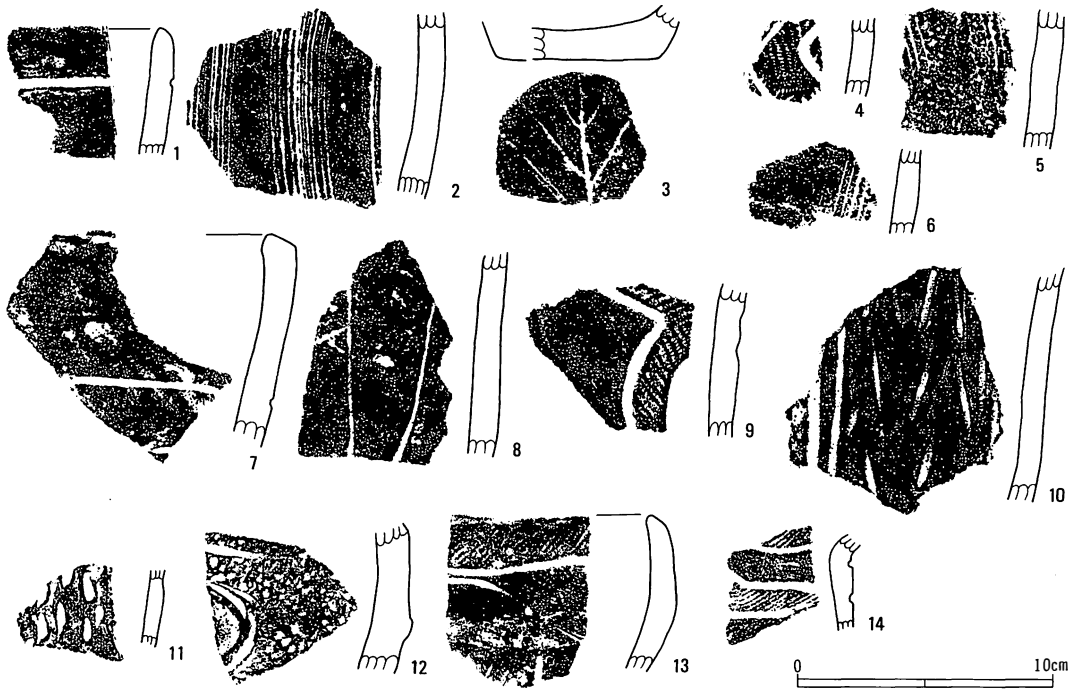
6群土器 後期中葉の土器

7群土器 晩期の土器

- 1群土器 1類 押型文土器、第35図1は山形である。2は乱雑ながら格子目と思われるもの。



第31図 第1地区土坑実測図（1/40）



第32図 第1地区土坑出土土器拓図(1/3)

(1~3・1号、4~6・2号、7~9・4号、10・6号、11・7号、12・9号、13・14・11号)

2類 3の1点であるが、鶴ヶ島台式土器と思われる破片。

2群土器 1類 第35図4・5があるが細い沈線ないし、条線のみられる破片。繊維を多く含むもので早期末から前期初頭に位置づけられようか。2類 6。縄文が施されており、繊維を多く混入する。

3群土器 1類 第28図9。9はC-28グリットから出土したもので口縁を欠く。3類 曾利式の土器群。第28図8はE-32グリットから出土した深鉢形土器で、口縁と底部を欠くが胴部は全周する。曾利I式に比定されよう。第35図7も古段階の土器。第35図8から11は新しい段階のもの。

4群土器 1類 a種 第35図12~15・17。縄文と微隆起のある土器であるが、14・15は口縁無文部に円形刺突文が連続する。器形も口縁部がやや内湾する。17は波状口縁の深鉢形土器で、楕円状の隆帯や円形刺突文が顕著である。b種 第28図6、第35図16がある。6はD-26グリットから出土した蓋。つまみ部から縁にかけて4本の微隆起が走る。16は5号址出土の第28図1のような土器の胴部破片か。2類 第35図26、3類 第35図20~22のような区画縄文が主体。18・19もここに含めておく。5類 区画沈線と列点文の土器で23・24がある。6類には27・28があるがこれらはa種である。これらは5群土器の可能性もある。7類 櫛歯状沈線あるいは集合沈線の一類。第28図4はD-21グリットで出土した深鉢形土器。8類 円形刺突文の連続するもので25がある。9類 無文土器。第28図5は蓋とみられる破片。

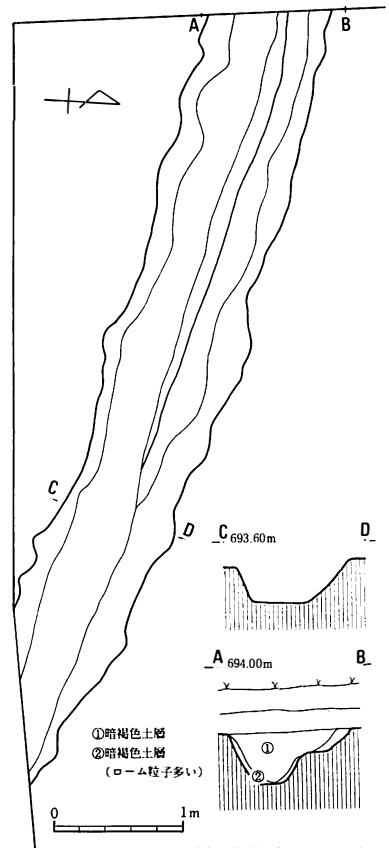
5群土器 第35図29・30があるが、4群とのつながりで考える必要がある土器であろう。

6群土器 本遺跡では顕著ではないが、第35図31はこの可能性があろうか。

7群土器 今回の調査ではこの時期の遺構は発見されなかったが、後期包含層の上層にある黒色土層から多くの土器が出土した。晩期後半の浮線文土器及びそれに伴う条痕文土器。いずれも小破片で器種の明確なものは少ないが、概ね皿や鉢形のような浅い器種と、深鉢形土器とに分類できる。第36図1～22は浅い器種とみられるもの。23から37は深鉢形土器。36・37からは肩部の張る器形が分かる。38は破片利用の円盤。39から58は条痕文土器。深鉢形土器が多いと思われるが、40・56・57は壺状の器形かもしれない。稲妻状沈線のみられる破片も多い。

包含層出土の石器（第37～39図）

遺構に伴わず包含層から出土した石器は石鏃33点・錐器4点・搔器4点・楔形石器2点・打製石斧9点・磨製石斧1点・局部磨製石斧1点・磨石17点・凹石1点を数える。31は有茎鏃で、晩期後半第7群土器に伴うものであろう。このほか2次加工ある剥片や黒曜石の原石が図示した以外に多数出土している。



第33図 第1地区溝実測図（1/60）

第2節 2地区の遺構と遺物

1号址（第40図）

B-2・3グリットで検出された。長軸4mの楕円形を呈す竪穴状遺構で、短軸は調査区外へ延びるようだ。遺構中央及び壁際では柱穴が検出された。壁は約10cm程度しか確認できず、遺構底面に硬化した箇所は認められない。出土土器から曾利式期の遺構と思われる。

出土遺物（第44図1～5）

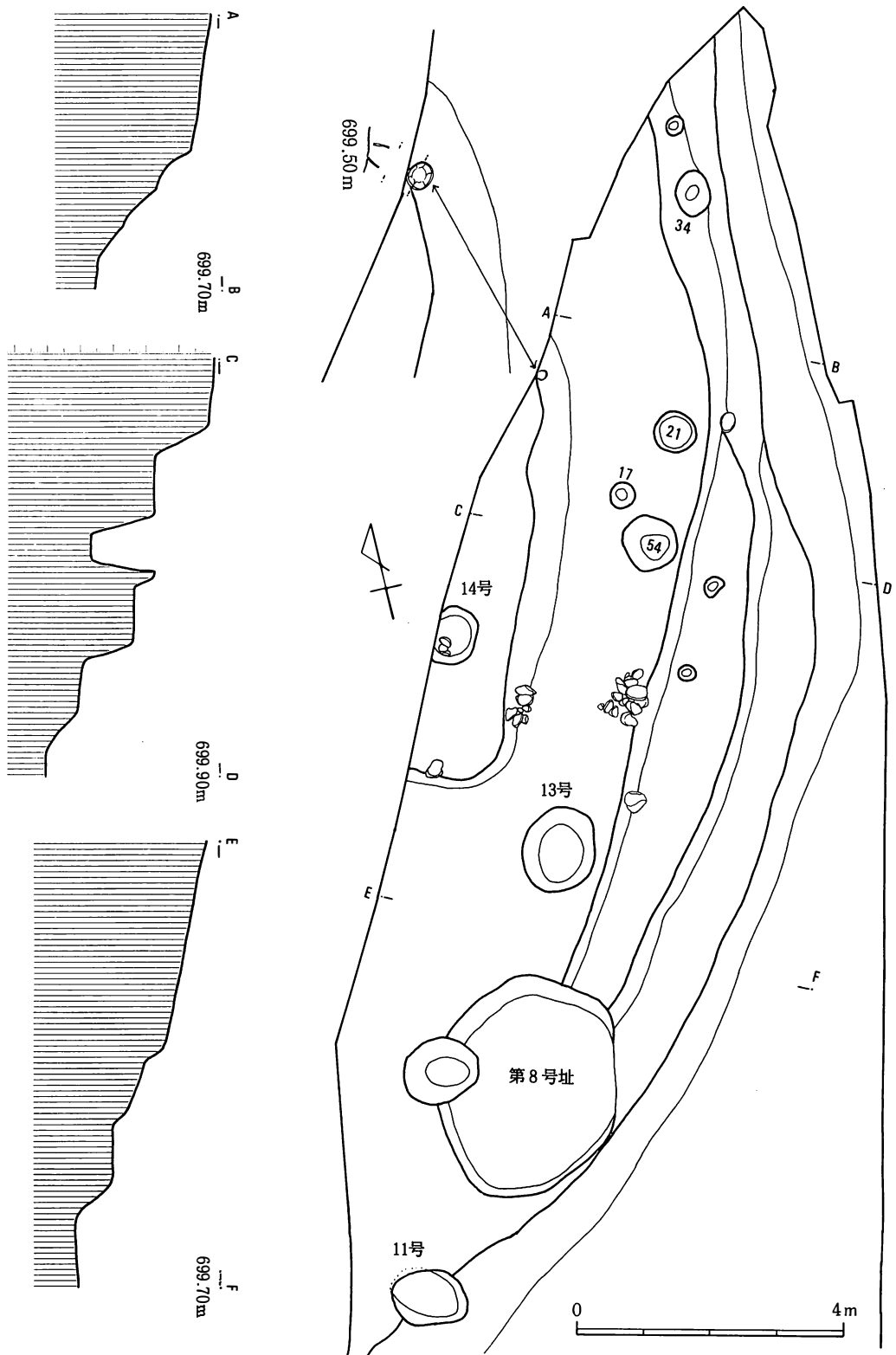
いずれも3群3類に比定され、1・5は地文に条線を施し、2・3は地文に縄文を施す。4は列点が施文される。

1・2号土坑（第41図）

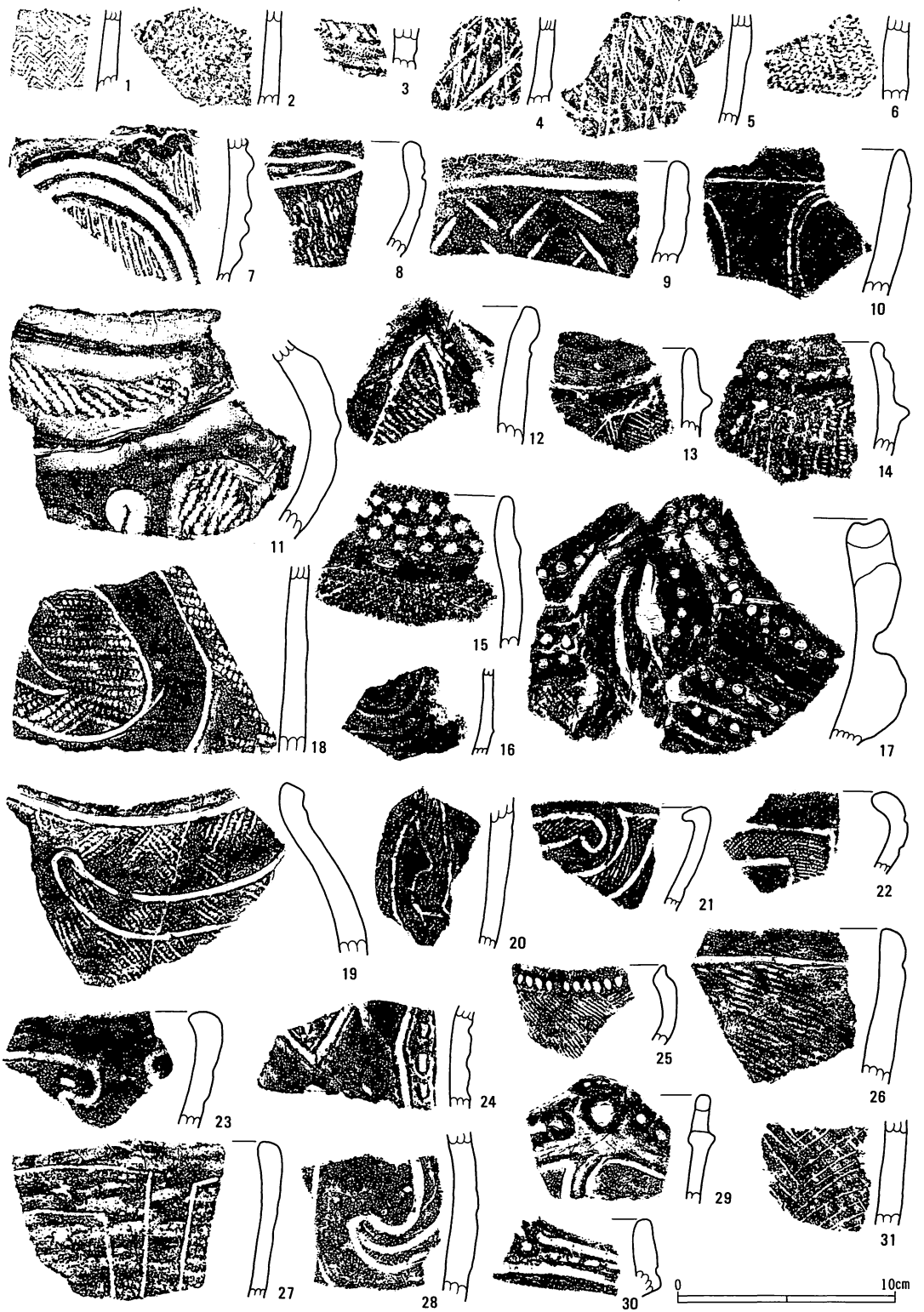
B-4グリットで検出された。両者は切り合っており、1号は円筒状を呈し深さ約80cmを測る。2号は平面が不整形、断面がたらい状を呈し、深さ約40cmを測る。1号土坑からは後期初頭称名寺式に比定される深鉢の胴下半部破片と、無文の蓋が出土しており、本址の時期決定遺物となろう。2号土坑では中期と後期の土器が混在して出土しており、本址の時期は判然としない。

出土土器（第43図1・2）

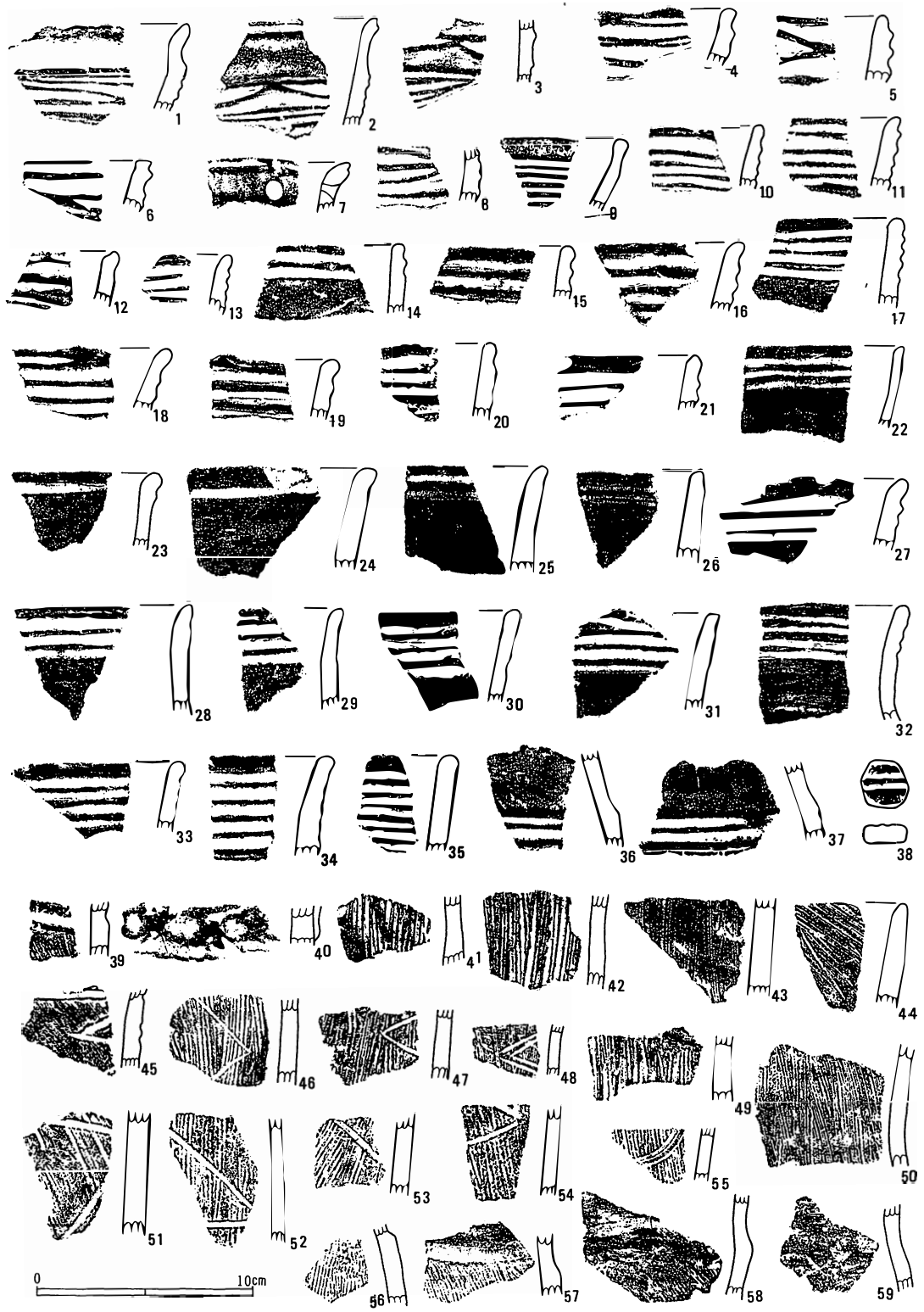
1は深鉢形土器の下半部。隆帯と磨消縄文とが施される。円形刺突文もみられる。2は蓋と



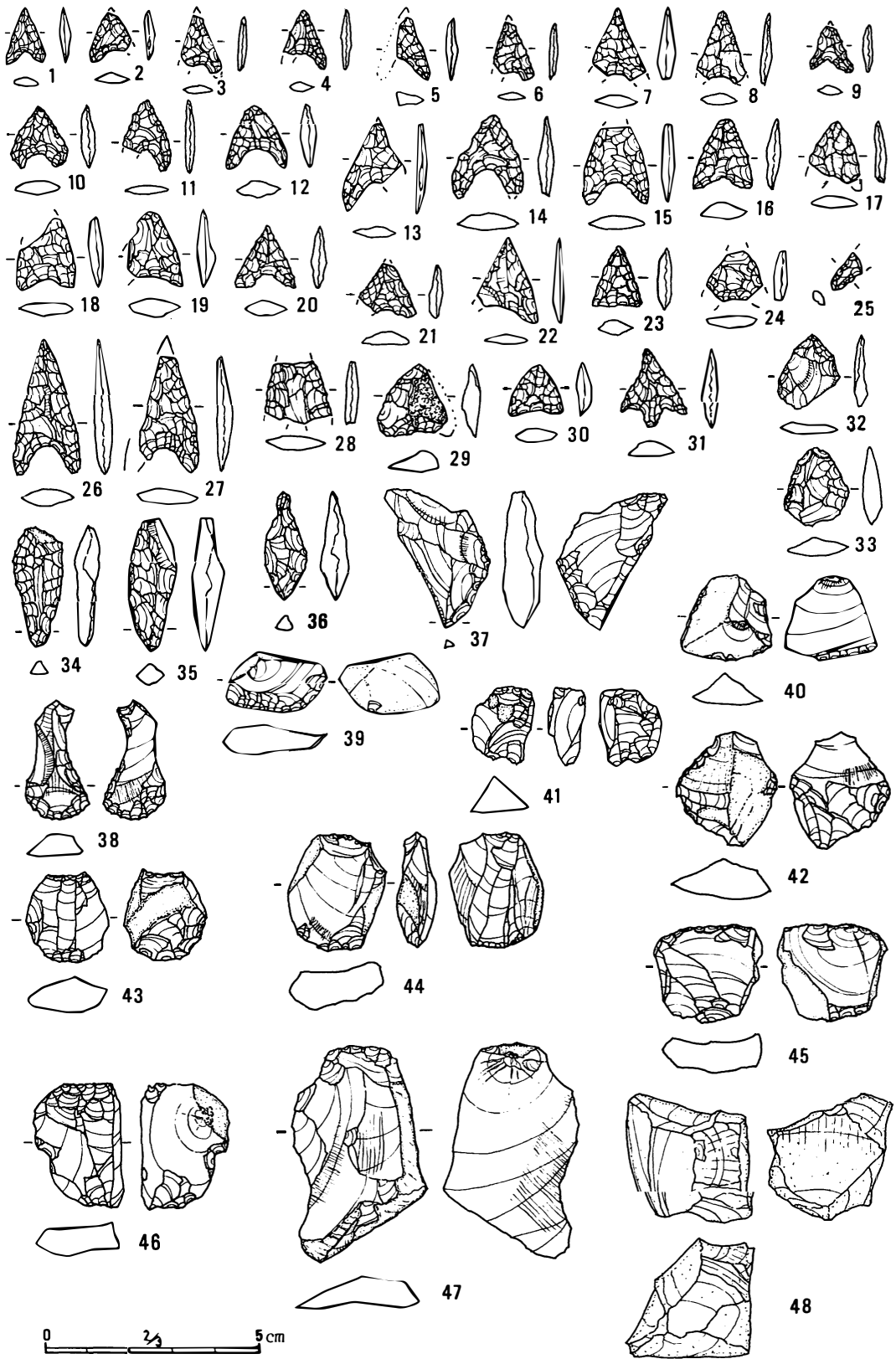
第34图 第1地区段状遺構実測図(1/100)



第35图 第1地区包含层出土土器拓图(1/3)

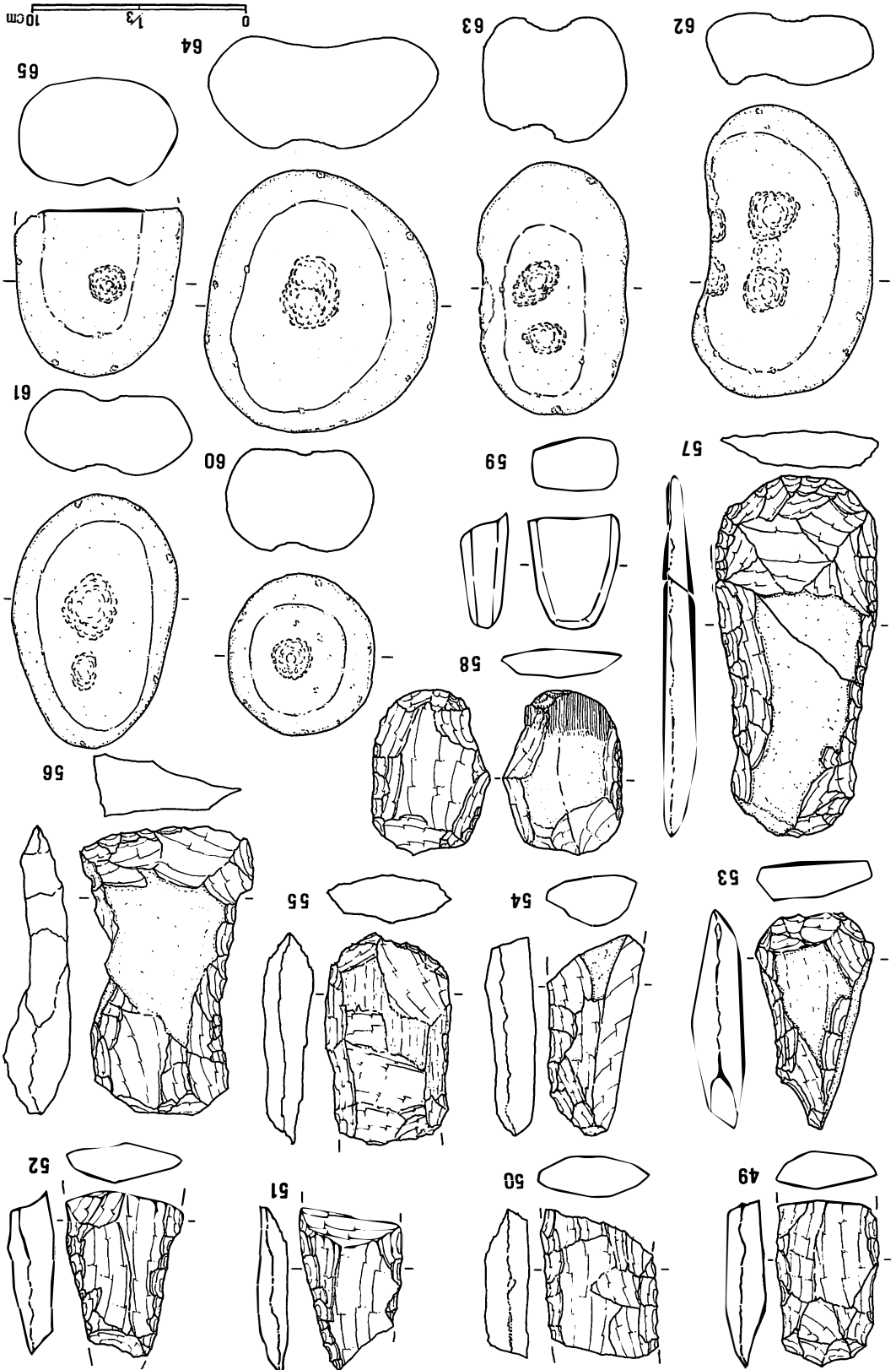


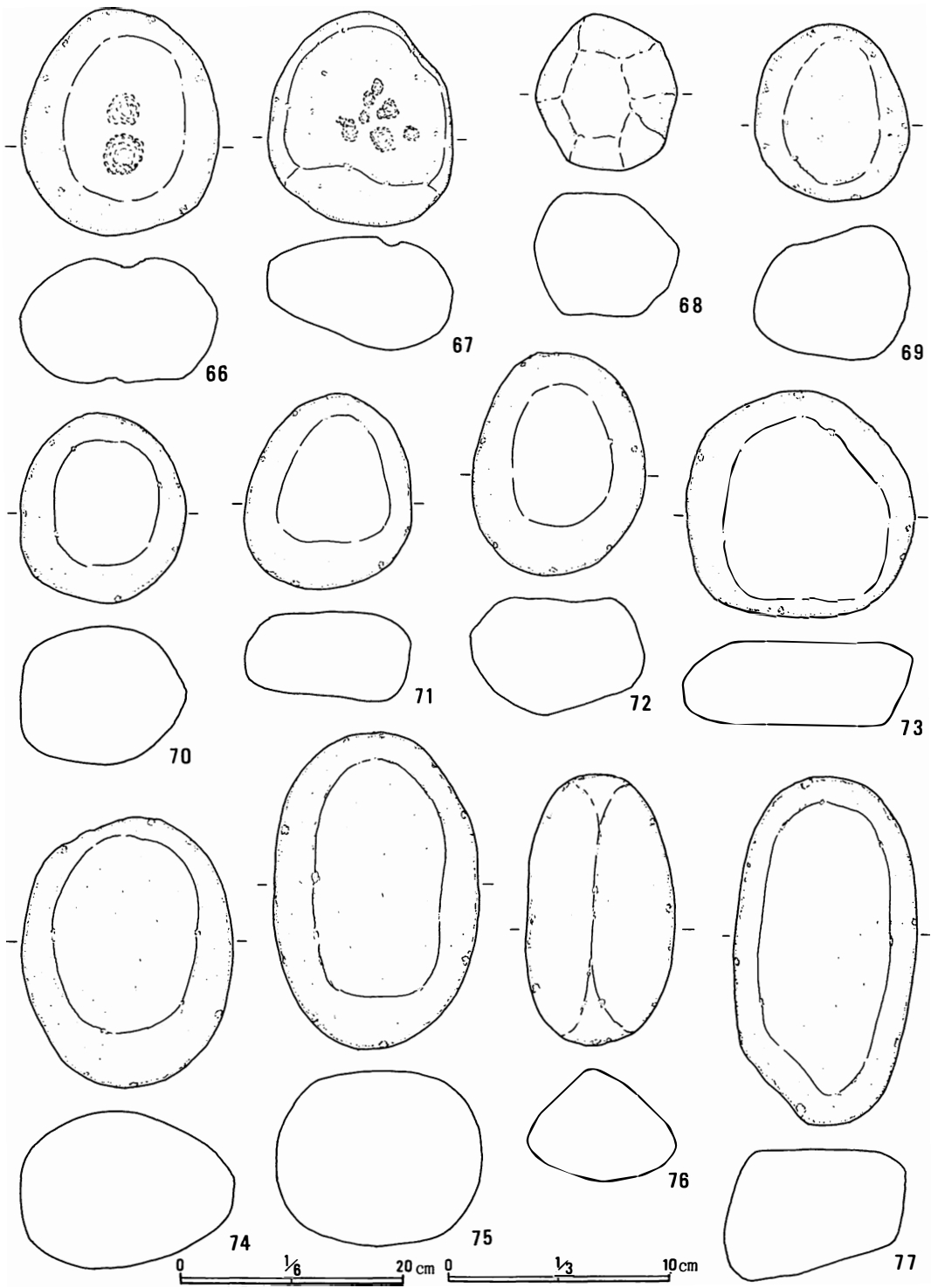
第36图 第1地区包含层出土土器拓图②(1/3)



第37图 第1地区包含层出土石器 S = 2/3

第38图 第1地区包含层出土石器S=1/3





第39图 第1地区包含層出土石器66・68~77=1/3・67=1/6

みられる破片。

出土土器（第44図6・7）

6は4群で後期、7は3群3類で中期後葉である。

3号土坑（第41図）

C-4・5グリットで検出された。口径2m、底径1mを測り、深さ約50cmを測るたらい状を呈す。覆土下層から土器片と礫がまとめて出土している。出土した土器で器形が窺えるまでに接合したものはなく、中期中葉から後葉、井戸尻式から曾利式古段階の土器がその主体となり、本址の時期も該期に帰属したい。

出土土器（第44図8～17）

8から11は3群2類の中期中葉の土器。12～17は後葉であるが12～14は古段階。

4号土坑（第41図）

掘り込みの浅い不整楕円形の土坑と、径約80cm深さ約80cmの円筒状を呈す土坑が切り合っている。この様な土坑の検出状況は1・2号土坑と同様のあり方であり、その関連性には注意を要しよう。出土した土器はいずれも円筒形を呈すものから出土しているが、いずれも小破片で、時期決定となるものではない。

出土土器（第44図18・19）

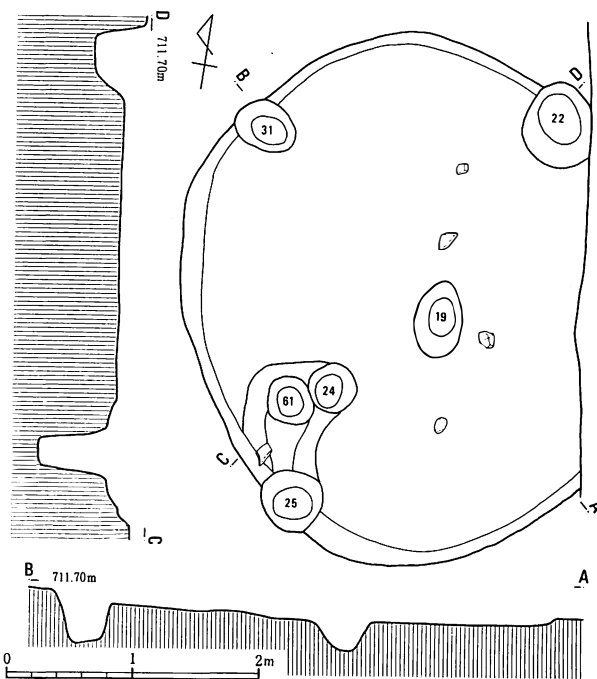
18は中期中葉、19は中期後葉であろう。

5号土坑（第42図）

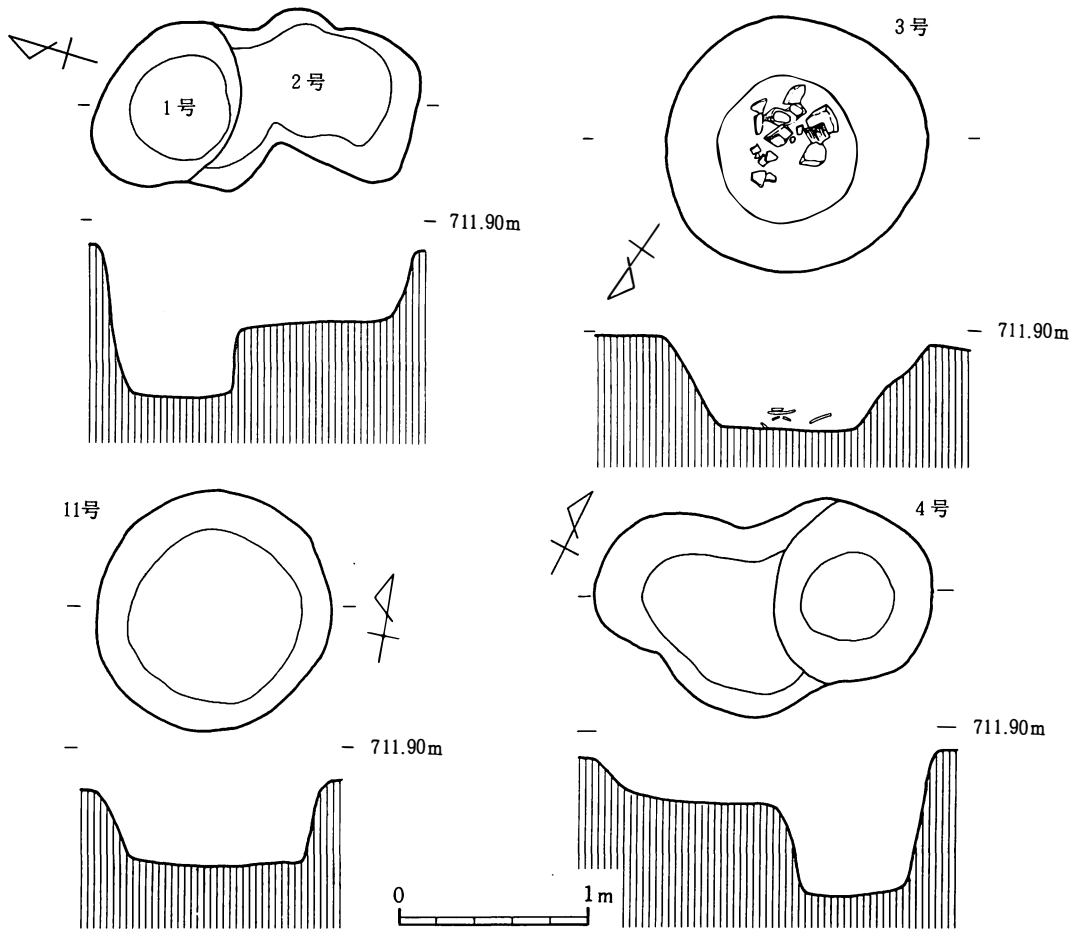
C・D-4・5グリットで検出された長軸約2.4m、最深部で60cmを測り不整楕円形を呈す。西側に1段テラスを持ち、坑底には柱穴が2基確認された。本址では坑底から若干浮いた状態で多くの土器片が出土している。中期中葉から後葉にかけての土器の主体を占め大枠では該期の遺構として捉えられるが、若干の時期差が認められる。5号土坑は本地区で最大の規模を持ち、西側にはD-4グリットを中心として後述する6～10号までの土坑群が密集する。この区域では遺構確認面（ソフトローム層上面）で多くの遺物が検出されたほか、埋甕と考えられる2基の埋設土器も検出されている。

出土土器（第43図3・第45図1～11）

底面から浮いた状態で多くの土器が出土した。第43図3は4分の1の破片。橋状把手のある鉢形土器。3群3類土器。第45図1から4、7は3群2類土器。5・6・8・9は中期後半の土器。10・11は



第40図 第2地区1号址実測図（1/60）



第41図 第2地区土坑実測図(1/40)

4群土器である。

6号土坑(第42図)

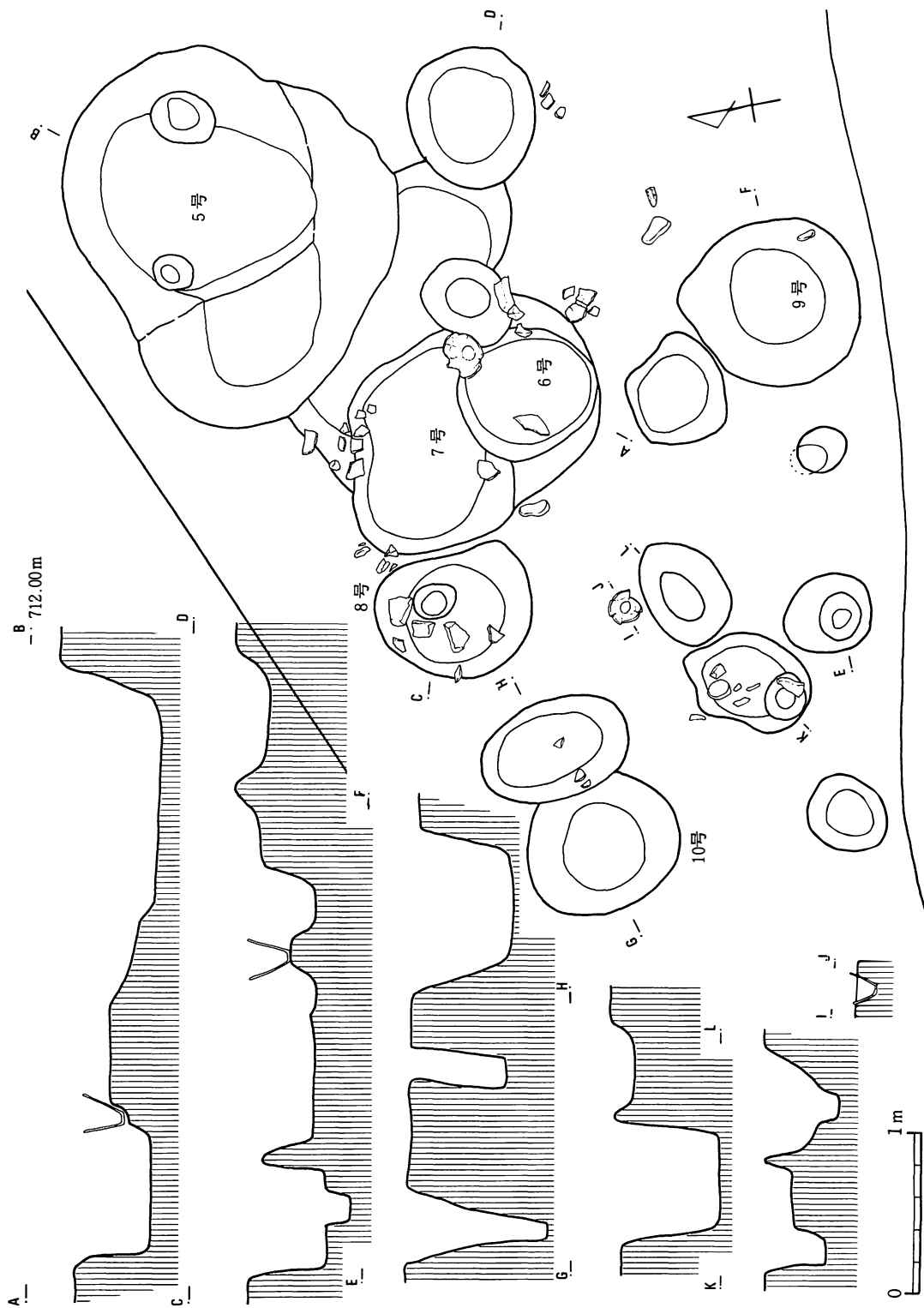
D-4グリットで7号土坑と切り合って検出された。本址の場合も1・2号土坑と同様な切り合いを呈している。直径90cm、深さ50cmを測る円筒状を呈し、中期末～後期初頭の土器(第43図4)が坑底から壁に立てかけるように出土した他、中期中葉から後葉にかけての土器片が出土している。出土状況を考慮すれば、第43図4の土器を時期決定遺物としたい。

出土土器(第45図12~20)

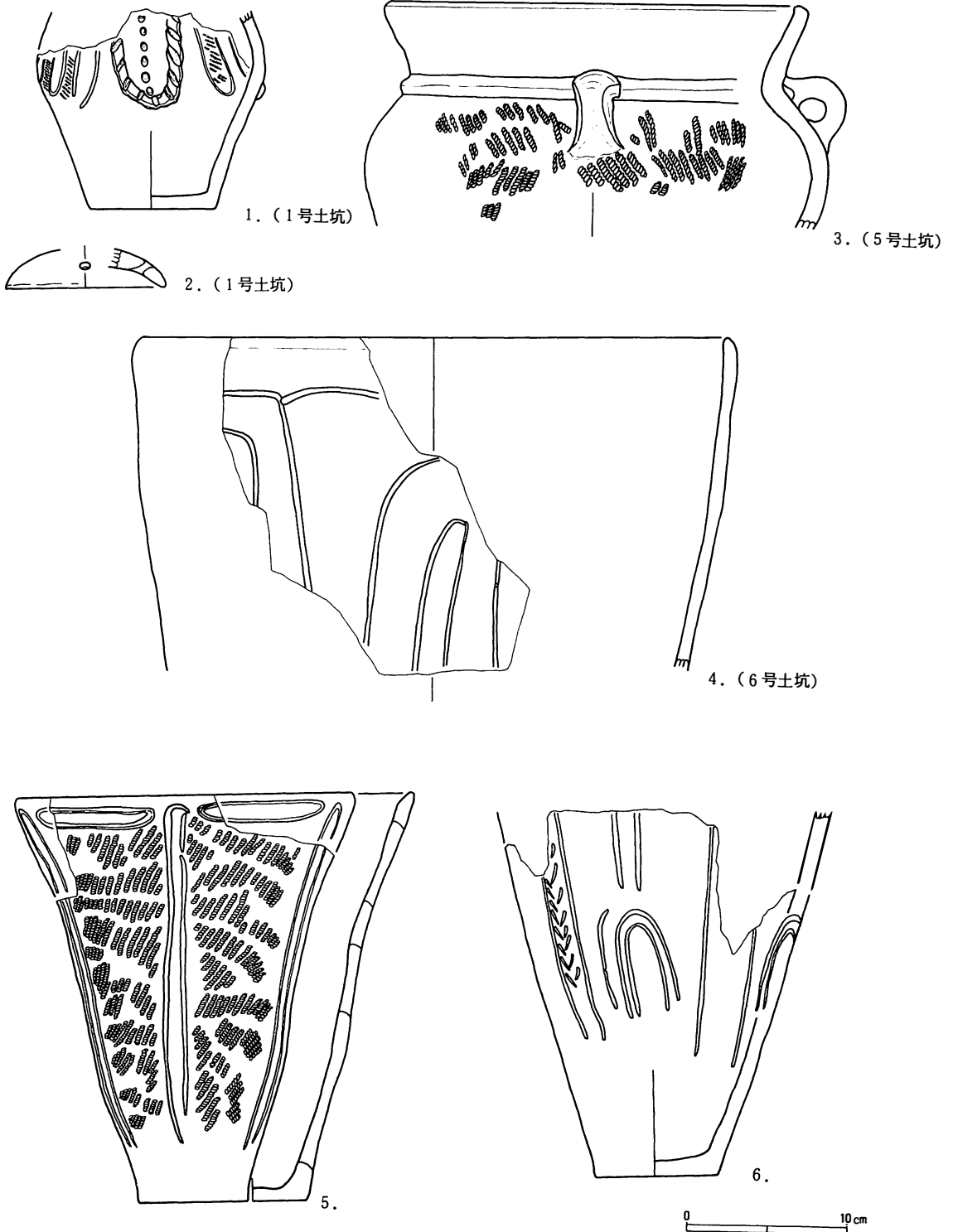
12~16は中期中葉の土器。17~20は中期後葉であるが、19・20はやや新しいかもしれない。第43図4は中期末から後期初頭の深鉢形土器。6分の1の破片。

7号土坑(第42図)

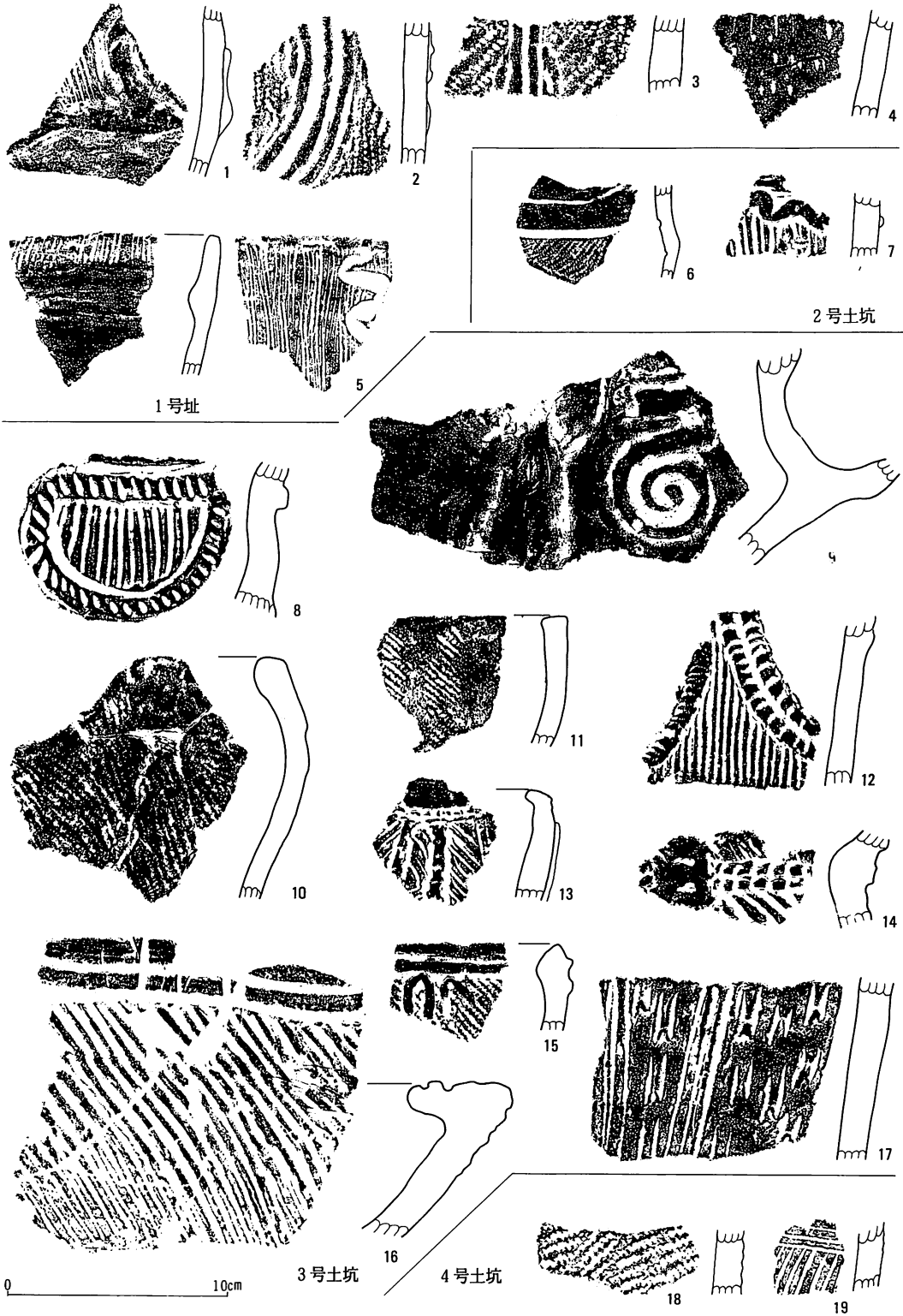
D-4グリットで検出された。隅丸の楕円形を呈す形態で、深さ約30cmを測る。西側隅、6号土坑との境では曾利式新段階の深鉢形土器が正位に埋設されていた。本址から出土した土器は中期中葉と後葉の土器が出土しているが、本址の時期を決めるには至らないものである。



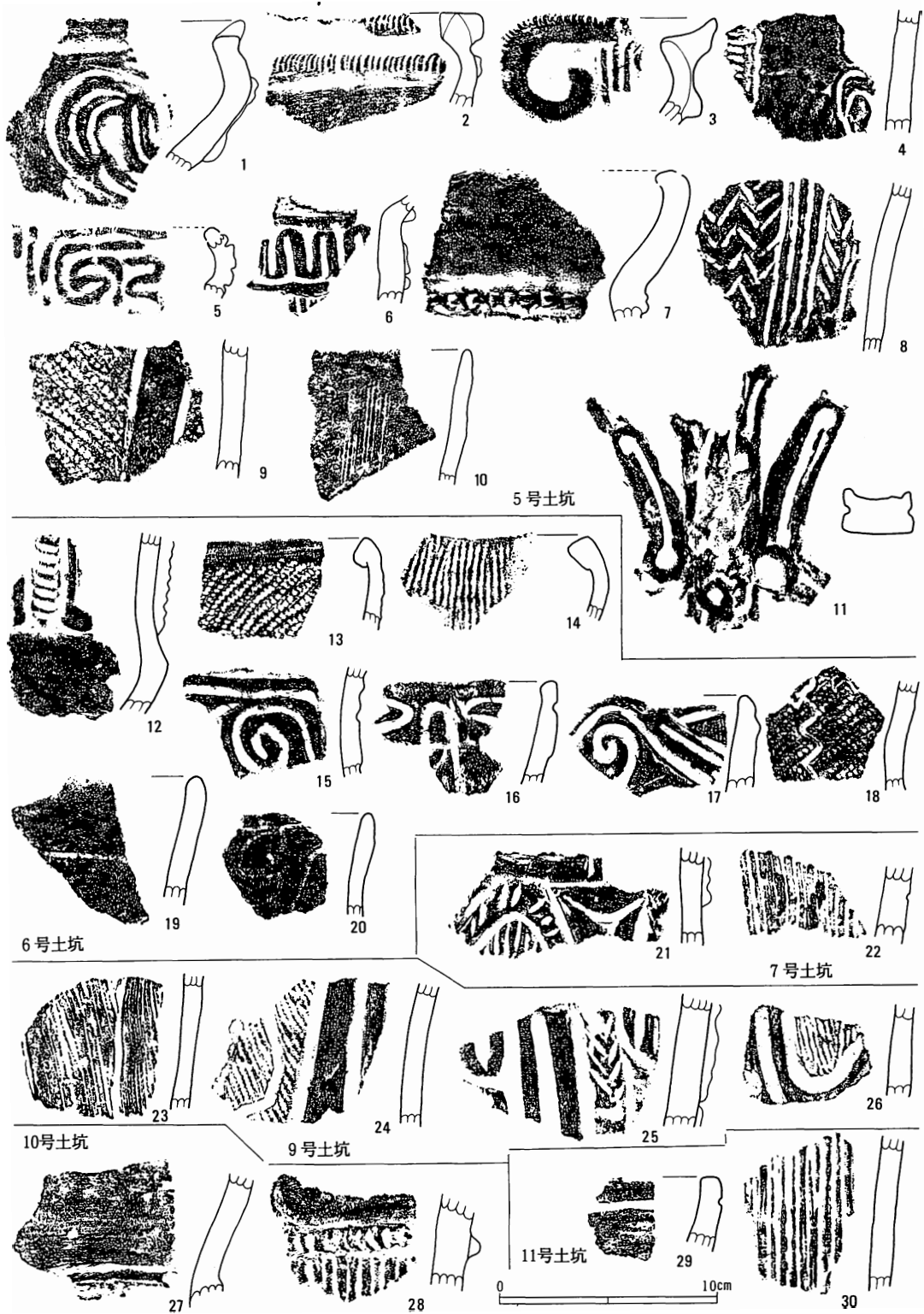
第42图 第2地区土坑群实测图 (1/40)



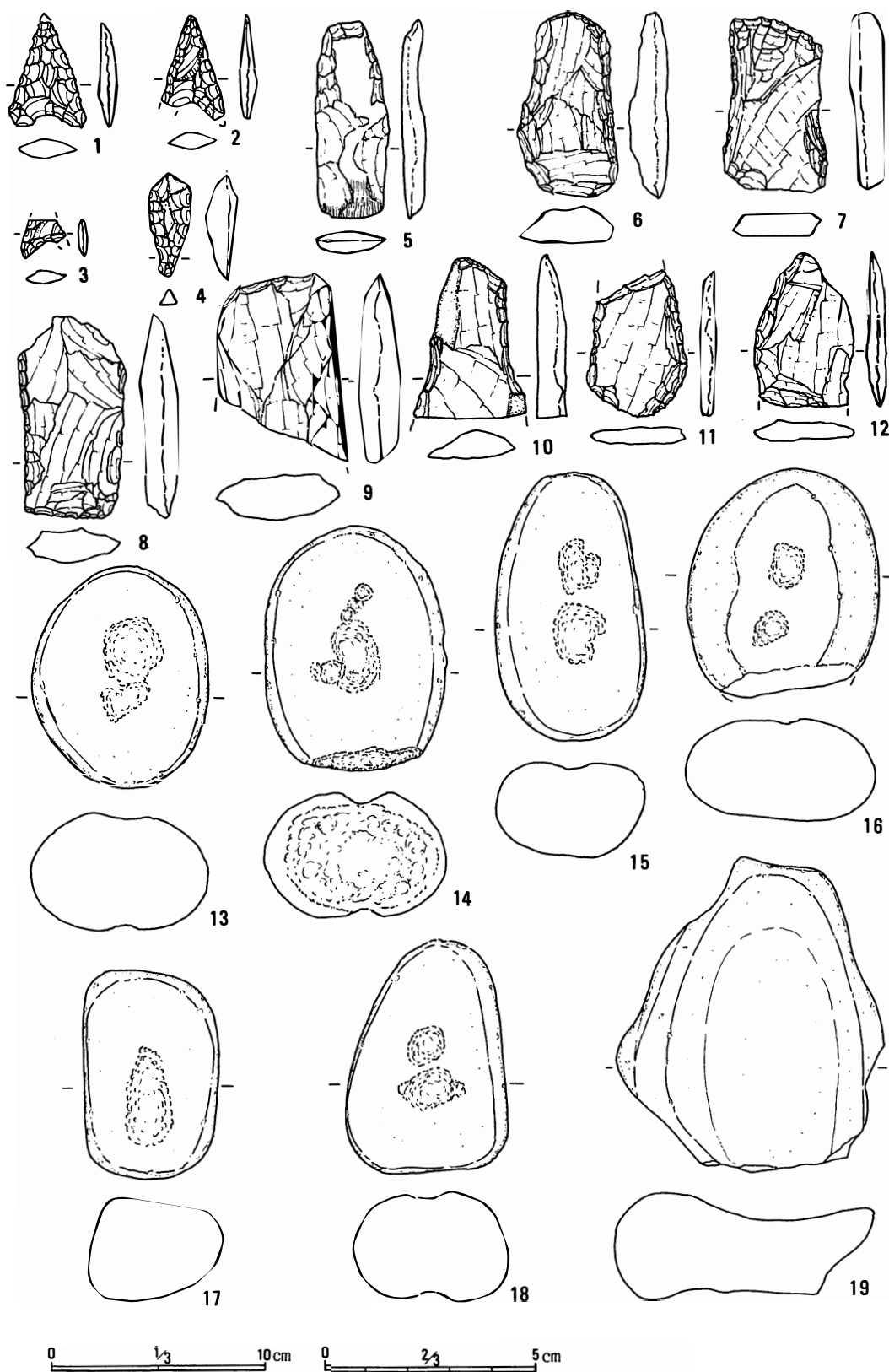
第43图 第2地区出土土器 (1 / 4)



第44图 第2地区1号址·土坑出土土器拓图(1/3)



第45图 第2地区土坑出土土器拓图(1/3)



第46图 第2地区出土石器 1~5 = 2/3 ; 6~19 = 1/3

出土土器（第45図21・22）

21は中期中葉、22は中期後葉の土器。

8号土坑（第42図）

D-4グリットで検出された。長軸1mの不整円形で深さ50cmを測る。断面は円筒状を呈し、坑底中央で柱穴が検出された。確認面で礫がまとまって出土したが、覆土から図示できるような遺物が出土していない。

9号土坑（第42図）

D-4グリットで検出された。直径1mの円形で、深さ70cmを測る。断面はたらい状を呈す。出土土器は中期中葉から後葉にかけてのものだが若干の時期差が認められる。

出土土器（第45図23～26）

25・26は中期中葉、23・24は後葉の土器。

10号土坑（第42図）

E-4グリットで検出された。直径1m、深さ60cmを測る円筒状を呈し、西側ではたらい状を呈す楕円形の土坑が検出された。本址も1・2号土坑と同様な切り合い状況を呈しており、2基の土坑に有機的な関係があったことを想起させる。

11号土坑（第42図）

C-4グリットで検出された。直径1.2m、深さ50cmのたらい状を呈す土坑である。出土した土器から本址の時期を推測するのは難しい。

出土土器（第45図29・30）

29は沈線が横走するもので3群3類ないし4群6類であろうか。30は中期後葉の土器。

その他（第43図5・6）

第43図5は6号土坑と7号土坑との最上層から出土したもの。口縁部と胴部の一部を欠く。口縁部の沈線区画は7単位。色調は赤褐色。6はD-4グリットから出土した深鉢形土器。沈線区画内にはハ字文が連続する。上部を欠損。5・6とも正位の状態で検出されたもので、埋甕であろうか。どちらとも3群3類。

2地区出土石器（第46図）

2地区では遺構、遺構外含めて、石鏃3点、錐器1点、磨製石斧1点、打製石斧7点、磨石6点、石皿1点が出土している。5は長さ4.6cm、幅1.7cmを測る小型のもので、基部から側縁にかけて打調整痕が残る。

第1表 第1地区石器観察表

番号	地区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図版-No
1	2号址	石鏃	1.3	0.1	0.3	0.3	黒曜石	11-1
2	2号址	石鏃	1.6	1.2	0.3	(0.5)	黒曜石	11-2
3	2号址	石鏃	(2.0)	1.2	0.2	(0.7)	黒曜石	11-3
4	2号址	石鏃	(1.5)	1.1	0.4	(0.4)	黒曜石	11-4
5	2号址	石鏃	(1.4)	0.9	0.2	(0.4)	黒曜石	11-5
6	2号址	石鏃	(1.2)	0.7	0.2	(0.3)	黒曜石	11-6
7	2号址	石鏃	1.6	0.8	0.3	(0.3)	黒曜石	11-7
8	2号址	石鏃	2.1	0.9	0.3	(0.4)	黒曜石	11-8
9	2号址	石鏃	1.2	1.1	0.3	(0.2)	黒曜石	11-9
10	2号址	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.5	黒曜石	11-10
11	2号址	石鏃	1.4	1.5	0.5	0.8	黒曜石	11-11
12	2号址	石鏃	1.8	1.8	0.5	1.7	黒曜石	11-12
13	2号址	石鏃	2.2	1.6	0.6	1.7	黒曜石	11-13
14	2号址	石鏃	1.9	(0.7)	(0.3)	(0.5)	黒曜石	11-14
15	2号址	石鏃	2.1	1.5	0.7	1.6	黒曜石	11-15
16	2号址	楔形	1.8	1.4	0.4	1.2	黒曜石	11-16
17	2号址	R F	2.9	1.5	0.5	2.5	黒曜石	11-17
18	2号址	錐器	3.7	1.5	1.7	4.3	黒曜石	11-18
19	2号址	錐器	2.1	2.0	0.6	2.4	黒曜石	11-19
20	2号址	楔形	1.8	1.9	0.7	2.5	黒曜石	11-20
21	2号址	楔形	1.3	1.3	0.3	0.6	黒曜石	11-21
22	2号址	石核	4.0	3.1	3.2	17.6	黒曜石	11-22
23	2号址	打斧	10.1	6.3	1.6	120.0	粘板岩	11-23
24	2号址	磨石	(6.8)	8.5	3.9	(260.0)	輝石安山岩	11-24
25	2号址	石鏢	6.2	3.2	3.5	99.1	輝石安山岩	11-25
26	2号址	石鏢	2.0	0.9	0.6	1.1	輝石安山岩	11-26
27	2号址	石鏃	1.9	9.5	0.3	0.5	黒曜石	12-27
28	2号址	石鏃	1.8	0.9	0.3	(0.5)	黒曜石	12-28
29	2号址	石鏃	(1.7)	(1.0)	0.2	(0.5)	黒曜石	12-29
30	2号址	石鏃	1.6	0.9	0.3	(0.3)	チャート	12-30
31	2号址	石鏃	1.7	0.9	0.3	(0.6)	黒曜石	12-31
32	2号址	錐器	1.5	0.3	0.2	0.6	黒曜石	12-32
33	2号址	錐器	2.2	0.3	0.3	0.5	黒曜石	12-33
34	2号址	楔形	1.3	1.0	0.4	0.3	黒曜石	12-34
35	2号址	R F	1.4	1.4	0.5	0.8	黒曜石	12-35
36	2号址	楔形	1.5	1.2	0.5	0.8	黒曜石	12-36
37	2号址	R F	2.1	1.4	0.5	1.4	黒曜石	12-37
38	2号址	R F	2.4	1.3	0.7	1.4	黒曜石	12-38
39	2号址	原石	2.1	2.1	0.6	4.4	黒曜石	12-39
40	2号址	打斧	23.7	16.3	7.1	440.0	頁岩	12-40
41	2号址	打斧	14.9	8.7	1.9	320.0	砂岩	12-41
42	2号址	打斧	(8.4)	9.2	2.3	200.0	砂岩	12-42
43	2号址	磨石	12.4	9.9	6.2	100.0	輝石安山岩	12-43
44	2号址	磨石	(6.8)	7.4	(6.1)	(460.0)	輝石安山岩	12-44
45	2号址	凹石	(10.6)	(6.9)	(10.0)	(600.0)	角閃石輝石安山岩	12-45
46	4号址	砥石	16.0	18.5	7.3	3920.0	頁岩	17-1
47	5号址	石鏃	1.3	0.7	0.3	(0.4)	黒曜石	22-1
48	5号址	石鏃	1.3	0.8	0.3	(0.3)	黒曜石	22-2
49	5号址	石鏃	(1.2)	0.7	0.2	(0.2)	黒曜石	22-3
50	5号址	石鏃	1.5	0.8	0.3	0.2	黒曜石	22-4
51	5号址	石鏃	2.0	0.7	0.3	0.3	黒曜石	22-5
52	5号址	石鏃	1.8	0.8	3.0	0.4	黒曜石	22-6
53	5号址	石鏃	1.5	0.9	0.3	(0.4)	黒曜石	22-7
54	5号址	石鏃	(2.7)	(0.9)	0.3	(0.8)	黒曜石	22-8
55	5号址	石鏃	2.1	1.5	0.4	1.1	黒曜石	22-9
56	5号址	錐器	2.7	1.0	0.7	1.8	黒曜石	22-10
57	5号址	錐器	2.3	0.9	0.5	1.6	黒曜石	22-11
58	5号址	R F	2.5	7.5	0.4	1.0	黒曜石	22-12
59	5号址	楔形	1.3	1.2	0.5	0.8	黒曜石	22-13
60	5号址	楔形	2.6	1.5	0.6	3.1	黒曜石	22-14
61	5号址	原石	2.9	1.1	0.5	1.2	黒曜石	22-15
62	5号址	原石	3.1	3.3	2.3	26.4	黒曜石	22-16
63	5号址	原石	5.0	2.5	1.9	18.4	黒曜石	22-17

番号	地区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図版 - No.
64	5号址	RF	5.3	6.4	1.3	39.4	黒曜石	22-18
65	5号址	磨石	10.0	7.5	7.8	840.0	輝石安山岩	22-19
66	5号址	磨斧	7.5	3.5	2.2	110.2	緑色岩	22-20
67	5号址	打斧	12.1	6.5	2.0	219.4	砂岩	22-21
68	5号址	打斧	18.3	11.6	3.4	680.0	砂岩頁岩互層	22-22
69	5号址	礫器	18.3	12.7	3.5	1460.0	砂岩	22-23
70	6号址	石鏃	(1.1)	0.6	2.5	(0.2)	黒曜石	29-1
71	6号址	石鏃未	1.7	1.0	0.5	0.9	黒曜石	29-2
72	6号址	錐器	2.0	0.9	1.0	1.1	黒曜石	29-3
73	6号址	楔形	1.6	1.0	0.8	2.3	黒曜石	29-4
74	6号址	石槍	(3.9)	1.6	0.8	(4.8)	チャート	29-5
75	6号址	磨斧	6.3	3.8	1.5	76.5	緑色岩	29-6
76	6号址	磨石	13.4	7.6	6.0	980.0	輝石安山岩	29-7
77	7号址	石鏃	1.7	0.9	0.3	(0.4)	黒曜石	29-8
78	7号址	石鏃	(1.3)	(1.1)	0.4	(0.4)	黒曜石	29-9
79	7号址	石鏃	(1.4)	1.5	0.3	(0.5)	黒曜石	29-10
80	7号址	錐器	2.0	0.3	0.2	1.1	黒曜石	29-11
81	7号址	楔形	2.1	0.9	0.6	1.1	黒曜石	29-12
82	7号址	横刃石器	(7.1)	(9.3)	1.0	(84.6)	輝石安山岩	29-13
83	7号址	打斧	(7.0)	3.6	1.5	(45.1)	砂岩	29-14
84	7号址	磨石	10.0	7.8	5.0	450.0	輝石安山岩	29-15
85	7号址	凹石	19.7	13.5	9.0	3140.0	輝石安山岩	29-16
86	8号址	磨石	10.7	8.2	4.8	480.0	輝石安山岩	29-17
87	8号址	石皿	8.6	10.7	5.5	630.0	輝石安山岩	29-18
88	8号址	磨石	6.8	8.0	4.4	510.0	輝石安山岩	29-19
89	8号址	楔形	2.9	1.5	0.5	2.0	黒曜石	29-20
90	表探	石鏃	0.8	0.5	0.2	0.1	黒曜石	37-1
91	E-23	石鏃	(1.1)	0.8	0.3	(0.1)	黒曜石	37-2
92	表探	石鏃	(1.3)	0.7	0.1	(0.2)	黒曜石	37-3
93	E-30	石鏃	1.4	0.6	0.2	(0.2)	黒曜石	37-4
94	D-10	石鏃	(1.5)	(0.7)	0.3	(0.3)	黒曜石	37-5
95	表探	石鏃	(1.3)	0.7	0.2	(0.2)	黒曜石	37-6
96	表探	石鏃	(1.7)	1.0	0.4	(0.5)	黒曜石	37-7
97	C-22	石鏃	(1.7)	0.9	0.3	(0.4)	黒曜石	37-8
98	E-27	石鏃	(1.1)	0.6	2.5	(0.2)	黒曜石	37-9
99	D-22	石鏃	1.5	1.1	0.3	0.4	黒曜石	37-10
100	E-23	石鏃	1.7	1.0	0.2	(0.3)	黒曜石	37-11
101	C-26	石鏃	1.5	1.0	0.4	0.6	黒曜石	37-12
102	表探	石鏃	(2.1)	1.0	0.2	(0.4)	黒曜石	37-13
103	表探	石鏃	2.0	1.4	0.4	(0.7)	黒曜石	37-14
104	C-21	石鏃	(1.8)	1.4	0.3	(0.7)	黒曜石	37-15
105	D-23	石鏃	1.7	1.1	0.4	0.6	黒曜石	37-16
106	E-31	石鏃	(1.5)	1.1	0.3	(0.4)	黒曜石	37-17
107	表探	石鏃	(1.6)	1.3	0.3	(0.7)	黒曜石	37-18
108	C-24	石鏃	1.8	(1.2)	0.4	(0.7)	黒曜石	37-19
109	D-21	石鏃	1.4	1.0	0.4	0.4	黒曜石	37-20
110	D-22	石鏃	(1.2)	1.1	0.3	(0.3)	黒曜石	37-21
111	E-23	石鏃	2.0	1.0	0.2	(0.5)	黒曜石	37-22
112	D-23	石鏃	1.4	0.8	0.3	0.5	黒曜石	37-23
113	C-27	石鏃	(1.2)	1.2	0.3	(0.5)	黒曜石	37-24
114	E-30	石鏃	(1.0)	0.4	0.2	(0.1)	黒曜石	37-25
115	C-23	石鏃	3.2	1.3	0.4	1.0	黒曜石	37-26
116	E-23	石鏃	(2.7)	(1.4)	0.3	(1.0)	黒曜石	37-27
117	E-25	石鏃	(1.4)	1.4	(3.0)	(0.8)	黒曜石	37-28
118	D-18	石鏃	1.7	(1.2)	0.5	(0.9)	黒曜石	37-29
119	D-23	石鏃	1.2	1.0	0.4	0.5	黒曜石	37-30
120	C-21	石鏃	1.9	1.1	0.4	0.6	黒曜石	37-31
121	E-25	石鏃	(1.7)	0.9	0.3	(0.6)	黒曜石	37-32
122	E-30	石鏃	(1.8)	1.4	0.4	(1.0)	黒曜石	37-33
123	D-26	錐器	2.3	0.4	0.3	1.8	黒曜石	37-34
124	D-25	錐器	3.1	0.6	0.5	1.8	黒曜石	37-35
125	E-31	錐器	2.1	0.4	0.4	1.2	黒曜石	37-36
126	D-24	錐器	3.2	0.2	0.1	5.1	黒曜石	37-37
127	D-29	槌器	2.3	1.3	0.5	1.6	黒曜石	37-38

番号	地区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図版-No
128	C-26	搔器	1.4	2.4	0.7	2.3	黒曜石	37-39
129	E-27	石鏃未	2.0	1.7	0.7	2.5	黒曜石	37-40
130	E-25	楔形	1.8	1.4	0.9	1.8	黒曜石	37-41
131	E-29	楔形	2.7	2.3	0.9	4.5	黒曜石	37-42
132	C-23	楔形	2.1	1.9	1.9	3.3	黒曜石	37-43
133	D-27	楔形	2.7	2.2	1.1	5.5	黒曜石	37-44
134	E-27	楔形	2.3	2.3	0.9	3.8	黒曜石	37-45
135	C-21	楔形	2.9	2.0	0.8	5.1	黒曜石	37-46
136	E-25	RF	5.1	2.9	0.8	10.7	黒曜石	37-47
137	E-31	原石	2.9	3.0	2.9	10.3	黒曜石	37-48
138	B-16	打斧	(7.7)	4.8	1.7	(87.1)	ホルンフェルス	38-49
139	E-29	打斧	(7.1)	5.3	1.9	(93.9)	砂岩	38-50
140	B-20	打斧	(7.6)	4.5	1.3	(54.6)	砂岩	38-51
141	D-30	打斧	(7.6)	5.3	1.3	(93.4)	砂岩	38-52
142	E-30	打斧	(10.1)	5.5	1.8	(139.7)	砂岩	38-53
143	F-31	打斧	(9.2)	4.2	2.2	(105.1)	砂岩	38-54
144	C-19	打斧	(9.8)	5.7	2.2	(155.2)	粘板岩	38-55
145	C-24	打斧	13.4	6.8	2.9	58.0	砂岩	38-56
146	D-21	打斧	16.9	7.3	1.7	300.0	砂岩	38-57
147	表採	局磨斧	7.7	5.7	1.3	72.0	粘板岩	38-58
148	D-22	磨斧	(5.4)	3.9	2.5	(93.2)	緑色岩	38-59
149	D-22	磨石	7.5	6.7	4.5	260.0	輝石安山岩	38-60
150	D-20	磨石	11.7	7.6	3.7	360.0	輝石安山岩	38-61
151	C-24	磨石	13.6	7.7	3.2	600.0	角閃石輝石安山岩	38-62
152	D-21	磨石	11.8	6.6	5.7	300.0	輝石安山岩	38-63
153	C-22	磨石	12.2	10.7	5.2	1040.0	輝石安山岩	38-64
154	C-24	磨石	(7.9)	7.4	5.1	(430.0)	輝石安山岩	38-65
155	D-26	磨石	10.2	8.9	5.6	630.0	輝石安山岩	39-66
156	E-31	凹石	19.2	16.7	10.1	4340.0	輝石安山岩	39-67
157	E-21	磨石	7.0	6.4	5.4	340.0	輝石安山岩	39-68
158	E-23	磨石	7.9	6.9	6.0	460.0	輝石安山岩	39-69
159	C-24	磨石	8.5	7.4	6.2	540.0	輝石安山岩	39-70
160	E-26	磨石	8.8	7.5	3.9	440.0	角閃石輝石安山岩	39-71
161	C-24	磨石	10.0	7.9	5.2	500.0	輝石安山岩	39-72
162	D-19	磨石	10.2	10.2	3.8	570.0	輝石安山岩	39-73
163	D-21	磨石	12.1	9.6	7.1	1200.0	輝石安山岩	39-74
164	C-21	磨石	14.2	9.3	7.8	1400.0	角閃石輝石安山岩	39-75
165	E-30	磨石	12.1	6.6	5.0	540.0	角閃石輝石安山岩	39-76
166	D-23	磨石	15.6	8.1	6.1	1060.0	輝石安山岩	39-77

第2表 第2区石器観案表

番号	地区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図版-No
1	G-4	石鏃	(2.4)	1.4	0.4	(1.5)	チャート	46-1
2	E-4	石鏃	2.4	1.2	0.4	(0.8)	黒曜石	46-2
3	G-4	石鏃	(0.9)	1.0	0.3	(0.2)	黒曜石	46-3
4	C-4	錐器	2.4	0.4	0.4	0.5	黒曜石	46-4
5	E-4	磨斧	4.6	1.7	0.5	6.5	緑色片岩	46-5
6	B-3	打斧	8.7	4.6	1.7	78.1	粘板岩	46-6
7	B-3	打斧	(8.2)	4.1	1.1	(91.6)	砂岩	46-7
8	C-4	打斧	(8.8)	0.4	0.4	(140.5)	粘板岩	46-8
9	B-3	打斧	(8.7)	5.7	2.1	(123.5)	ホルンフェルス	46-9
10	3土坑	打斧	(7.3)	5.3	1.3	(56.5)	粘板岩	46-10
11	3土坑	打斧	(10.4)	7.5	5.1	(590.0)	粘板岩	46-11
12	E-4	打斧	(7.1)	4.6	1.0	(35.2)	粘板岩	46-12
13	8土坑	磨石	11.3	8.5	5.7	740.0	輝石安山岩	46-13
14	8土坑	磨石	11.3	8.2	5.5	600.0	輝石安山岩	46-14
15	C-4	磨石	12.4	7.0	4.4	200.0	輝石安山岩	46-15
16	1号址	磨石	()	8.8	4.3	(700.0)	角閃石輝石安山岩	46-16
17	1号址	磨石	9.7	6.2	4.8	550.0	輝石安山岩	46-17
18	5土坑	磨石	6.7	4.4	0.9	586.5	輝石安山岩	46-18
19	1土坑	石皿	(14.7)	(12.0)	4.9	(1040.0)	輝石安山岩	46-19

第4章 遺物および遺構の検討

第1節 第4群土器について

本遺跡からは早期から晩期までの土器が出土したが、ここでは遺跡の主体をなす第4群土器の編年的な位置付けについて検討してみる。この一群は中期終末から後期初頭とみられるものを包括し便宜上1類から10類まで分類したが、複数の型式を含むとともに相伴関係の認められるものもある。以下、各類ごとに検討してみたい。

1類は微隆起文の施されたもので、特にa種は中期終末の加曾利E4式を中心にしながらも称名寺式にまで伴う「加曾利E式系」の土器である。2号址(第10図1・2)、6号址(第24図1・2)、7号址(第26図1~7)、包含層出土(第35図12~15・17)等がある。多くが小破片のため詳細は分からないが7号址6・7、包含層12はゆるく括れるキャリパー状の深鉢形土器で中期終末のものであろう。6号址2、7号址2・3は括れない内湾気味に立ち上がる器形の土器と思われるが、この種の土器は後期初頭までみられるものであり時期は断定できない。同様の器形である包含層13~15は中期であろう。包含層出土の17は平行する微隆起文間に二列、口縁部に一列連続する円形刺突文や、楕円状の貼り付け文を特徴とする波状口縁の深鉢形土器である。この土器は口縁部破片であることから胴部文様帯の状況は不明であるが、石坂氏等が注目した「加曾利E式系土器3期B3・B4類型」(註1)に共通した土器と思われるものであろう。この「3期B3・B4類型」はⅡa文様帯に「無文の渦巻き」や「縄文を充填したU字」状のモチーフで装飾される土器で、加曾利E式系が「東北地方南部の土器群の要素を摂取」および「称名寺式の平行描線手法を採用」するなかで形成された土器とされるものである。17はこの内のB3類型Ⅱ段階ないしⅢ段階に該当するものと思われる。時期的には石坂氏はⅡ段階を称名寺式第2~3段階、Ⅲ段階を同4~5段階(註2)とされている。称名寺I式中~新段階ということであろうか。他に加曾利E式系とみられる土器に2類および3類の一部がある。2号址(第10図3・4)、5号址(第20図7)、6号址(第24図6)、7号址(第26図8)、包含層(第35図26)にみるような口縁無文で以下横沈線・縄文帯と続く施文の深鉢形土器である。これらも中期末を中心としながらも一部は後期初頭にまで残るものであろう。特に3類に含めた6号址6は称名寺I式でも新段階の土器とみられる。

1類b種には無文ながら微隆起を持つ土器を包括したが、このうち5号址出土(第28図1)の瓢形注口土器(註3)は特徴的なものである。包含層出土(第35図16)も小破片ながら同様の破片であろう。人体文風に繋がる微隆起と、対になった横位橋状把手を特徴としている。この種の土器については丹野氏や鈴木氏らにより考察されており、江原台103号住居出土の有孔鏝付注口土器を祖形としながら後期注口土器までの展開がとらえられている。ただし時期については相伴遺物が顕著ではなく、中期終末から後期初頭の中に入るものの検討すべき点があるように思われる。微隆起文からすると丹野氏の指摘のとおり加曾利E終末期とできるが、これまでみたように称名寺式にあっても加曾利E式系が続いているとみられ、瓢形土器についても検討が必要であろう。鈴木氏は口端部の形態変化により中期から後期への変遷をたどったが、本遺跡5号址1の口端部の立ち方は中期の江原台よりも内傾しており、鈴木氏が称名寺式中頃とした

雉子ヶ原例に近い感がある。また江原台例を始めとして微隆起による渦巻き文は上部と下部とが括れ部を境に分離し、特に下半部の渦巻き4個がそれぞれ独立しているものが多いのに対して、本例は上下繋がるとともに下部の二つの単位も連なり左右に跳ね上がるように渦巻いている。このような文様は白銀遺跡(日進)や多摩ニュータウンNo.3遺跡例から展開した可能性もある。さらに沈線ながら三光遺跡の堀之内式期注口土器にみる文様にまで連なるのかもしれない。このような点を考慮すると本例も称名寺式期中でとらえることもでき、共伴する3類土器(第20図1)と同様の時期とすることが可能であろう。なお本例は器高12.8cmと小型で胎土は粗く器面粗雑であり、この種の土器が概ね20cm以上で丁寧な作りであるのと異なっている。破片で出土した第35図16は薄手で丁寧な作りである。これらの土器の性格・用途を考えるうえでも注意すべきであろう。なお、本類には第28図6の蓋も含まれる。高いつまみとそこから延びる隆起文が特徴である。蓋は堀之内式や三十稲葉式の壺や注口土器にみられるが、さきの瓢形の種類にも当然伴うものであり、本例も称名寺式期の可能性があろう。

3類土器は、5号址(第20図1~6)、7号址(第26図12~16)、包含層(第35図20~22)などを代表とする。特に5号址1は波状口縁の深鉢形土器でJ字とS字文との組合せを基調とし、「横位連繫帯」はすでに認められない。これらは称名寺I式の新段階とみることができ、ほかも概ねこの時期であろう。5類土器は沈線と列点文を特徴としたもので2号址(第10図14・15)、6号址(第24図11~18)、包含層(第35図23・24)等がある。これらは称名寺II式である。列点は伴わないものの6号址(第24図20~24)、7号址(第26図23~25)等の6類a種も新しい段階ながら同じく称名寺II式に比定できよう。b種については堀之内I式まで下がるものもあろう。

8類とした第28図3の小型壺形土器は、2単位の橋状把手とその間の列点のある隆帯を特徴とした土器である。橋状把手と器形からは三十稲葉式との脈絡が窺われるが、この型式最盛期の壺は4単位の橋状把手が一般的とされ、2単位はその直前型式に多いようであり(註4)、併行する時期の問題も含め本例の系統は課題でもある。ここでは列点文に留意し称名寺II式併行期に位置付けておく。その他特徴的な土器に7類の包含層出土(第28図4)を始めとした楡歯状沈線の土器がある。中期終末から後期初頭まで継続するものと思われるが、第28図4は口縁形態から称名寺式期に含められようか。

以上特徴的な土器についての位置付けを検討してみたが、4群土器は中期終末を多分に含みながらも称名寺式期が中心になっているようである。これらの細かい編年的位置付けについては今後の課題としたい。

註

- 1 石坂 茂、藤巻幸男、桜岡正信「縄文時代後期初頭における加曾利E式系土器の様相」『群馬県史研究』34 1991
- 2 称名寺式土器について石坂氏は鈴木徳雄氏の編年を取り入れている。鈴木徳雄「称名寺・堀之内I式研究の諸問題」『縄文後期の諸問題』第4回縄文セミナー 1990
- 3 この種の土器は「瓢箪形注口土器」(丹野氏)、「瓢形注口土器」(鈴木氏)などと呼ばれている。ここでは後期後葉と同じに瓢形(ヒサゴガタ)と呼んでおく。丹野雅人「注口土器小考」—縄文時代中期終末期における様相—『研究論集』Ⅲ、東京都埋蔵文化財センター 1985 鈴木徳雄「縄文後期注口土器の成立—形態変化と文様帯の問題」『縄文時代』3 縄文時代文化研究会 1992
- 4 國島 聡「後期初頭・前葉の土器群」『縄文後期の諸問題』第4回縄文セミナー 1990

第2節 検出された遺構について

川又坂上遺跡では縄文・古墳・平安・中世～近世にかけての遺構が検出されており、数時期の断絶があるものの、本遺跡が長期にわたり機能していた複合遺跡であることが分かった。なかでも縄文時代の遺構はその主体を占めるものであり、本節で若干検討を加えることとした。

第2号址は直径約3mの円形の範囲で後期初頭、称名寺式に比定される土器片とともに2,000点近い黒曜石の剥片・碎片、黒曜石の原石、多種にわたる石器が出土した遺構である。これらの遺物は遺構底面から若干浮いた状態で出土する傾向がみられた(第9図)。このような石器を中心とする多量の遺物が出土する状況について近年、三上氏が長野県の住居址出土例を用いて考察している(註1)。三上氏は集成した事例から石器の出土状況が土器の出土状況から提唱された吹上パターン(註2)と同様なあり方を示し、出土した石器のなかで「機能とそれともなう本来の形を推定しやすい磨製石斧」がほとんど使用不可能品であったこと、おびただしい数の無欠損・欠損の石鏃、剥片、碎片が出土していることから石鏃の一括廃棄を想定し、その背景には石鏃製作が一定期間内に集中的に行われたと考え、無欠損で出土した石鏃は新たに多量の石鏃を製作するまで、繰り返し補修された最終的な姿で廃棄されたと考察している。本址でみられる黒曜石製の多量の剥片・碎片・石鏃の一括出土も、三上氏の指摘する石鏃の一時期における多量製作の結果、廃棄されたものとして理解できると思われる。他の石器についてもほぼ同レベルから出土していることを考慮すると、石鏃や剥片・碎片とともに廃棄されたものと考えられるが、石鏃以外の黒曜石製石器については石鏃と同時期に多量製作した可能性を有している。黒曜石以外のものでは、一見完形品と思われるものが含まれており、これらの石器について石鏃と同様に完形品の概念(註3)を再検討する必要がある。いずれにしても本址は石鏃を中心とした黒曜石製石器製作に関連した遺構として捉えられ、本址あるいは付近で製品が製作されていたことを示す事例となろう。なお、本址の西側で凹部を有す大型礫が検出されており(第30図)周辺からは中期末から後期初頭の土器片が出土していることから、両者に有機的な関係があったことが推測できる。

5号址は柄鏡形を呈す敷石住居であるが、敷石は基部のみ残存していた。本来は他の箇所にも石が敷かれていたと思われるが、本址が廃絶される際に持ち運ばれたものと推測される。仮に全面敷石がなされていたとすれば、本址から出土した遺物(第19図)はそのほとんどが敷石を持ち運んだ後に廃棄されたものと思われ、2号址同様個々の遺物について再検討する必要がある。例えば、炉址周辺で出土した瓢形注口土器(第28図1)と称名寺式の深鉢形土器(第20図1)は床から若干浮いたほぼ同レベルで出土しており、上記した仮説からすれば同時期に廃棄されたものとして解釈でき、系統の異なる土器の共存関係が明示され、注目されよう。ただ、本遺跡の存在する中部地域における中期末から後期初頭の編年は資料等の制約もありいまだ不明瞭な点が多い。類例の蓄積を待ち改めて両者に型式学的検討を加え、縦の序列と横の繋がりを考え、再評価する必要がある。また、当該期の柄鏡形住居は基部、張り出し部に埋甕を持つものが多いが、本址では検出されていない。柱穴も基部にみられる対ピットや、壁際を巡るものが不明瞭であった。柱穴に関しては遺構確認面が暗褐色粘土層ということもあり、検出困難であったことは否めない。

6号址は出土した土器(第24図)から5号址より若干新しい遺構として捉えられるが、大枠では後期初頭称名寺式の範疇で捉えられるものである。本址が当該期の住居址であれば、本来5号址同様敷石を持つ柄

鏡形を呈し、炉も石囲いとなっていたと思われるが、住居に用いられたであろう石は炉址の西側で1点検出されただけである。張出部と思われる掘り込み、柱穴、埋甕等の施設も不明瞭で、住居址として認め難い点もあるが、炉址を中心に遺物の集中がみられること（第4図）遺構確認面が5号址同様、暗黄褐色粘土層で柱穴等で検出困難であったことからプランの推定ラインを引いたものである（第23図）。

7号址は一部調査区外へ延びるものの方形柱列として捉えられよう。柱穴はいずれも掘り方がしっかりしており、柱穴底面に柱痕を思わせる落ち込みが確認されたものもある。本址には地床炉が伴っており、周辺から壺形を呈す小型土器（第28図3）が出土している。その形態と文様は後期初頭新潟県から福島県を中心に分布する三十稲葉式の影響を受けたものと考えられ、本址の時期決定遺物となろう。本址のように地床炉を持つ方形柱列で後期に比定されるものは、神奈川県三の丸遺跡（註4）で加曾利B1式期のものが1棟検出されている。時期は不明だが県内でも甲原遺跡（註5）で地床炉を伴ったものが1棟検出されているが、その形態は六角形となる。

8号址は段状遺構に一部削平されているものの掘り込みのしっかりした竪穴状遺構である。炉址等の施設が検出されなかったことから住居址ではないだろう。出土した土器から中期後葉の曾利I式期の遺構である。本址はローム層の堆積する西側尾根から斜面に構築されており、谷部に構築された2・5・6・7号址とはその立地を異にする。調査区北端で検出された埋甕（第28図8）も本址とほぼ同時期であり埋設された場所もローム層の堆積する尾根の斜面部で8号址と共通する。

第2地区は尾根上の調査区で全面にローム層が堆積する。土坑群が検出された主な遺構となるが、中期中葉から後葉に比定されるものが多く後期初頭の遺構は1・6号土坑の2基となる。両者はいずれも称名寺式期に否定されるが、1号土坑が若干古い様相を呈す。

以上1・2地区の主だった縄文時代の遺構を概観してきたが、遺構の構築される場所が時期により異なる傾向が窺える（第47図）。1地区では土石流によって形成された谷の暗黄褐色粘土層上に中期末から後期初頭の遺構が検出されるのに対し、ローム層の堆積する尾根の斜面部では中期後葉曾利I式期の遺構が検出される。2地区は尾根上に存在し、全面にローム層が堆積する調査区であるが、中期中葉から後葉の遺構がその主体を占め、後期の遺構は客体的な存在である。この様な時期差による遺構立地の傾向を、道路幅の限られた面積の調査で指摘するのは危険であるが、その要因として時代背景を考えたい。中期末から後期初頭という時期は山梨県内で隆盛を誇った曾利式文化が終焉を迎え、関東の加曾利E式の影響を受け、更に称名寺式という新たな土器を受容する時期である。時をほぼ同じくして柄鏡形住居が出現し生活形態にも大きな変化がおき、一つの大きな画期とされる時期であり、この様な状況が上記した傾向に少なからず影響しているものと考えられる。特に1地区にみられる中期末から後期初頭の多種にわたる遺構群はほぼ同時期に存在し、互いに有機的な関係を持っていたと考えられ、本遺跡の存在する八ヶ岳南麓における当該集落の立地を考える上で好資料を提示できたと考えられる。

註

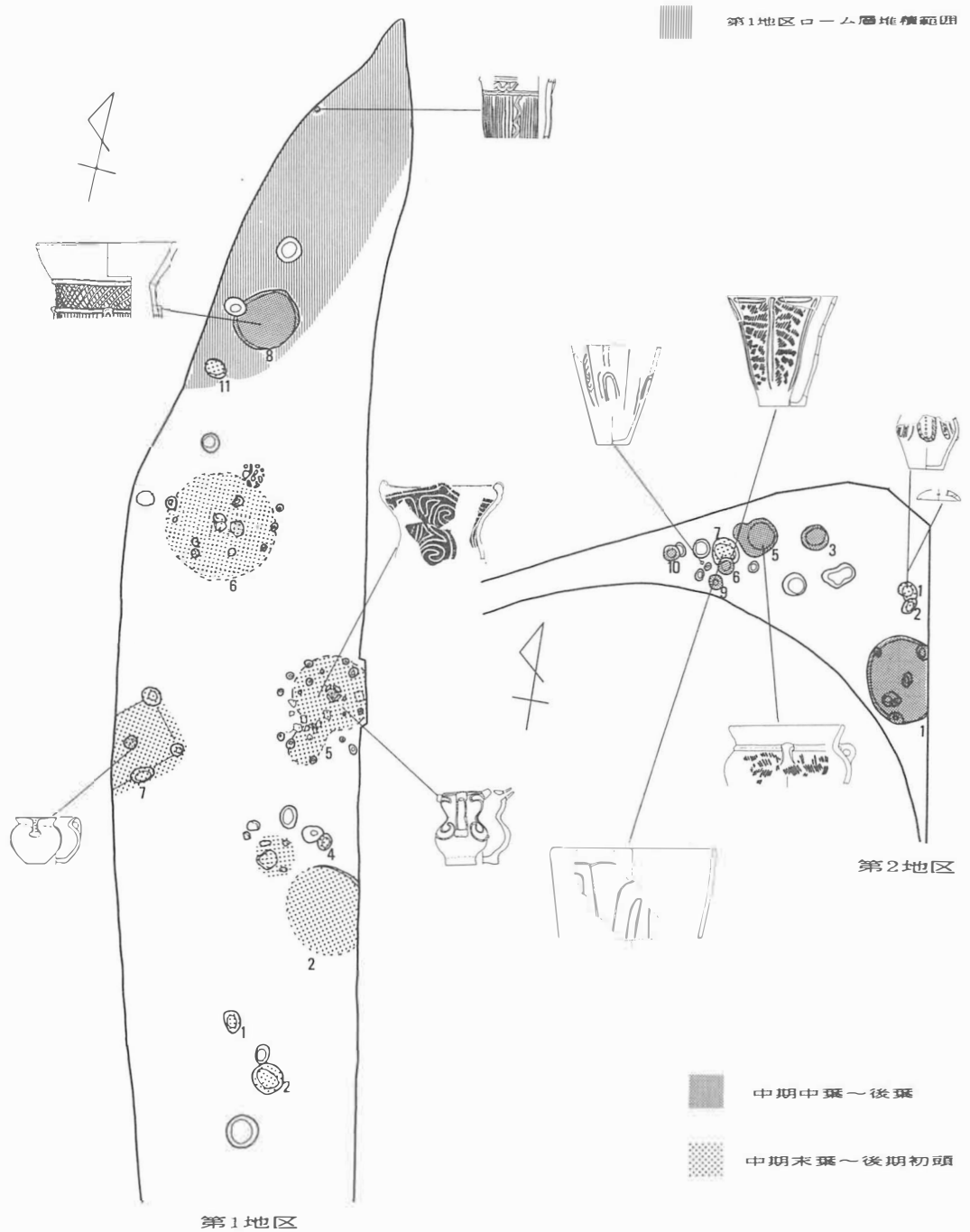
註1 三上徹也 1990 「縄文時代における「完形品」の概念について—石鏃を例とした考古学的資料批判の試論的実践—」『縄文時代1号』縄文時代文化研究会

註2 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93

註3 註1に同じ

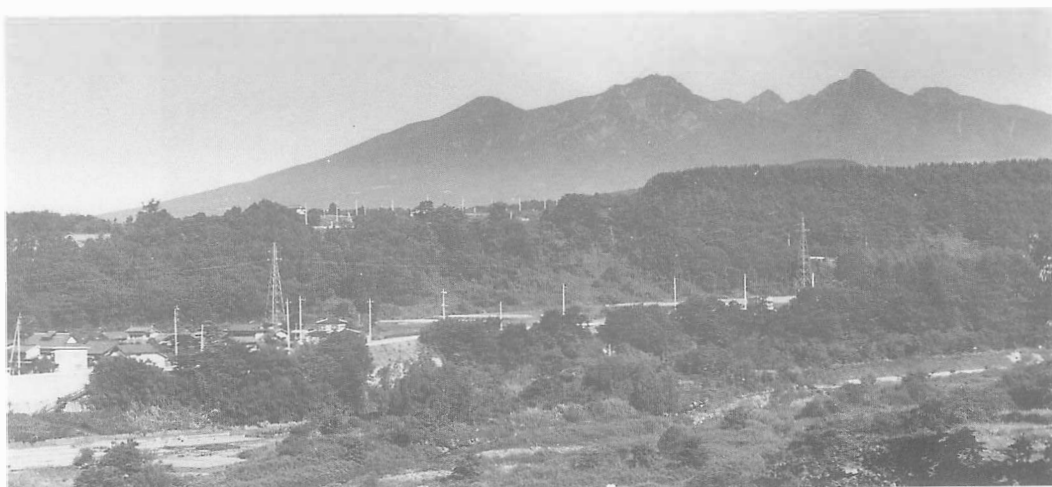
註4 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1985 「三の丸遺跡調査概報」 『港北ニュータウン地域
内埋蔵文化財報告VI』

註5 山梨県教育委員会 1992 「甲ヶ原遺跡概報I」



第47図 川又坂上遺跡縄文時代遺構配置図

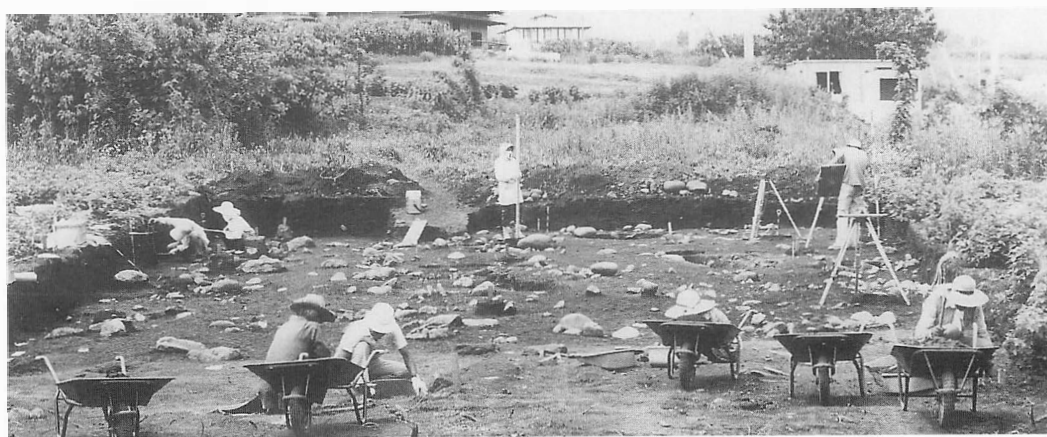
版 図



1. 遺跡遠景（東南より）



2. 遺跡近景（北より）

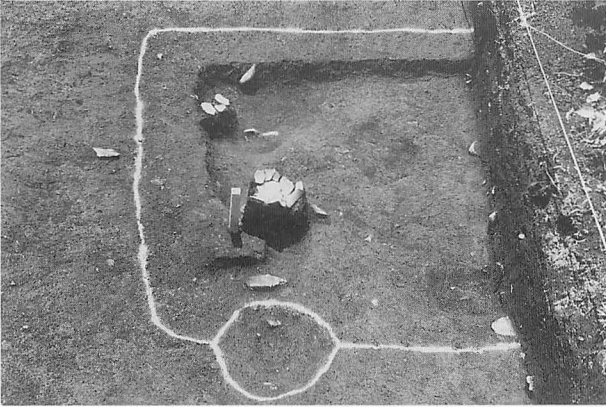


3. 発掘中の遺跡（南より）

第1区



1. 第1号址



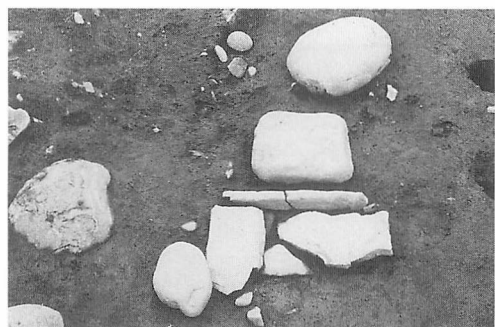
2. 第3号址



3. 第4号址



1. 第5号址全形



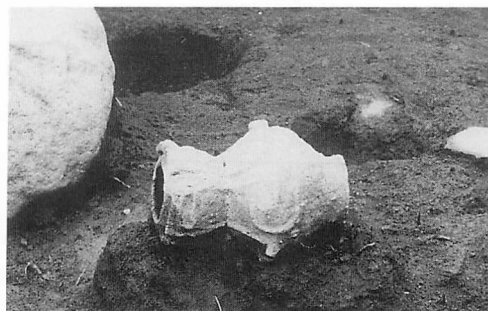
2. 敷石(部分)



3. 西方より



4. 炉周辺



5. 土器出土状況

第1区



1. 第2号址



2. 第6号址

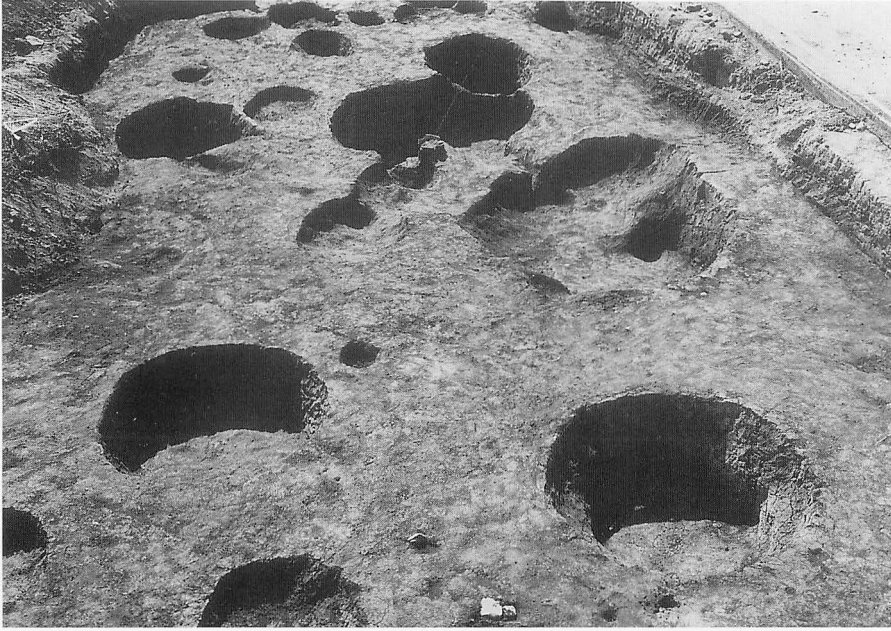


1. 第7号址



2. 第8号址（手前）と道路状遺構

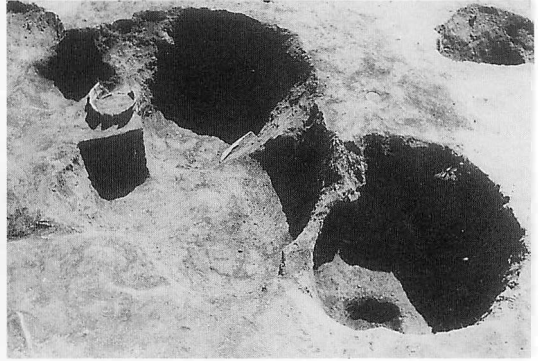
第2区



1. 土坑群



2. 第1号址



3. 6号~8号土坑



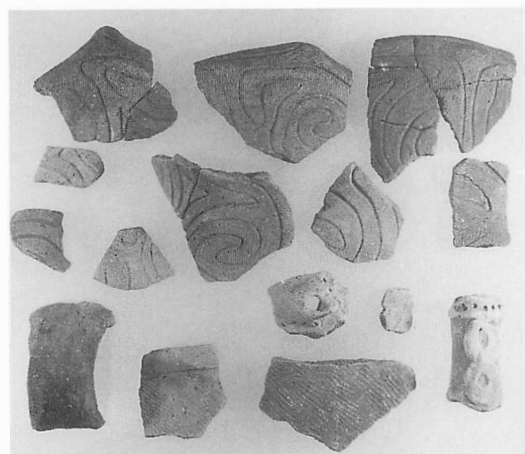
4. 3号土坑



5. 6号土坑上面土器



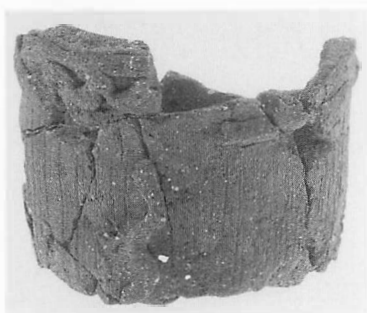
5号址出土瓢形注口土器



5号址出土土器



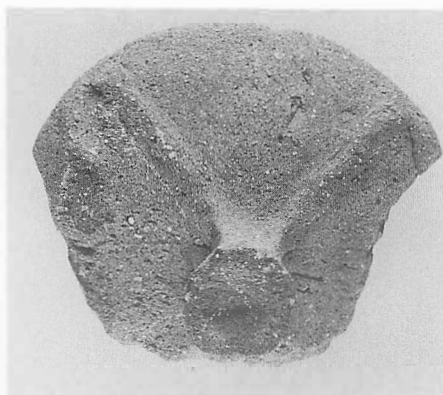
7号址出土土器



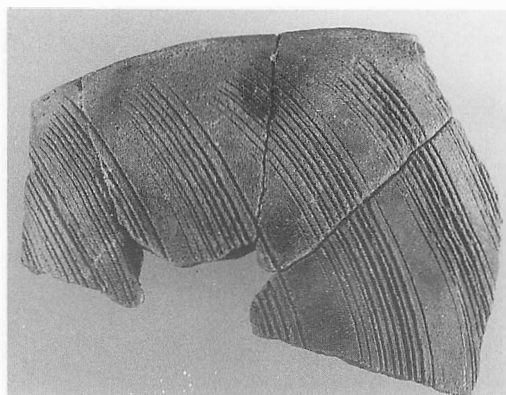
E-31グリット出土土器



8号址出土土器



C-21グリット出土蓋



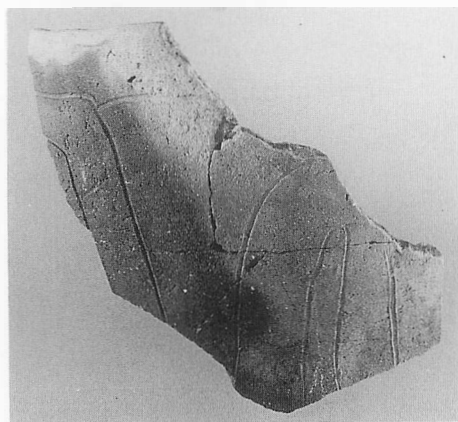
D-21グリット出土土器



第2地区6号土坑上面出土土器



第2地区D-4グリット出土土器



第2地区6号土坑出土土器



第2地区1号土坑出土土器

報 告 書 概 要

フリガナ	カワマタサカウエイセキ	
書名	川又坂上遺跡	
副題	八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第75集	
著者名	新津 健・三田村美彦	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県農務部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下首根923 〒400-15 0552-66-3881	
印刷所	(株)峡南堂印刷所	
印刷日・発行日	平成5年3月25日・平成5年3月31日	
川又坂上遺跡 <small>カワマタサカウエイセキ</small>	所在地	山梨県北巨摩郡高根町大字箕輪・箕輪新田
	25000分の1地図名・位置・標高	若神子 北緯35° 45' 東経138° 24' 標高700m
概 要	主な時代	縄文時代早・前・中・後・晩期、古墳時代、平安時代
	主な遺構	縄文時代後期の住居址2軒(称名寺期の敷石住居)石器集中址(称名寺期)建物址 (中期末から後期初頭) および土坑30基、平安時代住居址2軒
	主な遺物	縄文早・前・中・後・晩期土器、石器(打製・磨製石斧・石鏃・石錐・石皿・磨石 凹石・石錘・砥石・楔形石器・石核・石槍)古墳・平安時代須恵器・土師器
	特殊遺構	石器集中址
	特殊遺物	瓢形注口土器
調査期間	1992年5月11日～9月30日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第75集

1993年3月25日 印刷

1993年3月30日 発行

川又坂上遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
TEL 0552-66-3881

発行 山 梨 県 教 育 委 員 会
印刷 ㈱ 峡南堂印刷所

